

京都市内遺跡試掘調査報告

平成 2 0 年 度

2 0 0 9 年 3 月

京 都 市 文 化 市 民 局

ご あ い さ つ

昨年は、源氏物語千年紀という記念すべき年を迎え、京都をはじめ、日本各地で記念の催しが開かれました。物語は都を舞台として繰り広げられています。この都こそ、桓武天皇によって、延暦13年（794）に建都された平安京であり、現在の京都の原点といえるものです。京都は、その後政治、宗教、経済、文化の中心として、数多くの文化財を現在に伝えています。地中に眠る埋蔵文化財も、先人が残した貴重な足跡であり、遷都以前からの歴史を今に伝える国民共有の財産であります。これらの文化財を適切に後世に伝えるのは我々の責務であり、「保存」と「開発」の調和を図りながら、埋蔵文化財の保存と保護、更にはその活用に取り組んでおります。

この度、平成20年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査成果をまとめた報告書を作成致しました。この報告書が、京都の歴史と文化財への理解を深めるために、広く御活用いただければ望外の喜びであります。

結びに、各調査の実施に当たって、御理解、御協力を賜りました市民の皆様と、御指導を賜りました関係機関の皆様に深く御礼申し上げます。

平成21年3月

京都市文化市民局長 山 岸 吉 和

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成 20 年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。平成 20 年 1 月から 12 月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものについて本文で報告している。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、一覧表にのみ掲載している。
- 2 試掘調査を実施した総ての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載（68～72 頁）している。なお、各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。
- 3 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 4 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺 1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版 1～13 1/8,000 図版 14～20 1/10,000
- 5 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 6 遺物整理にあたっては、岩本淳子・岡本沙千代・金子 央・上茶谷美保の協力を得た。
- 7 調査及び本書作成は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が担当し、(財)京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。

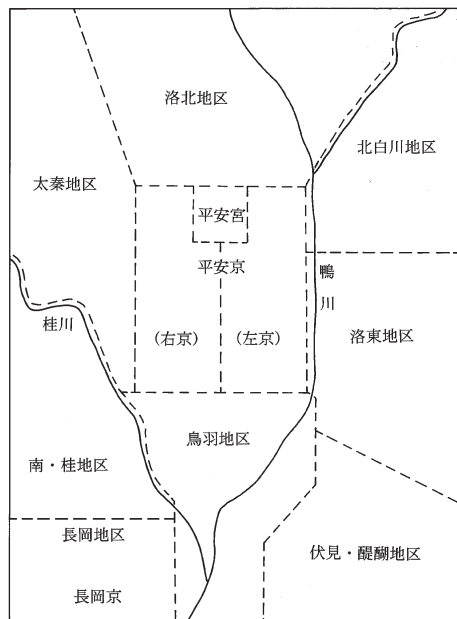


図 1 調査地区割図
(図示したもの他に京北地区(旧京北町域)がある)

目 次

	頁
I 試掘調査の概要	1
II 平安宮	3
1 職御曹司跡・聚楽第跡／梨本跡・聚楽第跡（上京区智恵光院通出水上る天秤丸町 183 ／上京区下長者町通裏之門西入坤高町 82,85-2）	3
2 紫宸殿跡・聚楽遺跡（上京区下立売通千本東入田中町 465,463,461-1）	10
3 御井跡（中京区西ノ京車坂町 14-12,14-13,14-17）	14
III 平安京左京	17
1 中御門大路跡・烏丸丸太町遺跡・公家町遺跡（上京区京都御苑 3）	17
2 四条一坊一町跡（中京区壬生朱雀町 5-2,5-5）	21
3 七条二坊十町跡・史跡本願寺境内（下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町 60）	33
4 教王護国寺旧境内（南区大宮通八条下る九条町 399-35）	38
IV 平安京右京	40
1 三条三坊十五町跡・西ノ京遺跡（中京区西ノ京月輪町 24-1）	40
2 六条二坊六町跡（下京区西七条東御前田町 22 の一部,23-1 /同町 15-1）	43
3 史跡西寺跡・唐橋遺跡（南区唐橋西寺町 35-6）	48
V その他の遺跡	51
1 御土居跡・寺町旧域（上京区御車道今出川下る二丁目栄町 361）	51
2 嵯峨遺跡（右京区嵯峨二尊院門前北中院町 2-7）	54
3 山科本願寺跡（山科区西野山階町 11-5,11-6,29-16 の各一部,85）	58
4 福西古墳群（西京区大枝東長町 1-34,1-35）	61
5 革嶋館跡（西京区川島玉頭町 37-16,40-15,40-14,40-4,37-4）	63
VI 試掘調査一覧表	68
報告書抄録	73

図 版 目 次

- 図 版 1 平安宮跡
- 図 版 2 左京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図 版 3 左京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図 版 4 左京 四・五・六条 一・二坊
- 図 版 5 左京 四・五・六条 三・四坊
- 図 版 6 左京 七・八・九条 一・二坊
- 図 版 7 左京 七・八・九条 三・四坊
- 図 版 8 右京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図 版 9 右京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図 版 10 右京 四・五・六条 三・四坊
- 図 版 11 右京 四・五・六条 一・二坊
- 図 版 12 右京 七・八・九条 三・四坊
- 図 版 13 右京 七・八・九条 一・二坊
- 図 版 14 常盤東ノ町古墳群・常盤仲之町遺跡・村ノ内町遺跡・仁和寺院家跡・円宗寺跡・上ノ段町遺跡・御所ノ内町遺跡
- 図 版 15 嵯峨遺跡・嵯峨折戸町遺跡・中の谷窯跡・大徳寺旧境内・上総町遺跡・上京遺跡・草堂跡（行願寺）・公家町遺跡
- 図 版 16 御土居跡・寺町旧域・修学院遺跡・山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡・法住寺殿跡
- 図 版 17 中臣遺跡・伏見稻荷大社境内・伏見城跡・深草坊町遺跡・貞観寺跡
- 図 版 18 史跡名勝嵐山・草嶋館跡・上久世遺跡・中久世遺跡・下久世構跡・大藪遺跡・福西古墳群
- 図 版 19 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡
- 図 版 20 長岡京跡・志水落合城跡

表 目 次

	頁
表 1 年次別試掘調査実施件数表	1
表 2 池埋土に含まれる種実一覧	29
表 3 試掘調査一覧表	68～72
表 4 遺物概要表	72

I 試掘調査の概要

1 京都市内の埋蔵文化財行政

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という。）は、京北町との合併に伴う遺跡地図の改訂を経て784件を数えるに至っている。その範囲内で行われる土木工事については、遺跡の重要度と工事規模に応じて「慎重工事」・「立会調査」・「試掘調査」・「発掘調査」の4種の行政指導を行っている。その業務については、当初は文化財保護課が、昭和55年の京都市埋蔵文化財調査センター設立以後はセンターが担当してきたが、平成18年4月1日付けで文化財保護課と統合され、新たに文化財保護課として埋蔵文化財行政を担当することになった。

4種の行政指導に基づいて実施される調査には、国庫補助による調査と原因者負担による調査があるが、立会調査・試掘調査については、そのほとんどを国庫補助事業として実施している。国庫補助事業による立会調査と発掘調査は(財)京都市埋蔵文化財研究所(以下、「埋文研」という。)へ委託し、その成果は、毎年、別冊の報告書により報告されている。

本報告書は、平成20年1月～12月に文化財保護課が実施した、国庫補助による試掘調査を取りまとめたものである。文化財保護課で実施する試掘調査は、届出や通知を受けた工事予定地内における遺跡の有無、あるいは遺跡の残存状況やその範囲を把握し、遺跡が良好に存在し、工事がその遺跡を破壊する場合には発掘調査を指導し、設計変更などにより遺跡の保存が可能であれば開発者に対して遺跡保護の措置を指示するなど、文化財保護行政上重要な業務であり、現在4名の技師がこの調査に従事している。

平成20年1月～12月に文化財保護法に基づいて提出された届出（文化財保護法第93条）・通知（同法第94条）件数は、総数で961件になる。これは前年比で70件減（6.8%減）とは

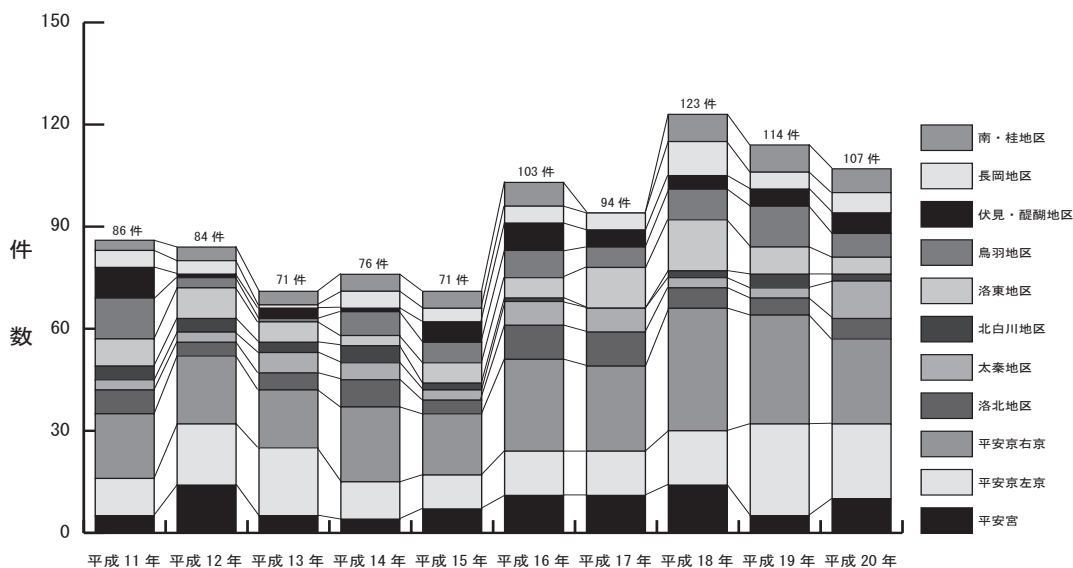


表1 年次別試掘調査実施件数表

I 試掘調査の概要

なっているものの、前年の数字が、平成19年6月の建築基準法改正や、同年9月の市景観条例の改正を控えた駆け込み工事を含んでいることを勘案すれば、今年の世界的不況を背景にした事業の後退は未だ数字には表れていないといえる。これらの届出・通知に対して、文化財保護課は立会調査472件（前年492件、4.1%減）、試掘調査92件（同109件、15.6%減）、発掘調査18件（同14件、29%増）、慎重工事379件（同416件、8.9%減）の指導を行った。

このような指導に基づき、文化財保護課が実施した試掘調査も、107件と引き続き多い。グラフで見ると、市街地である平安京左京・右京域の調査が全体の半数近くを占める。また、昨年に比べ、太秦地区の調査の増加が目立つ。城北街道の拡幅や山陰線の高架化などのインフラの整備が原因の一つといえよう。

2 平成20年の試掘調査概要

文化財保護課及び埋文研では、京都市域を12のエリアに区分している（図1）。平成20年の試掘調査の地区別件数は、平安宮地区10件、平安京左京地区22件、平安京右京地区25件、洛北地区6件、太秦地区11件、北白川地区2件、洛東地区5件、鳥羽地区7件、伏見・醍醐地区6件、長岡京地区6件、南・桂地区7件、京北地区0件である。このうち14件（Ⅵ章・試掘調査一覧表参照）については発掘調査を指示し、埋文研が7件（No.13・52・59・63・73・79・105）、関西文化財調査会（代表 吉川義彦）が2件（No.47・80）、古代文化調査会（代表 家崎孝治）が1件（No.8）の調査を年内に実施した。

発掘調査に移行したことで得られた顕著な成果として、平安京左京八条四坊二町跡では、中世の柱穴、埋甕等を多数確認し、中世七条町が東洞院通より東側にも広がっていることが明らかになった（No.47）。教王護国寺（東寺）旧境内では、平安時代から江戸時代に至る遺構を確認しており、寺域を囲む室町時代後期の濠の一部を検出している（No.8）。大徳寺旧境内では、土塀の基礎と控え柱の痕跡を確認している（No.79）。常盤仲之町遺跡の調査では、奈良時代の竪穴住居、流路、土坑を確認している（No.73）。また、工事の掘削深が試掘で確認した遺構面より十分浅いため、又は設計変更で遺構面より浅くして当面の保存が図られたため、発掘調査に至らなかった例が18件あり、No.14・18・24・35・39・45・48・85については、本書本文中で報告する。

また、遺構保存はできなかったが見るべき成果のあった試掘として、聚楽第跡の濠肩口を検出し、縄張り復元に新たな知見が加わった平安宮跡の調査（No.1・30・33）、御土居が削平され、墓地や宅地に利用されて消滅していく過程が判明した御土居跡（No.21）、平安時代の建物跡や区画溝を確認した平安京右京三条三坊十五町跡（No.54）、室町時代の土器溜まりを確認した嵯峨遺跡（No.70）と、平安時代の園池が検出され、試掘調査の延長を行った平安京右京四条一坊一町跡（No.4）について報告する。

（西森 正晃）

II- 1 平安宮職御曹司跡・梨本跡，聚楽第跡 No. 1 ・ 30

1 はじめに

延暦13年(794)に長岡京から遷都された平安京の北辺中央部には、政治的機能と天皇の居所としての機能を併せ持つ大内裏(平安宮)が置かれた。やがて、この大内裏は、平安時代後期以降衰退し「内野」と呼ばれるようになり、一部を除き放棄された土地となった。天正14年(1586)、国内統一を進める羽柴(後の豊臣)秀吉は、この内野の地に聚楽第という政庁的機能を有する城郭を築き始める。聚楽第は、豊臣秀次の右筆駒井重勝によって書かれた『駒井日記』¹⁾により、内郭部分が本丸、南二之丸、北之丸、西之丸の四つの郭で構成されていたことがわかっている。

今回、大内裏(平安宮)跡と聚楽第跡が重複して周知されている2箇所の調査地で、新たな知見が得られたことからここに報告する。ひとつは、上京区智恵光院通出水上天秤丸町183(No.1)であり、平安宮職御曹司^{しきのみぞうし}の中央部に相当する。職御曹司は中務省に属する中宮職の庁舎であり、大臣や納言の宿所に充てられた。また、天徳4年(960)から長保3年(1001)までに起こった6度の内裏火災の内、天皇が5度避難した施設でもある。もう一つは、この場所から北西約80mのところにある上京区下長者町通裏門西入坤高町82, 85-2(No.30)であり、平安宮の縫殿寮と梨本の間の南北道路部分に相当している。

試掘調査は、両地点で集合住宅の建設が計画されたことに伴い、地下遺構の残存状況を確認する目的で実施した。天秤丸町は平成20年1月21日、2月28日に調査面積75㎡の試掘を実施した。坤高町は平成20年6月30日に調査面積7㎡の試掘を行った。

調査の結果、天秤丸町では聚楽第南二之丸西濠の東肩を、坤高町では聚楽第西之丸南濠の南肩をそれぞれ検出し、基礎掘削時の立会調査を指導した。

2 層序と遺構

天秤丸町層序 近現代盛土(厚さ55cm)、黒褐色泥砂(厚さ60cm)と続き、現地表下1.15

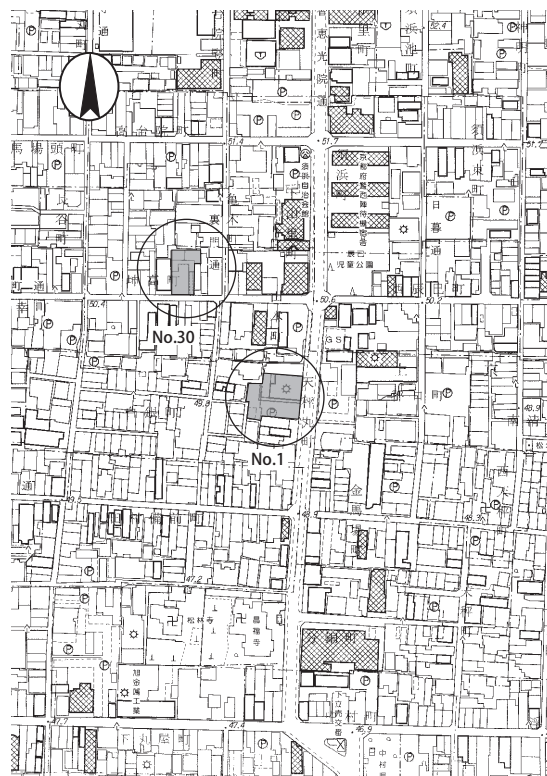


図2 調査位置図(1:5,000)

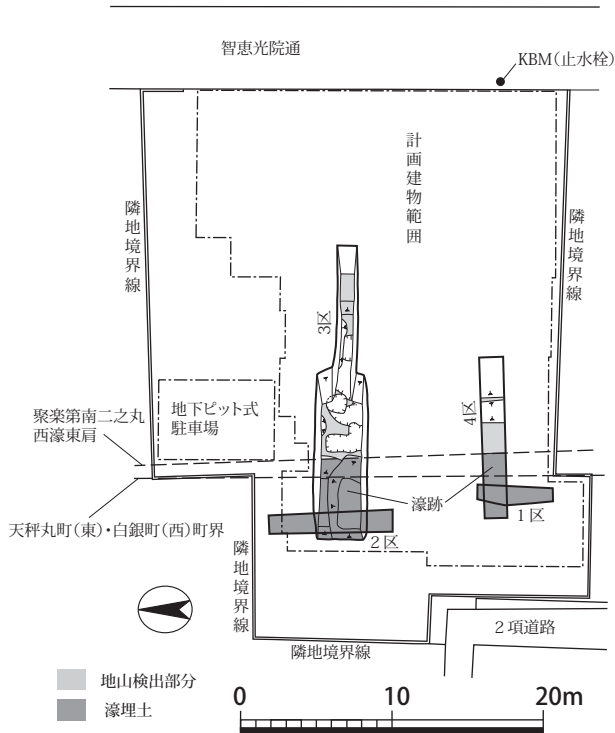


図3 天秤丸町試掘調査区位置図 (1:500)

濠状遺構はさらに西に向かって傾斜していく状況であった。確認できた濠の埋土は10層以上あり、北と南の調査区でも異なる部分が多く、複数回にわたり埋められていったと考えられる。

西之丸南濠 下長者町通との土地境界から北13mで、北向きに下がる濠状遺構の南肩部を検出した。現地表下2.6mまで掘削したものの、濠はさらに北側に傾斜していく状況であった。確認できた濠の埋土は3層あり、上層から砂質の強い褐色泥砂、砂質の強い暗褐色泥砂、砂質の強いにぶい黄褐色泥砂と続く。今回検出した肩口は、西側隣接地で行われた聚楽第跡第1次調査、第21次調査で確認された南濠南肩の延長上にあたる(図8)。



写真3 天秤丸町3区濠状遺構(北西から)

mで地山の明黄褐色砂礫に達する。この地山面で濠状遺構の東肩口を検出した。

坤高町層序 現代盛土(厚さ58cm)、小礫混じりの黄褐色泥砂(厚さ20cm)、オリーブ褐色泥砂(厚さ42cm)、厚さ10cm程度の整地層が2層続いた下層の現地表下1.4mで、地山の褐色砂泥に達する。濠状遺構の南肩口は、地山面で検出した。

南二之丸西濠 設定した4箇所の調査結果から、西下がり濠状遺構を確認することができた。3区の西端から5.4m、4区の西端から4.5mが肩口となる。これは智恵光院通の道路境界から約24m、天秤丸町と白銀町との町界とほぼ一致する。現地表下2.9mまで掘削したものの、

3 出土遺物

図化可能なものは、天秤丸町の濠状遺構から出土したものであった。

1区2層 濠埋没後の落ち込みに投棄された埋土で、唐津系椀(1)と陶器壺(2)が出土している。

2区4層 濠の上層埋土で、木製漆器椀(3)がある。内面を赤漆、外面を黒漆で塗られ、高い高台をもつ。

2区5層 4層の下位、濠埋土である。瓦質の焙烙(4)と瓦質の火入れ(5)がある。

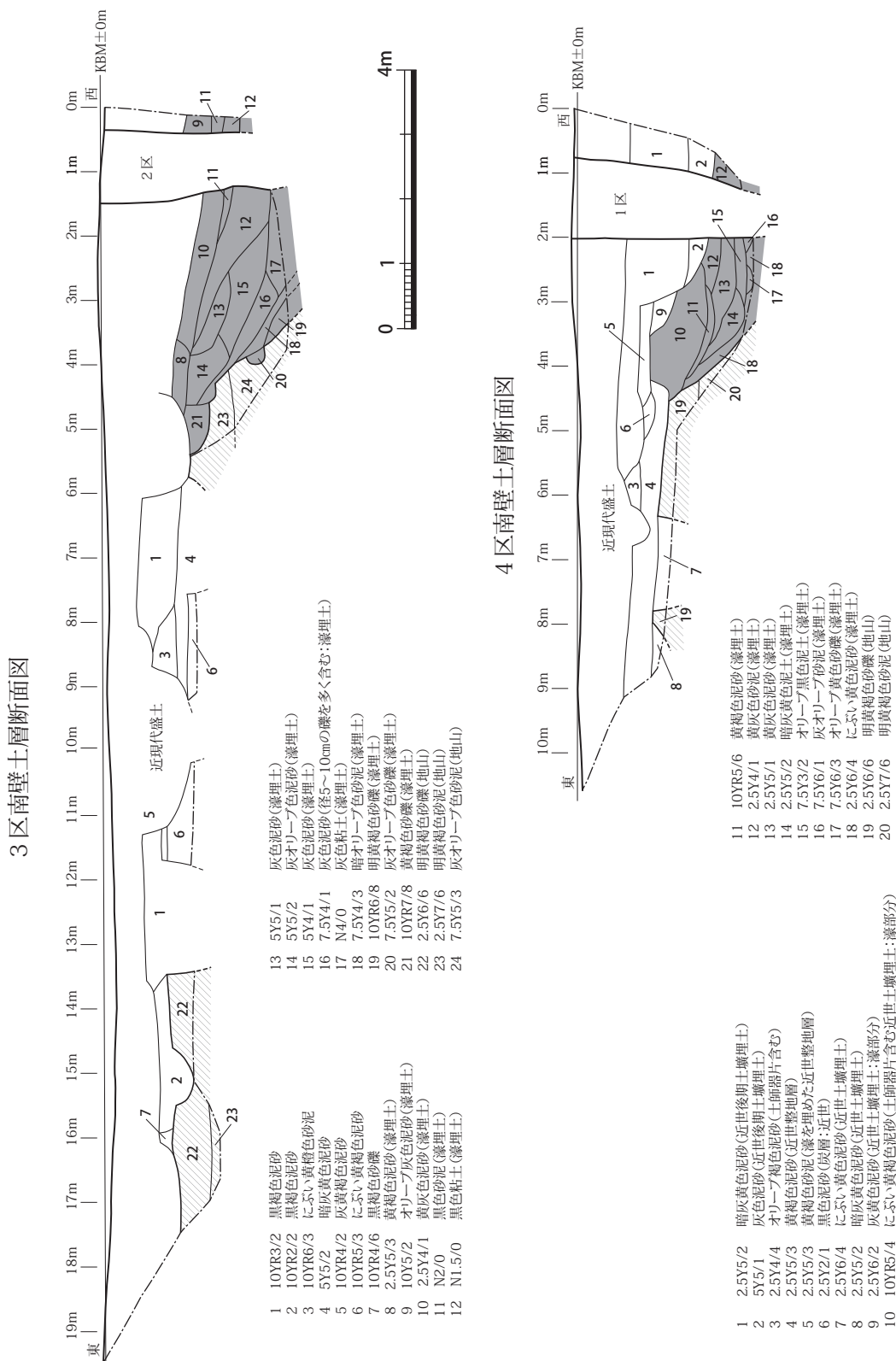


図4 天秤丸町試掘調査区断面図 (1:100)

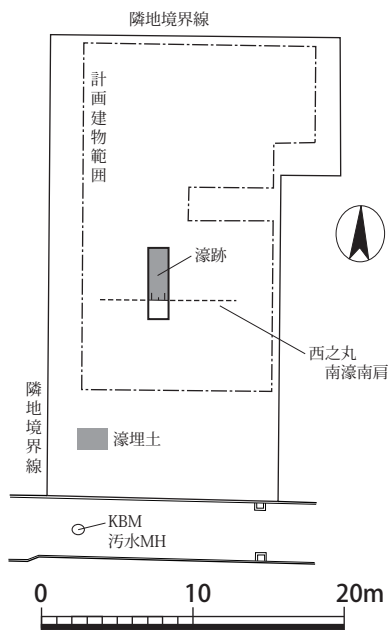


図5 坤高町試掘調査区位置図 (1:500)

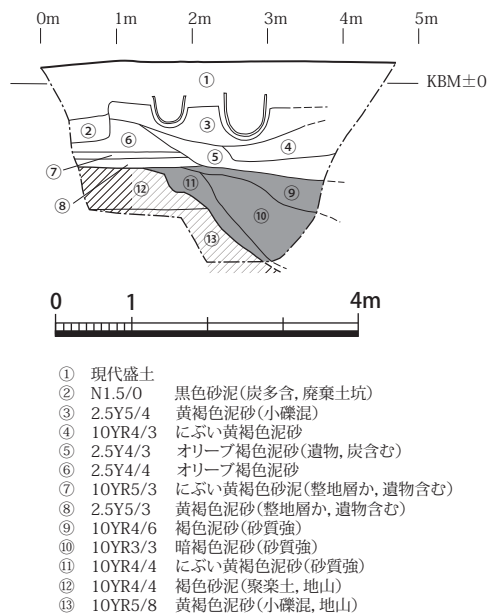


図6 坤高町調査区西壁断面図 (1:100)

京都 XI 期新から XII 期古段階 (17 世紀中頃～後半) ²⁾ のものと見られる。

3 区濠あげ土 濠の埋土を重機で回収した際に出土したもので、土師器皿 (6, 7) がある。皿 6 は京都 IV 期新段階 (11 世紀後半), 皿 7 は京都 III 期古段階 (10 世紀中頃) のもので混入品と考えられる。

4 区 1 層 濠埋没後の落ち込みに廃棄された遺物群で、陶器皿 (8), 肥前系染付 (9), 陶製花器 (10), 焼塩壺の蓋 (11, 12) がある。肥前系染付 9 は 17 世紀中頃から後半, 泉州産の型作り品である焼塩壺蓋 11 は 18 世紀前半頃と考えられる。ロクロ成形の焼塩壺蓋 12 は, 深草産の 18 世紀後半のもので上面に「なんばん七度 本やき志本」の刻印をもつ。

4 区 3 層 京都 XI 期新から XII 期古段階 (17 世紀中頃～後半) の瓦質焙烙 (13) がある。

4 区 4 層 土師器小皿 (14)・皿 (15)・鉢 (16) がある。いずれも京都 XI 期新から XII 期古段階 (17 世紀中頃～後半) のものと考えられる。



写真4 坤高町濠状遺構 (北東から)

4 区 10 層 土師器鉢 (17) は京都 XI 期中頃 (17 世紀前半) のものとみられる。

4 まとめ

天秤丸町の濠は, 17 世紀前半から埋まりはじめ, 17 世紀後半頃から 18 世紀前半にピークを迎え, 18 世紀末にはほぼ埋没するとみられる。ピーク時は, 京都町奉行所が元禄 8 年 (1695) に触れた塵捨て場 7 箇所の一つ, 「聚楽天秤堀の西新町の東裏」³⁾ の状

況に類似する。元禄8年に始まった天秤堀の埋め立ては、宝永元年（1704）に半分程度埋まり、正徳2年（1712）3月にほぼ埋没⁴⁾している。

聚楽第の描かれた最初期の絵図である『京都図屏風』⁵⁾には南二之丸の南側に「てんびん町」の表記があり、その西側に「新町」が展開している。天秤丸町で今回見つかった濠状遺構はこの新町に近く、天秤丸が南二之丸である可能性が高いと考えられる。この濠状遺構を南二之丸の西濠と想定するならば、聚楽第跡の既往の第10次、第13次、第28次、第33次、第40次、第

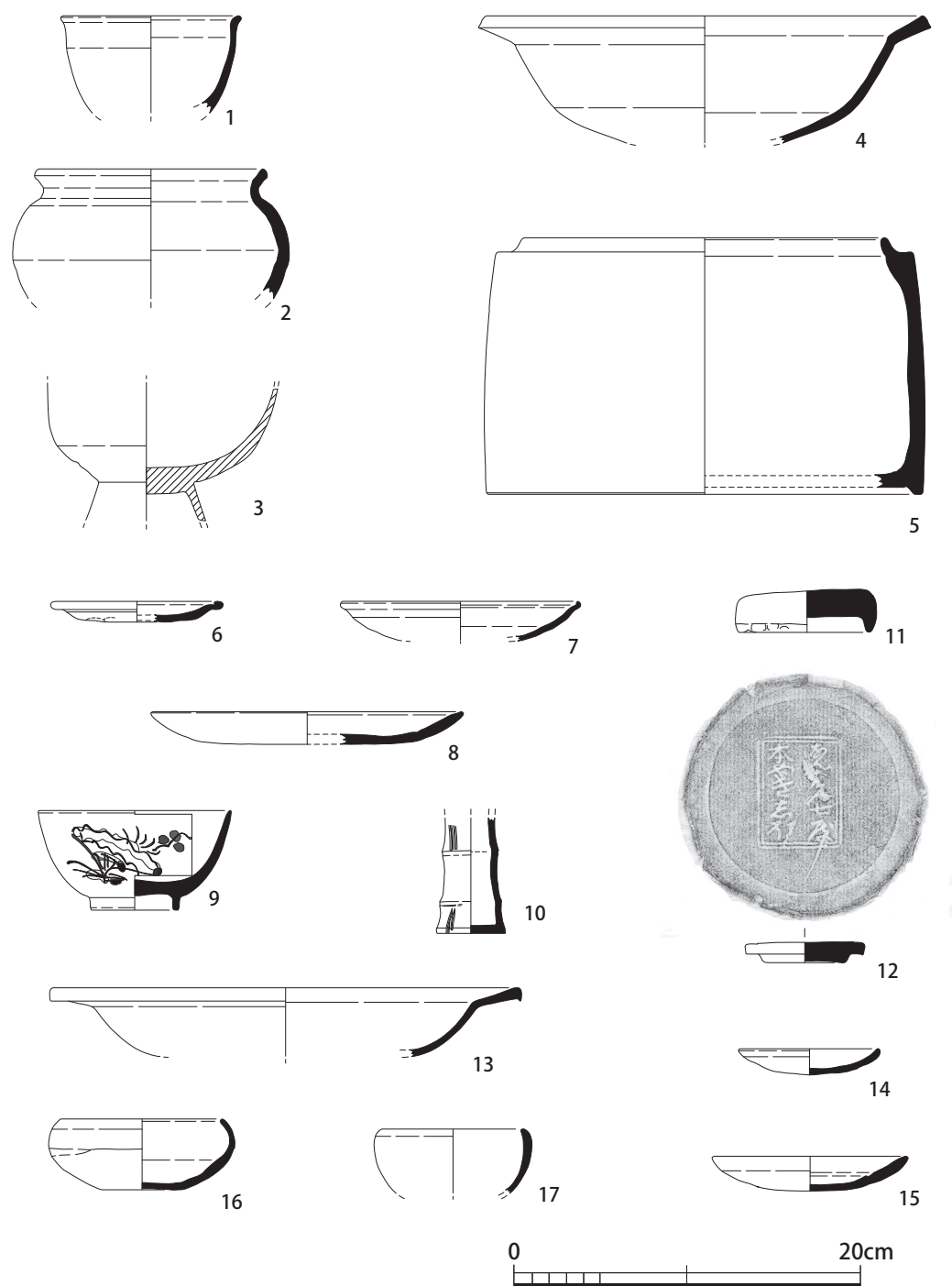


図7 出土土器実測図（1：4）ただし、12の拓本（1：2）

41次、第45次、第49次、第54次で検出された濠及び地山の検出地点を再考し、平成17年に復元された聚楽第南二之丸跡の形状⁶⁾の修正が可能となる。第49次と今回(第52次)、第28次により、南二之丸の北、西、南の定点が定まった。また、第54次で明確に地山が検出されていること、第45次で第28次調査のラインよりも北側で濠状遺構の認められること、同様に第13次と第33次の濠状遺構の痕跡が第49次の肩口ラインより南に下がることから、現在の秤口町付近で南二之丸の南北幅が狭くなることも想定できる。さらに、規模のほぼ確定した本丸の周囲の長さは、駒井日記に記載された「石垣之上壁之廻間数」の約1.2倍であることを参考に、約1.2倍の周囲の長さに符合するように、南二之丸の東端を秤口町と南清水町の町界に修正した。その結果、南二之丸の周囲の延長が約415mとなり、駒井日記に記載された約359m⁷⁾の1.16倍となった。

坤高町で検出された西之丸南濠の肩口の位置は、これまでの第1次、第21次調査の結果に符合するものであり、西之丸の復元研究にさらなるデータの蓄積が得られた。一方、南二之丸の規模、形状については従来から意見の分かれる部分⁸⁾であったが、今回の天秤丸町で検出された濠状遺構とその埋没過程から、天秤丸が南二之丸である可能性が高いこと、「天秤堀」の埋没過程と近世のゴミ処理問題とが密接に関連することが明らかになった。(馬瀬 智光)

註

- 1) 『駒井日記(下)』文禄4年4月10日条(『史籍集覧』新加別記第61)
- 2) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号((財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年)以下、本節における編年は当該文献に従った。
- 3) 京都府総合資料館所蔵古久保家文書『御触留』(山崎達雄『洛中塵捨場今昔』臨川書店 1999年の29頁に写真で原文が掲載されている。)
- 4) 山崎達雄『洛中塵捨場今昔』(臨川書店 1999年)の29～37頁参照。
- 5) 大塚隆編集『慶長昭和京都地図集成—1611(慶長16)年—1940(昭和15)年—』(1994年)に掲載された絵図で、元和末から寛永元年頃に作図されたとみられる。
- 6) 馬瀬智光「聚楽第跡の復元—考古学的考察—」『古代文化』第57巻第2号(財団法人古代学協会 2005年)この文献に41次までの既往調査を掲載しており、その後の調査次数は、京都市埋蔵文化財調査センター(現在の京都市文化財保護課)の試掘調査と、財団法人京都市埋蔵文化財研究所の実施した立会調査を基にしている。
- 7) 註1文献に「南貳之丸之廻百八拾四間」とある。当時の1間は、6尺5寸であり、約359mとなる。
- 8) 森島康雄「聚楽第と城下町」『豊臣秀吉と京都—聚楽第・御土居と伏見城』(日本史研究会編 文理閣 2001年)

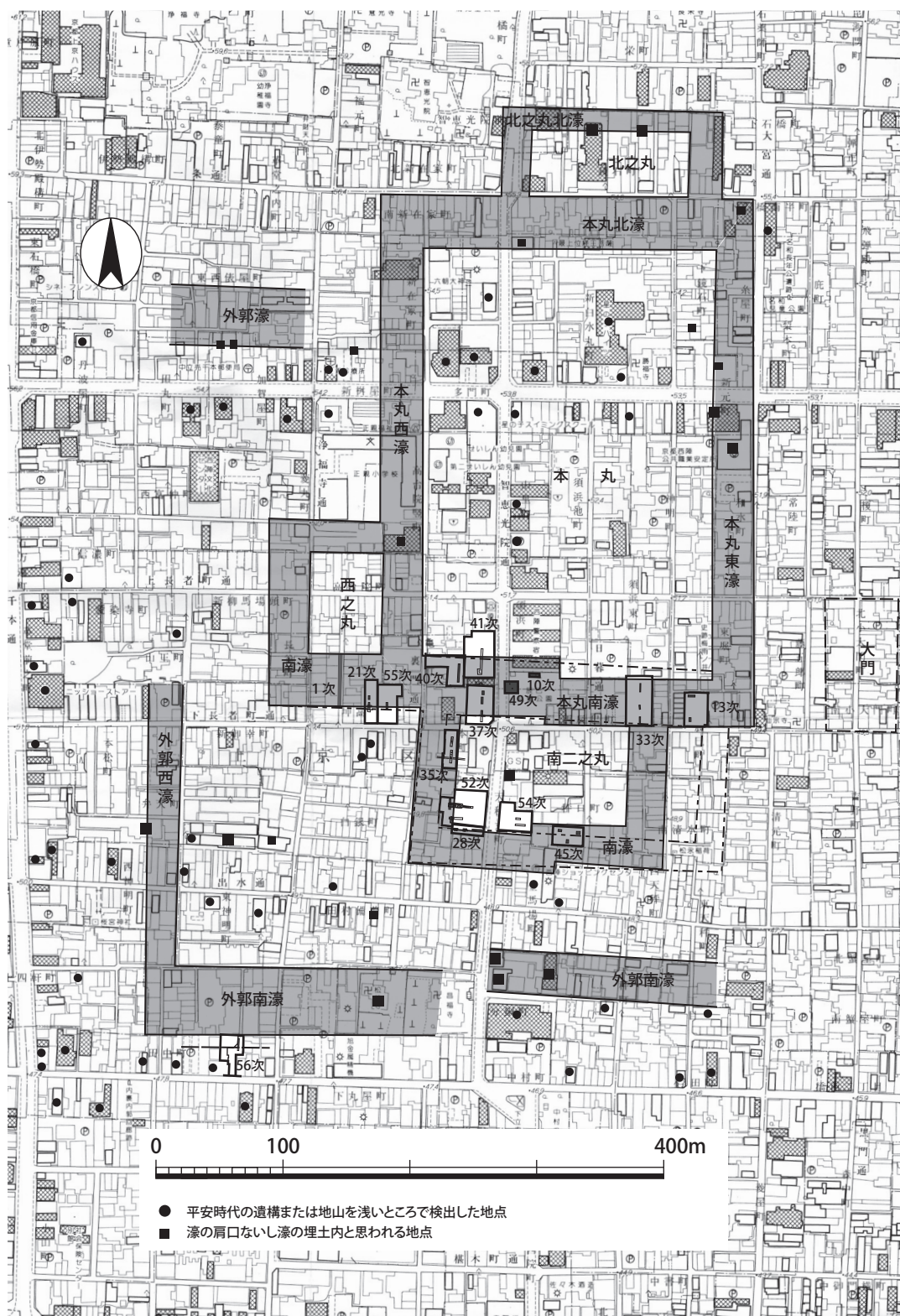


図8 聚楽第推定復元図 (1:5,000)

II - 2 平安宮紫宸殿跡・聚楽遺跡 No. 33

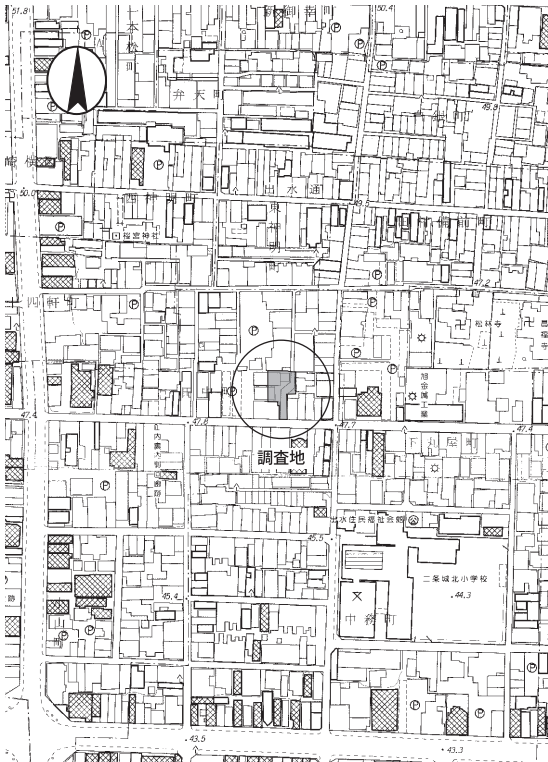


図9 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は、上京区下立売通千本東入田中町465,463,461-1で、調査時は敷地の東半が平面駐車場、西半が木造住宅となっていた。敷地内及び周辺には複雑な高低差があって、平面駐車場部分は下立売通とほぼ同じ高さであるのに対し、木造住宅部分は接道部（今回の計画敷地には合筆されていない）から北へスロープ状に下がっていった、奥では1mほど低くなる（図10）。また、敷地境界の北側も後者と同じくらいの高さが現状地盤となっている。

この低い地盤は、調査地の北側で東西方向に広く明瞭に認められることから、これを豊臣秀吉が造営した聚楽第の外郭南濠に当て、その南肩口を調査地北辺ラインに推定することでほぼ諸説の一致を見ている¹⁾。したがって濠の南外

側に推定される当該地については、地盤の高い駐車場部分がより旧状を残していると考えられた。

遡って平安時代においては、内裏の南北中軸線が敷地東端を走っており、主殿である紫宸殿が当該地附近にあったと想定されている。紫宸殿の遺構はこれまで全く見つかっておらず、その正確な位置は分からないが、復元図では当該地がその南辺から前庭（南庭）に当たることになっている²⁾。北半が聚楽第の濠によって破壊されていると考えられる以上、もし一部でも残っているとすればその南辺が最も可能性が高く、本件はその意味で重要な調査であった。

一帯は聚楽第造営の影響を大きく受けていると予想される一方、道を挟んだ南向かいの敷地では地表面-1.4mで内裏承明門の遺構が³⁾、西隣地では-0.85mで不定形の集石遺構3基が検出されており⁴⁾、当該地においても平安時代の遺構が残っている可能性は捨てきれなかった。

今回ここに木造アパートの新築が計画されたことから、紫宸殿関連遺構の確認を第一の、聚楽第関連遺構の検出を第二の目的とし、平成20年6月30日に試掘調査を実施した。調査面積は10㎡である。

2 層序と遺構

図10にあるように、地盤が高く遺構残存の期待される駐車場部分が、計画建物の配置される

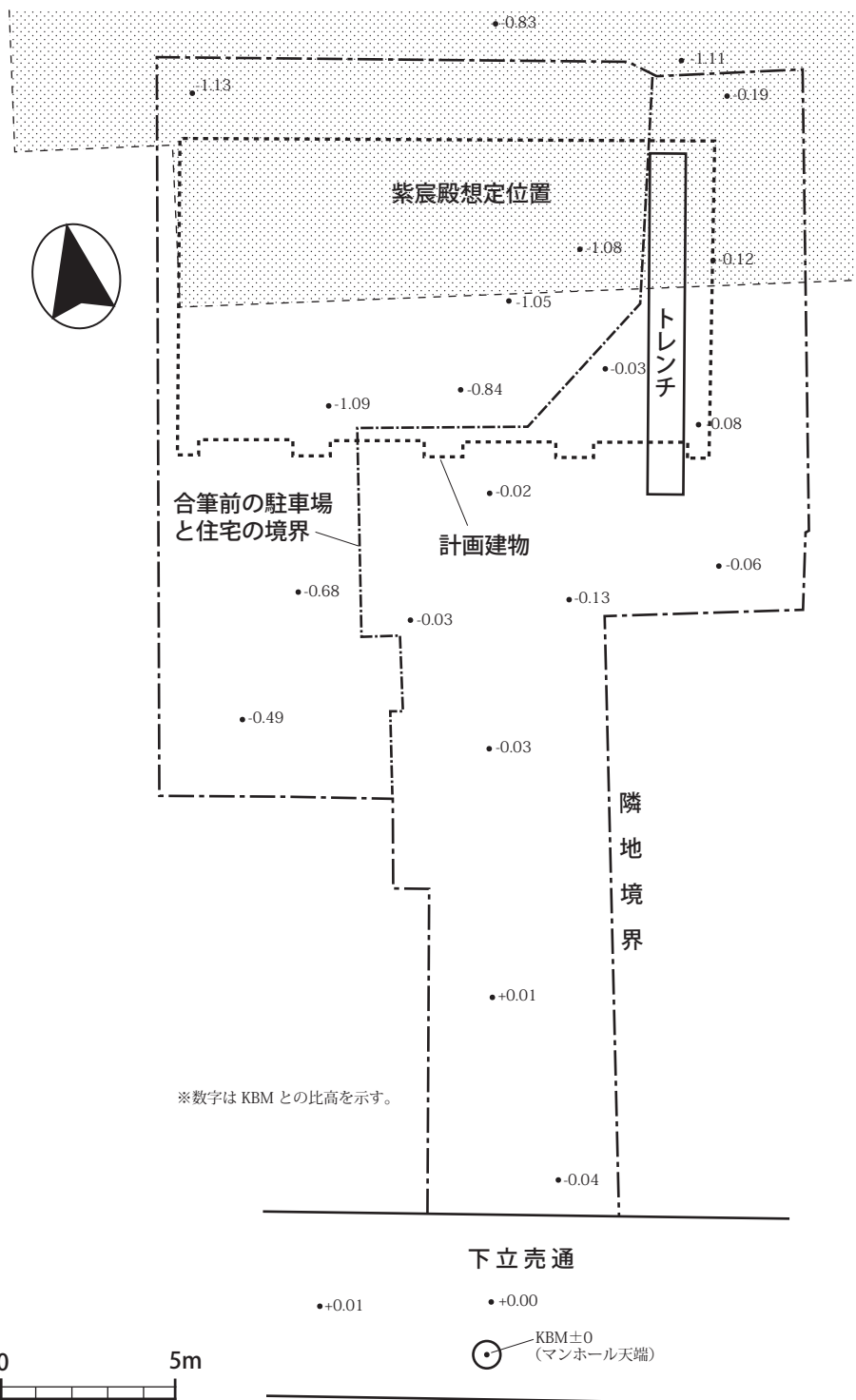


図 10 調査区位置図 (1:200)

敷地北半で幅を狭めているため、トレンチの位置は自ずから限定された。

聚楽第の堀の南肩が本件敷地北辺にほぼ一致するとされる以上、1 m 内外の深さで何らかの生活面に達するものと予想して掘削を始めたが、これに反して、地表下 2.3m まで掘削してもそのような面を確認することができなかった。調査の対象である計画建物の範囲一杯までトレンチを延ばしてもこの状況に変わりはなく、紫宸殿の痕跡はもとより平安時代の遺構面が完全に失わ

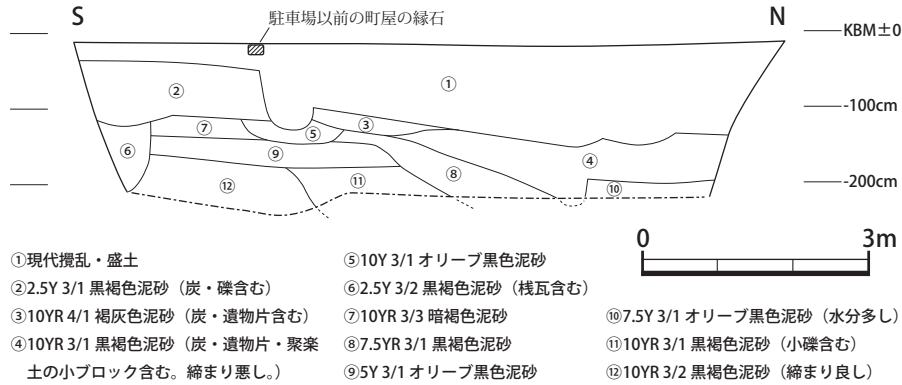


図 11 トレンチ西壁土層図 (1:100)

れていることが判明した。

層序 トレンチの幅が狭かったため土層の観察はいささか困難を伴ったが、層序はおおよそ図 11 のとおりである。①層は現代盛土・攪乱で、これがトレンチ北半で厚くなるのは、駐車場と木造住宅敷地の境界に設けられていた石積み擁壁の解体攪乱があることによる。

②層の時期ははっきりしないが、③以下の層はいずれも江戸時代の盛土である。重機のアームの届く限り掘削したが、地山には全く達していない。層序で注目されるのは、④・⑧層が明らかな傾斜堆積を示していることで、⑪層もこれに加えてよいと思われる。いずれも締まりの悪い土で、北にある落ち込みを南から埋めていったように見受けられる。⑫層は比較的締まりの良い土で、一時期、この傾斜堆積の肩口を形成していたものと思われる。層位的に最も古い層であるが、出土遺物に 18 世紀の染付の細片を含んでおり、これが年代の上限となる。

遺構 通常、この周辺の遺構面は地表下 1m 程度であるので、当該地は 18 世紀以前に一旦大きく掘り下げられたことになる。平安宮一带は近世の土取りが活発に行われ、しばしば地山が深く掘り抜かれるが、図 11 に見るような傾斜堆積は土取りの跡とは考えられない。したがって、濠が推定よりも南へ広がっていた可能性が考えられるが、だとすれば、このトレンチのすぐ南西で行われた発掘調査ではこのような痕跡を全く認めていないため⁴⁾、本件敷地の中ほどに濠の南肩を求めることができる。この場合、江戸時代になって、濠跡と下立売通に挟まれた町屋が、他と同様の奥行きを確保するために背後の濠を一定埋め立てた結果、以北の濠のみが今に落ち込みをとどめたと解釈できる。

とはいうものの、従来の推定ラインの根拠となっている現状地形の落ち込みは極めて明瞭で、現在の宅地割ともよく整合しているため、今回の調査結果のみでこれを修正するのが適当とは思えない。濠のラインも本来は細かな出入りを持つであろうから、あるいは当該地で部分的に南へ突出するのかもしれない。いずれにせよ、外郭南濠の拡大については可能性の提示にとどめておくべきだろう。

3 遺物

出土遺物は少なく、図示できるものはさらに少ない (図 12)。1～3 は土師器の皿である。口

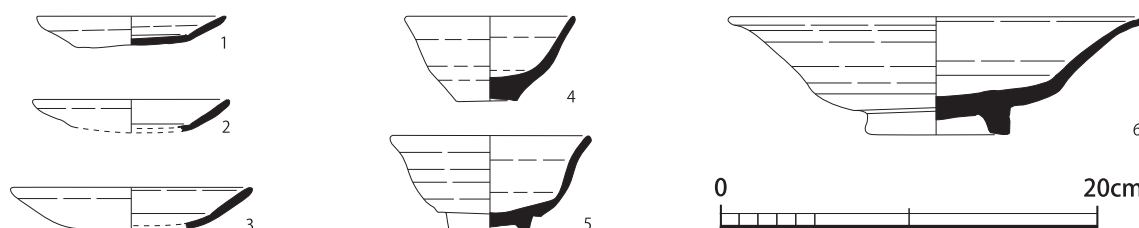


図12 出土遺物(1:4)

径はそれぞれ10.0cm, 10.4cm, 12.8cmを測り, 内面底から壁へ立ち上がる境附近にヘラで圏線を巡らせる。18世紀後半(京都XⅢ期)⁵⁾と推定される。4は唐津系の小椀で, 青緑色の灰釉を厚くかけ, 高台には糸切り痕が残る。5は鉄釉の椀で口径10.6cm。6は肥前系の鉢である。青緑色の灰釉をかけるが外面は口縁の少し下までで, 以下は露胎とする。17世紀後葉。1~3は①層から, 4~6は②層を掘削した際の廃土から出土した。なお, 平安時代の遺物は②層から平瓦片が1点出土したのみである。

4 まとめ

本件は, 平安宮内裏紫宸殿の推定位置に初めて入れたトレンチであったが, 上述のとおり, 目的の第一であったその遺構については, 残念ながら当時の生活面ごと完全に失われており, 関連する遺物すらほとんど出土しなかった。

第二の目的である聚楽第の遺構であるが, 従来の推定どおり当該地が濠の外側であれば, このように地山が深く完全に掘り下げられるような理由を認めがたく, 濠の南辺が推定より南へ広がる可能性が出てきた。他の可能性としては, 部分的な濠の突出, 北側の落ち込んだ土地に入るため江戸時代に造られた斜路, 大型の土坑なども考えられ, これを検証するため周辺の調査に今後とも注意を払っていきたい。(堀 大輔)

註

- 1) 森島康雄「聚楽第と城下町」『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』日本史研究会編, 文理閣, 2001年
馬瀬智光「聚楽第跡の復元—考古学的考察—」『古代文化』第57巻第2号, 2005年 など
- 2) 角田文衛監修『平安京提要』付図「平安宮内裏復元図」, 1994年
- 3) 梅川光隆「平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1986年
- 4) 平田 泰「平安宮内裏跡」『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-II, 1978年
- 5) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』(有)京都編集工房, 2005年

II - 3 平安宮御井跡 No. 35



図 13 調査位置図 (1:5,000)

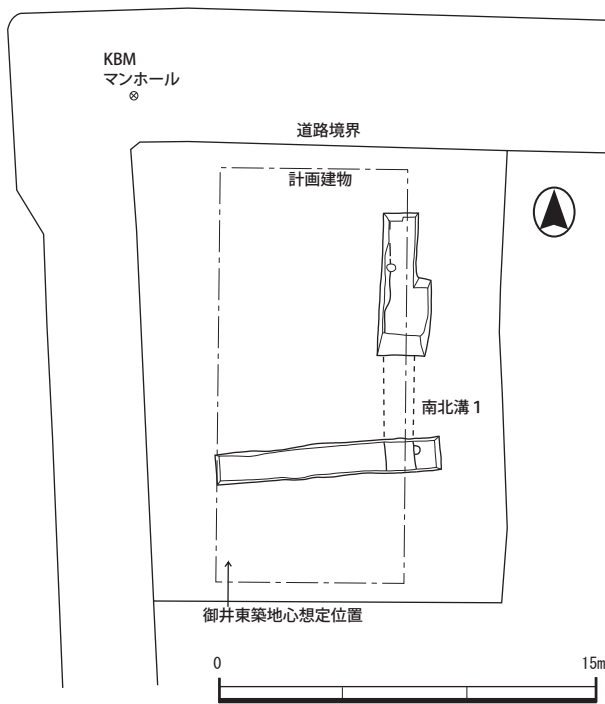


図 14 調査区配置図 (1:300)

1 はじめに

調査地は中京区西ノ京車坂町 14-12, 14-13, 14-17 で、朱雀第六小学校の東方に位置する。当該地は平安宮御井跡の東辺部にあたる。この場所で共同住宅建設が計画されたため、試掘調査を行った。

御井は平安宮の南西部、豊楽院の西隣にあったとされる。主水司に所属し、天皇に供される水を汲む井戸があったところである。大同二(807)年十一月十七日に修造されており、また、『類聚国史』巻 107 には天長七(830)年十月二十五日に南半分を中務省の厨地に給うと見える¹⁾。

御井跡での発掘調査はこれまでに、朱雀第六小学校の校内と JR 山陰線で行われている。平安時代の遺構は、1979 年に行われた朱雀第六小学校の校舎増改築工事に伴う発掘調査で、湿地状遺構の上面に細かく砕いた瓦片を敷いた遺構が見つかった²⁾。

今回の調査地は御井跡の東辺中央部にあたり、敷地の西寄りに御井東築地心が想定されている。調査区は、南北方向に 1Tr (10 m²) を、東西方向に 2 Tr (11 m²) を設定し、調査は御井跡の東辺区画施設の検出に主眼をおいた。調査面積は合計 21 m² である。

調査の結果、平安時代の遺構を検出したため、基礎掘削深度の変更を行い、遺構を地中保存することとなった。

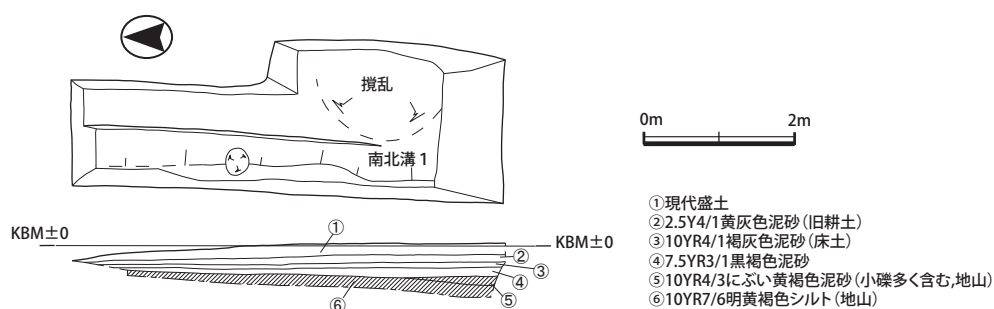


図 15 1 Tr 平面図，東壁断面図 (1:100)

2 層序と検出遺構

層序 基本層序は 1 Tr が現代盛土，旧耕土，床土，黒褐色泥砂，にぶい黄褐色泥砂（小礫多く含む，地山），明黄褐色シルト（地山）である。2 Tr では，旧耕土や床土は見られず，現代盛土直下でにぶい黄褐色泥砂の地山となる。敷地は南に若干傾斜しており，2 Tr では GL-0.1m という非常に浅いところで地山を検出した。遺構検出は地山上面で行った。1 Tr 東半と 2 Tr 西半の大部分は攪乱や土取穴によって壊されており，平安時代に遡る遺構は検出できなかったが，1 Tr 西半と 2 Tr の東半は比較的残りが良く非常に浅いところで平安時代の遺構および地山を検出した。

検出した遺構は平安時代の南北溝 1 条，ピット 1 基，時期不明の土坑 1 基である。

南北溝 1 1 Tr を南北に縦断し，2 Tr につづく南北方向の溝である。1 Tr では攪乱により東肩を検出できなかったが，2 Tr で溝の両肩を検出した。溝の規模は，幅約 1.2m，深さ 0.3m，検出した総長は約 10m である。埋土はオリーブ褐色泥砂で，多量の瓦片によって埋められていた。オリーブ褐色泥砂の上層には，にぶい黄褐色泥砂が堆積しているところもあり，溝の埋土の違いであると考えられる。溝は GL-0.15 ～ 0.3m と非常に浅くで検出されており，溝の深さが 0.3m と浅いことなどから上面は削平されているものとみられる。また，2 Tr 南壁断面の観察から土取穴によって削平されている部分もみられる。溝からは平安時代の瓦が多量に出土しており，平安時代の遺構と考えられる。

ピット 2 2 Tr 東寄りで検出した径約 0.35m の円形のピットである。西半は南北溝 1 に切られており，また，埋土からは平安時代の瓦が出土したため，平安時代の遺構と考えられる。

土坑 3 2 Tr 西端の南壁で確認した土坑である。部分的な検出であるが，規模は直径 1 m 以上で，深さ 0.4m とみられる。地山上面から掘削しており，土取穴の可能性もあるが，埋土が黒褐色泥土であり，周辺の土取穴とは埋土が異なることから土坑とした。遺物が出土しなかったため，時期は不明である。

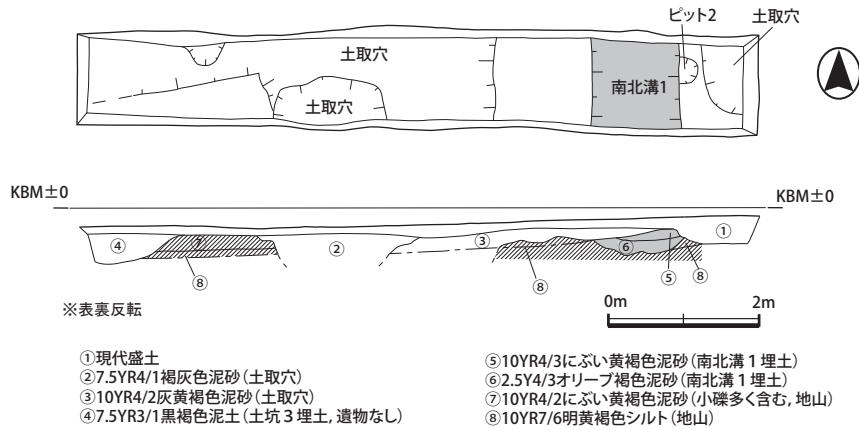


図 16 2Tr 平面図，南壁断面図（1:100）

3 まとめ

当該地は、平安宮の御井跡に比定されており、御井東築地想定位置が敷地内に想定されている。調査の結果、平安時代の南北溝を1条検出した。今回検出した南北溝1は、御井東築地想定位置よりも約7m東方で検出しており、豊楽院との間の宮内道路想定位置にあたる。築地想定位置から築地や掘立柱塀などの痕跡は見つからなかったため、今回検出した南北溝1は、その位置から平安宮御井の東区画に関わる溝とみることができる。しかし、御井跡北端部で行った、JR山陰線高架にともなう発掘調査では今回検出した南北溝1の延長を検出していない。今回の南北溝1の検出状況から平安時代の遺構は削平されたものとみられる。

（家原 圭太）



写真5 2Tr 全景（北東から）

註

- 1) 陽明文庫本、九条家本の『宮城図』には中務省厨が描かれていない。
- 2) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 平安宮I』1995年。この遺構は御井の南を通る宮内道路にあたる位置で検出されており、路面とみられる。したがって、御井跡に関わる遺構はこれまで検出されていない。

III - 1 平安京左京中御門大路跡・ 烏丸丸太町遺跡・公家町遺跡 No. 39

1 はじめに

本件は、環境省が所管する京都御苑堺町休憩所の建て替えに伴う試掘調査である。

京都御苑は、いわゆる東京遷都後に御所周辺の宮家や公家の邸宅地を苑地としたのが始まりで、御苑の南西隅に近い本件調査地は、慶応2年（1866）の「内裏細見之図」等によって、五摂家の一つである九条家の、広大な敷地の一画であったことが分かる。

この九条家であるが、元禄9年（1696）の「京大絵図」では、鷹司家とともに仙洞御所の北に接して邸宅を構えており、当時の調査地周辺は一般の町屋であった。榎木町通や間之町通も洛中同様に敷設されている。対して宝永の大火（1708）直後、正徳4年～享保6年（1714～1721）頃の「京都明細大絵図」には当該地に「九条殿」が描かれるが、その敷地は慶応期より狭く、榎木町通と丸太町通の間は「明地（空き地）」である。本件調査地点も未だ九条邸には含まれておらず「公家衆」の敷地となっている。降って安永7年（1778）の「京図名所鑑」になると、慶応期と同様の敷地に拡充されており、両隣に鷹司家や閑院宮家も描かれる¹⁾。したがって、九条家は宝永大火後の公家町拡張に伴って当該地へ移り、18世紀半ば頃に本件調査地点を含むまでに敷地を広げたものと思われる。なお、九条家の遺構として今に残る拾翠亭は、寛政年間（1789～1801）の造立とされる。

また、当該地は平安京左京二条四坊一町の北側、中御門大路に当たるとともに、縄文から飛鳥時代の集落跡である烏丸丸太町遺跡にも含まれている。

本件は計画建物が簡易なものであるため、遺構の地中保存を前提とし、それが可能であるかどうか、遺構面の深さの確認を主眼として実施した。実施日は平成20年7月9日で、調査面積は10㎡である。

2 層序と遺構

遺構深の確認が主眼であるため、調査は既存建物を残したまま、その周囲に小規模なトレン

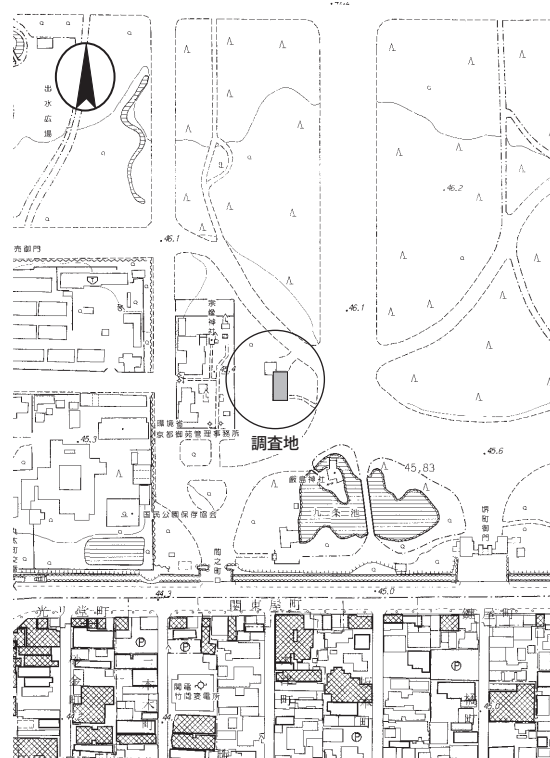


図17 調査位置図 (1:5,000)

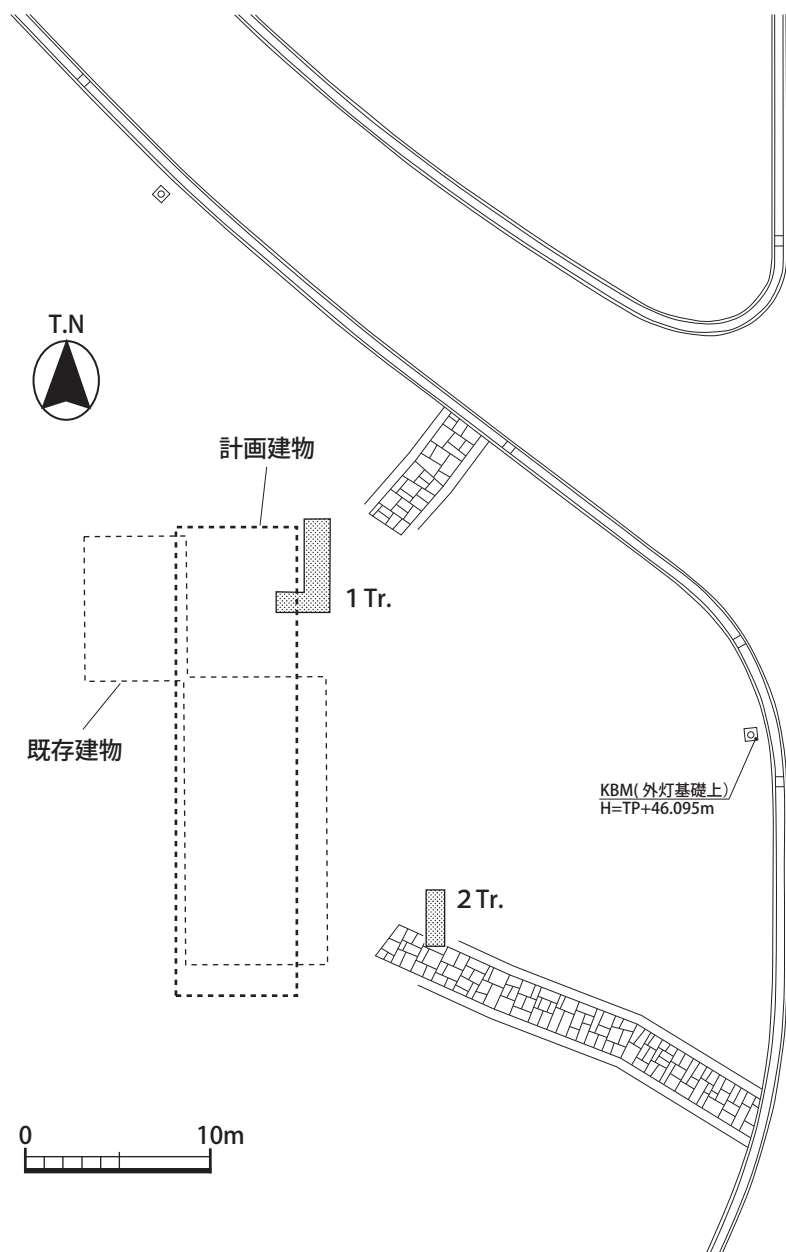


図 18 トレンチ位置図 (1:400)

チを入れて行った。樹木や地中ライフラインを温存しながらであるため、必ずしも狙い通りの位置を掘ることができなかったが、1 Tr. は計画建物の北東隅、2 Tr. は南東外側に設定した。

層序 トレンチで見ると、遺構面に至るまでの基本層序は比較的単純である。近現代と思われる盛土(①・②層)の下に、ほぼ無遺物の砂礫層があり(③層)、その下が第1遺構面となる。検出深は1 Tr. で仮ベンチマーク(以下 KBM と記す。) -0.98m、2 Tr. で -0.95m である。

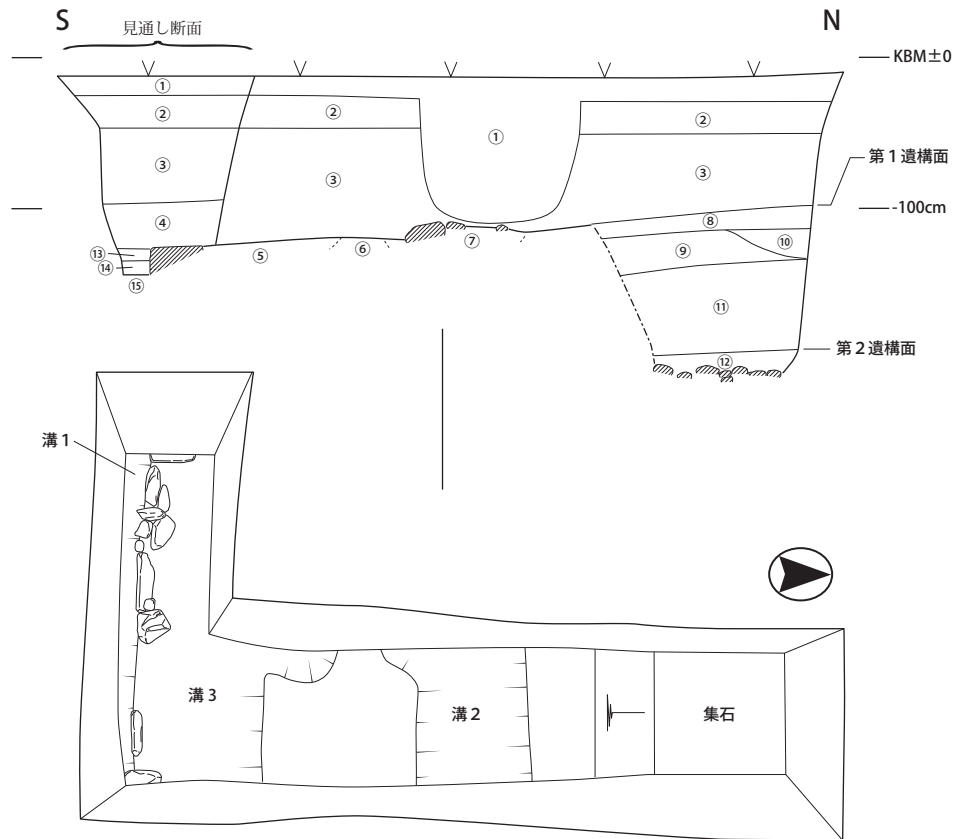
また、1 Tr. 北端で断ち割りを行ったところ、第1遺構面の0.95m 下で、よく締まった整地面(⑫層)を確認したため、これを第2遺構面と考えた。

溝 1 1 Tr. 南端の第1遺構面で検出した東西方向の石組溝。北肩のみの検出で、南肩はトレンチ外になる。側面を人頭大のチャートや花崗岩の自然石で護岸しており、底石は持たない。下層埋土(⑭層)中から16世紀末～17世紀初め(京都X I期古段階)²⁾、上層埋土(⑬層)から17世紀中葉(京都X I期新段階)の土師器が出土しており、位置的に見て宝永大火後に埋められた榎木町通北側溝である可能性が高い。

溝 2 幅約0.9mの東西溝で、1 Tr. 南端の第1遺構面で検出した。図19では省略しているが、拳大の川原石を多量に含んでおり、蔵基礎の可能性が考えられる(写真6)。

溝 3 溝1の北側に平行し、これに切られる東西溝である。平面検出作業時ではあるが、この上面から17世紀後半(京都X II期古相)の土師器が出土しており、これを積極的に評価するならば、溝1の年代も半世紀降ることになる。

《1トレンチ》



《2トレンチ》

- ①現代盛土
- ②10YR 4/1 褐灰色泥砂 (近世末~近代か)
- ③10YR 6/2 灰黄褐色砂礫
- ④10YR 3/1 黒褐色泥砂
- ⑤10Y 3/1 オリーブ黒色泥砂
- ⑥2.5Y 3/2 黒褐色泥砂
- ⑦5Y 3/1 オリーブ黒色泥砂
- ⑧7.5Y 3/1 オリーブ黒色泥砂
- ⑨5Y 3/2 オリーブ黒色泥砂 (締まり悪い)
- ⑩10YR 5/3 にぶい黄褐色粗砂
- ⑪2.5Y 3/1 黒褐色泥砂 (締まり悪い)
- ⑫2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色泥砂
(締まり良い, 整地土)
- ⑬10YR 5/4 にぶい黄褐色粗砂 (溝埋土)
- ⑭5BG 3/1 暗青灰色砂 (溝埋土)
- ⑮10YR 4/6 褐色砂礫

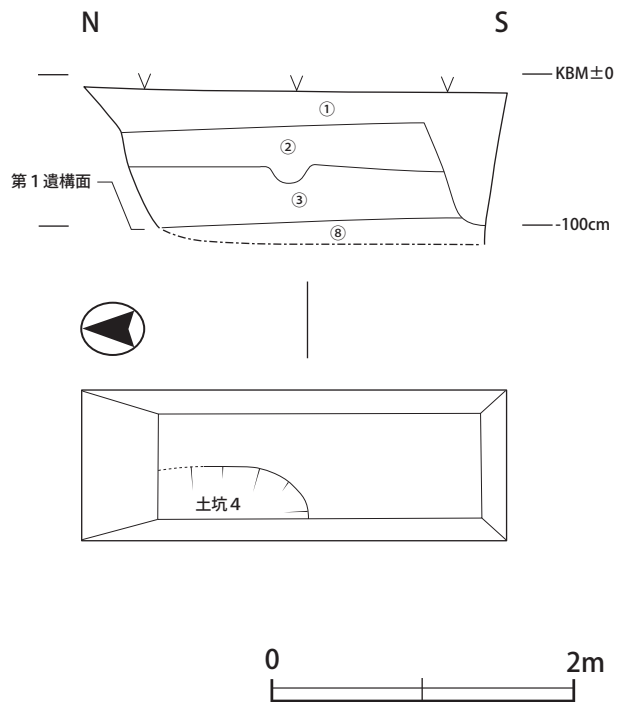


図19 1・2Tr. 平面図及び断面図 (1:50)



写真6 1 Tr. 溝2 検出状況（北東から）

集石 1 Tr. 第2 遺構面のすぐ下では拳大の川原石が面的に認められたが、面として敷いてあるというより、充填してあるものようであった。小さな断ち割りなので詳細不明であるが、礫の直上を整地してあることから、土取穴のような土坑を、整地に先立って礫で埋め立てたものではないかと考える。

土坑4 2 Tr. で検出した。長径 1.0m 以上、短径 0.35m 以上の楕円形を呈する。

3 まとめ

本件は、ごく限られた面積の試掘ではあったが、調査の主眼であった遺構面の深さについて、第1 遺構面が KBM-0.95m (TP+45.145m)、第2 遺構面が -1.93m (TP+44.165m) であることが判明した。後者については年代不詳であるが、

前者は出土遺物から 17 世紀代、当該地が公家町に組み込まれる前の状況を示すものと判断される。したがって、この上層の灰黄褐色砂礫（③層）は宝永大火後の公家町拡張に伴う盛土層と捉えられ、③層上面が九条家の遺構面ということになる。ただし、すでに削平されたものか、この面で遺構は確認できなかった。なお、第1 遺構面上の火災痕跡も特に認められなかった。

本件建て替え工事に関しては、既存建物が存在することからも当該地点に九条家遺構面はほとんど残っていないものと考えられるため、第1 遺構面以下を保存対象とし、保護層を確保した上で施工することとなった。

（堀 大輔）

註

1) 絵図については、以下を参照した。

国際日本文化研究センター所蔵地図データベース (<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/shozou-map.html>)・平凡社『京都古地図散歩』別冊太陽 86, 1994 年

2) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』（有）京都編集工房, 2005 年

Ⅲ - 2 平安京左京四條一坊一町跡 No. 4

1 はじめに

調査地は中京区壬生朱雀町 5-2, 5-5 で、千本三条から四條大宮へ向かって後院通を南東へ約 100m 下がった東側の東西に細長い敷地である。この地は朱雀大路の東に面する平安京左京四條一坊一町に相当するが、この町の占有状況については明らかになっていない。

今回、当該地に共同住宅建設が計画されたため、平成 19 年 10 月 31 日に遺構の残存状況の確認を目的として試掘調査を行った(図 21)。その結果、調査地東半(1T)からは顕著な遺構は認められなかった一方で、西半(2T)では池状の堆積及びその下層上面で洲浜と考えられる石敷が確認され、園池遺構の存在が明らかとなった。これを受けて、遺構の展開を確認するために試掘調査を延長して調査地西半を中心に調査区を拡張した。平成 20 年 1 月 8 日～ 22 日までの延べ 10 日間を要した。調査面積は 10 月実施分と合わせて 172 m²に及んだ。

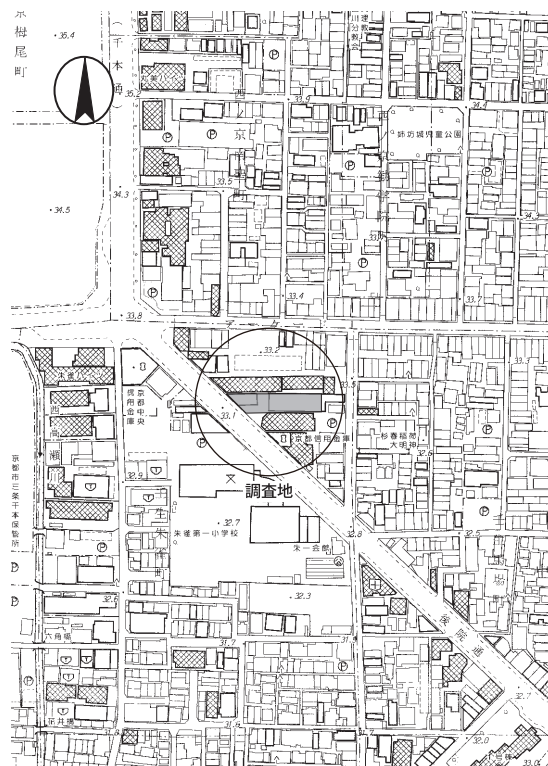


図 20 調査位置図 (1:5,000)

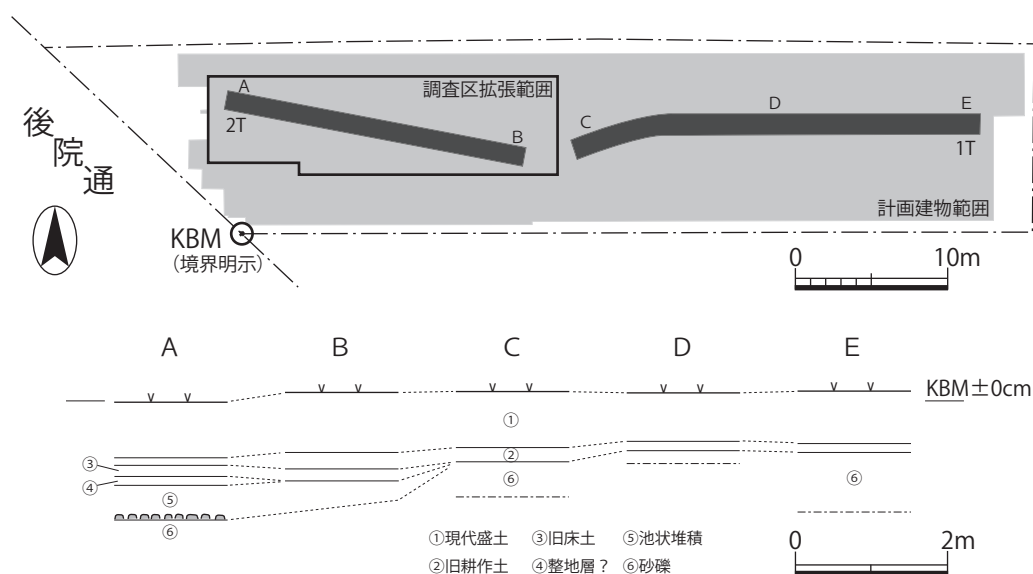


図 21 調査区位置図 (1:500) および北壁断面柱状図 (1:100)

2 遺 構

層序 (図 22) 調査地は後院通に面した東西に細長い敷地であり、東から西に向かってわずかに傾斜している。基本層序は、現地表面から順に現代盛土 (①層, 厚さ 0.5 ~ 0.7m), 近世耕作土および床土 (②・③層, 厚さ 0.2 ~ 0.4m) までは共通するが、以下は調査地の東西で大きく異なる。調査地東半では近世耕作土直下で砂礫が検出され、西半では整地層 (⑨層, 厚さ 0.2m 前後), 池埋土 (⑬・⑮層, 厚さ最大 0.5m) が堆積し、遺構成立層 (⑳~㉓層) に至る。遺構成立層は大半が砂礫で、一部に灰色粘土層 (㉔・㉕層) が確認できる。このうち砂礫の一部からは弥生~古墳時代の遺物片が出土しており、旧地形として流路や湿地の存在が復元される (以下、遺構成立層を便宜的に「地山」と表記)。調査区を拡張した範囲は調査地西半の池埋土が確認された部分に相当する。

池 (図 22・23, 巻頭カラー写真 1) 調査区ほぼ全域で検出され、調査区中央に位置する南北方向の堤状遺構によって東西に分断される (以下、堤状遺構を境として西側の池を「西池」、東側の池を「東池」と表記)。調査区南西角には円丘状の高まりが認められ、調査区外にどのように展開していくかは明らかでないが、西池の中に浮かぶ中島となる可能性も含まれる。

西池では河原石を地山直上に敷いて洲浜を一面に備える。洲浜に用いられた礫は三種類の大きさに大別され、西から東へ徐々に小さくなる。つまり、径 15cm を超え片手に余る大きさの礫が西側、径 10cm ほどの拳大の礫が中ほど、径 3 ~ 5cm 程度の礫が東側に、調査区南西角の高まりを中心として円弧を描くように帯状に敷かれる。西側の大きめの礫は大半が灰色系の砂岩でほぼ隙間なく敷かれるも、地面に突き刺すように据え付けられて礫の長軸が揃わない部分もあり、洲浜面の凹凸がやや目立つ。その一方で東に敷かれた細かな礫は砂岩のほかにチャートや石英など使用石材が多様であり、青白色や青色を呈するものが総じて多く、礫の平らな面を上にしてタイル張りのように丁寧に隙間なく据え付けられる。池の東西で礫の大きさや据え付け方、使用石材が漸次的に変化し、池の中ほどは東西両側の中間的な様相を示す。礫の大きさの違いは礫の据え付け方や使用石材といった他の洲浜を構成する要素の変化とも対応しており、大きく 3 つに捉えられる礫の円弧状分布は洲浜施工時の作業単位を表していると想定される。礫の大小や施工面の凹凸、石材の使い分けによる色彩の違いといった、視覚的效果をねらった洲浜の施工工程の一面が復元される。

西池と堤状遺構の境界付近には幅 0.2 ~ 0.3m 程度、深さ 0.1m に満たない浅い南北溝が認められる。北側では溝として認識できるが、南に行くにつれて窪みが薄れていく。溝の底面にも礫が敷かれ、埋土も池のそれと異なるため、洲浜施工に伴う地業溝とは考えにくく、園池成形段階に堤状遺構との境界や洲浜の施工範囲をおおまかに規定した施設と推定される。

東池では東端の汀を除き、洲浜は施されない。東池東岸の汀では地山上面に灰色粘土を薄く敷いて (㉙層), その上に河原石を貼り付けるという丁寧な施工が確認される。洲浜は 31.55m よりも高いレベルに限って認められたが、これは 31.55m よりも低い洲浜施工面が攪乱によって削



图 22 調査拡張区平面図および断面図 (1:100)

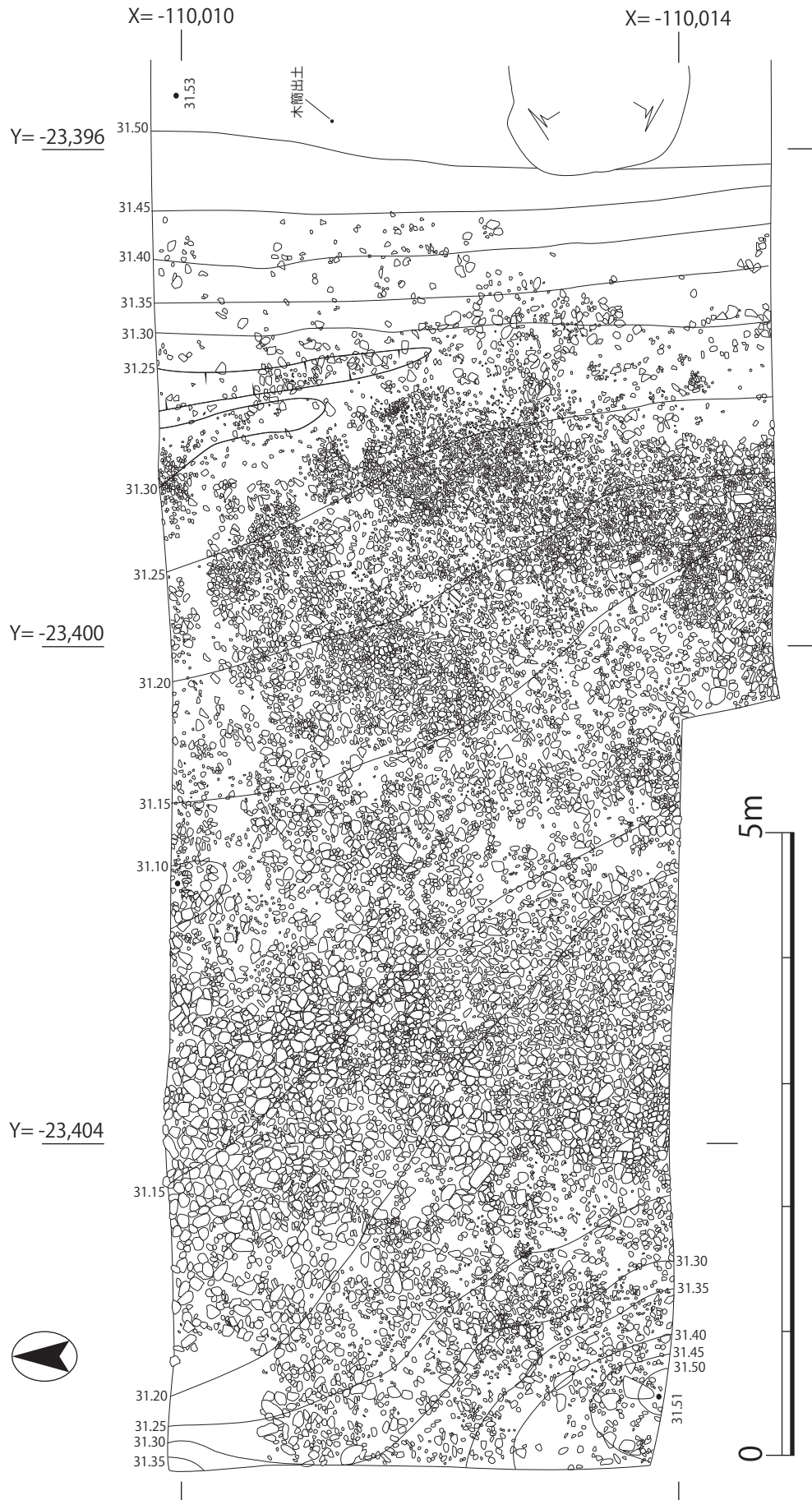


图 23 西池洲浜平面图 (1:50)

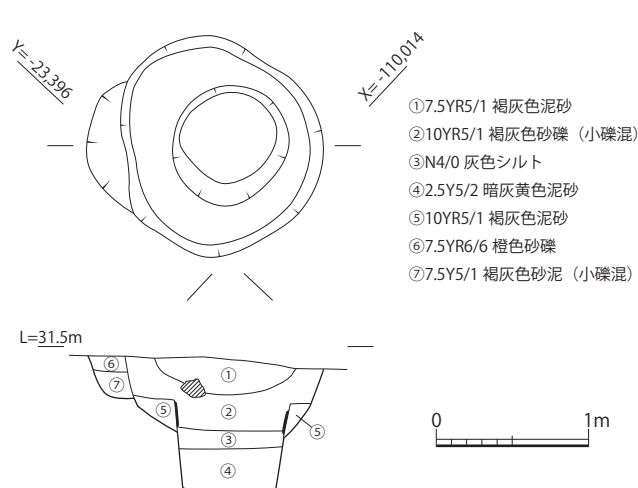


図24 井戸平面・断面図 (1:50)

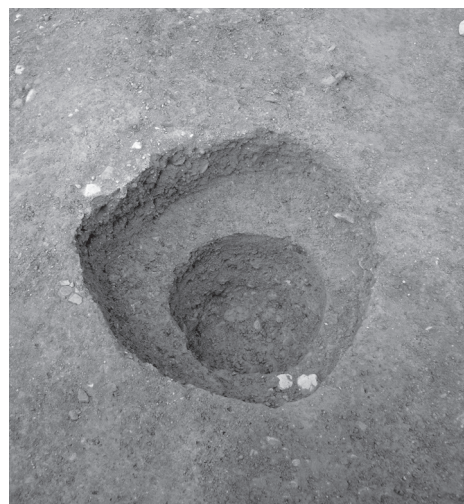


写真7 井戸完掘状況 (南から)

られたことによるもので、本来はより低いレベルの斜面部にも敷かれていたものと思われる。

池(西池)の埋土は2層に分けられる(⑬・⑮層)。上層の⑬層は黄灰色細砂、下層の⑮層は黒褐色泥土で、両層はピッチの細かい波線状に分層される。東池の埋土は西池の埋土堆積状況とやや異なるものの、下層埋土の黒褐色泥土(⑮層)や整地層(⑨層)は共通し、双方の池から出土する遺物の年代は重複する。土層の堆積状況や埋土に含まれる遺物からみて、東西の両池は同時に機能し、堤状遺構を境として洲浜の施工範囲の違いによって異なる景観を作り出していたと判断される。

双方の池ともに地山を削り出して成形され、検出範囲における底面のレベルは西池が31.09m、東池が31.13mを測る。堤状遺構や西池南西の高まりのレベルから池の水面レベルを標高31.40m前後に推定すると、水深0.3m程度という復元値を得ることができる。また、池底面の勾配は平坦で水流の方向を判断するのは難しいが、周辺の地形を含めて考えれば、南方向へ非常に緩やかに水が流れていたと推定される。

堤状遺構(図22) 調査区のほぼ中央で、池を東西に二分する南北方向の帯状の高まりである。検出範囲ではレベルが31.50～31.55mとほぼ一定であり、幅も約3.0mと一定を保つ。ただ、調査区外で先細りして岬状になる可能性も考えられる。裾部との比高差は東で約0.3mを測り、西で0.2m未満であり、断面形態は扁平な蒲鋒形を呈する。地山を削り出して成形され、大まかに高まりを削り残した上に厚さ0.2m程度の盛土を施して整形される(⑯～⑱層)。盛土からは京都I期新形式～II期古形式¹⁾の遺物が出土しており、池を含めた園池遺構の造営時期の上限をこの年代に求めることができる。

井戸および土坑(図24, 写真7) 堤状遺構上で検出した。平面は径約1.4mの不整形円で、深さは検出面から0.9mを測る。径0.75m程度の曲物の痕跡が認められた。井戸内埋土には遺物はほとんど含まれないが、掘方埋土(井戸⑤層)より出土した遺物より中世後期の年代が与えられ、園池廃絶後の遺構と理解される。底面のレベルは標高30.55mである。また、井戸の北側に隣接して土坑を検出した。井戸にほぼ重なるように切られているため、詳細は明らかでない。

3 遺物

合計でコンテナ 10 箱（土器類 4 箱，瓦類 5 箱，木製品 1 箱）出土した。そのほとんどが池の埋土からの出土である。園池遺構であれば完形遺物の一括資料を含め相当量の遺物の出土が期待されたが，今回の調査では総出土量も決して多くなく，土器類および瓦類についてはすべて破片資料で完形に復元できるものはなかった。

土器類（図 25） 土器類として，土師器（1～7）・黒色土器（8）・須恵器（9～28）・緑釉陶器（29～37）・灰釉陶器（38～43）・弥生土器（44）が出土している。

土師器には皿（1～5）・甕（6・7）がある。皿は外面にケズリ調整が施されたものが多いが，口縁部外面に 2 段ナデがみられるものも少数みられる。外面にケズリ調整を施した皿には「氏」と墨書された破片も認められる（1）。5 は井戸掘方埋土（井戸⑤層）からの出土である。

黒色土器は鉢あるいは小型椀（8）である。内面にミガキを施す。

須恵器には杯 B 蓋（9～12）・杯 A（13）・杯 B（14～18）・鉢（19・20）・壺（21～25）・甕（26・27）などの破片がある。壺 M の底部外面には回転糸切り痕が観察される（24・25）。須恵器の出土量は他の土器に比べて相対的に多い。なお，11 の内面や 17 の底部外面は硯に転用され，須恵質の風字硯も出土している（28）。

緑釉陶器には椀や皿がみられる（29～35）。小片であるため椀と皿の区別が難しいが，平高台と輪高台が併存する。内面に陰刻花文を施した皿（32）や外面下部に陰刻文の痕跡をわずかに残す軟質素地の火舎（36）も出土した。37 は軟質素地の表面に緑釉をかけた手捏ねの土製品である。小片のため詳細は不明である。

灰釉陶器には椀あるいは皿（38～41），壺（42・43）がある。

このほか，弥生時代中期に位置づけられる広口壺の口縁部も出土した（44）。園池成立以前の旧流路から出土したものである。

瓦類（図 26：45・46） 丸瓦は凸面に縄目タタキのちナデ調整，凹面に布目の痕跡を残す。平瓦は凸面に縄目タタキ，凹面に布目の痕跡を残す一枚作りの破片がほとんどで，平瓦のうち 1 点のみ凹面に桶巻き作りの痕跡が観察された。総破片数は 314 点で，うち丸瓦は 74 点，平瓦は 240 点である（丸瓦：平瓦≒ 1：3.2）。総重量は 57.38 kg で，丸瓦は 12.13 kg，平瓦は 45.25 kg である（丸瓦：平瓦≒ 1：3.7）。

軒瓦は少なく，軒丸瓦と軒平瓦の破片が 1 点ずつ出土したのみである（45・46）。軒丸瓦は単弁十二葉蓮華文軒丸瓦で，表面が摩滅するも蓮弁，圏線，珠文が残る。軒平瓦は均整唐草文軒平瓦である。長岡宮式 7133 に類似する²⁾。文字瓦は認められなかった。

木製品（図 26：47～57） 実用品のほか，器物をかたどった形代が出土した。実用品として漆器皿（47）や下駄（48～50），曲物蓋板（51）などが挙げられる。堤状遺構上からは短冊形の板の表裏両面に墨書を有する木簡も出土した（52・出土位置は図 23 参照）。表面に 4 文字，裏面に 2 文字程度の墨書がかろうじて確認されるが判読はできない。形代には鋤形と推定され

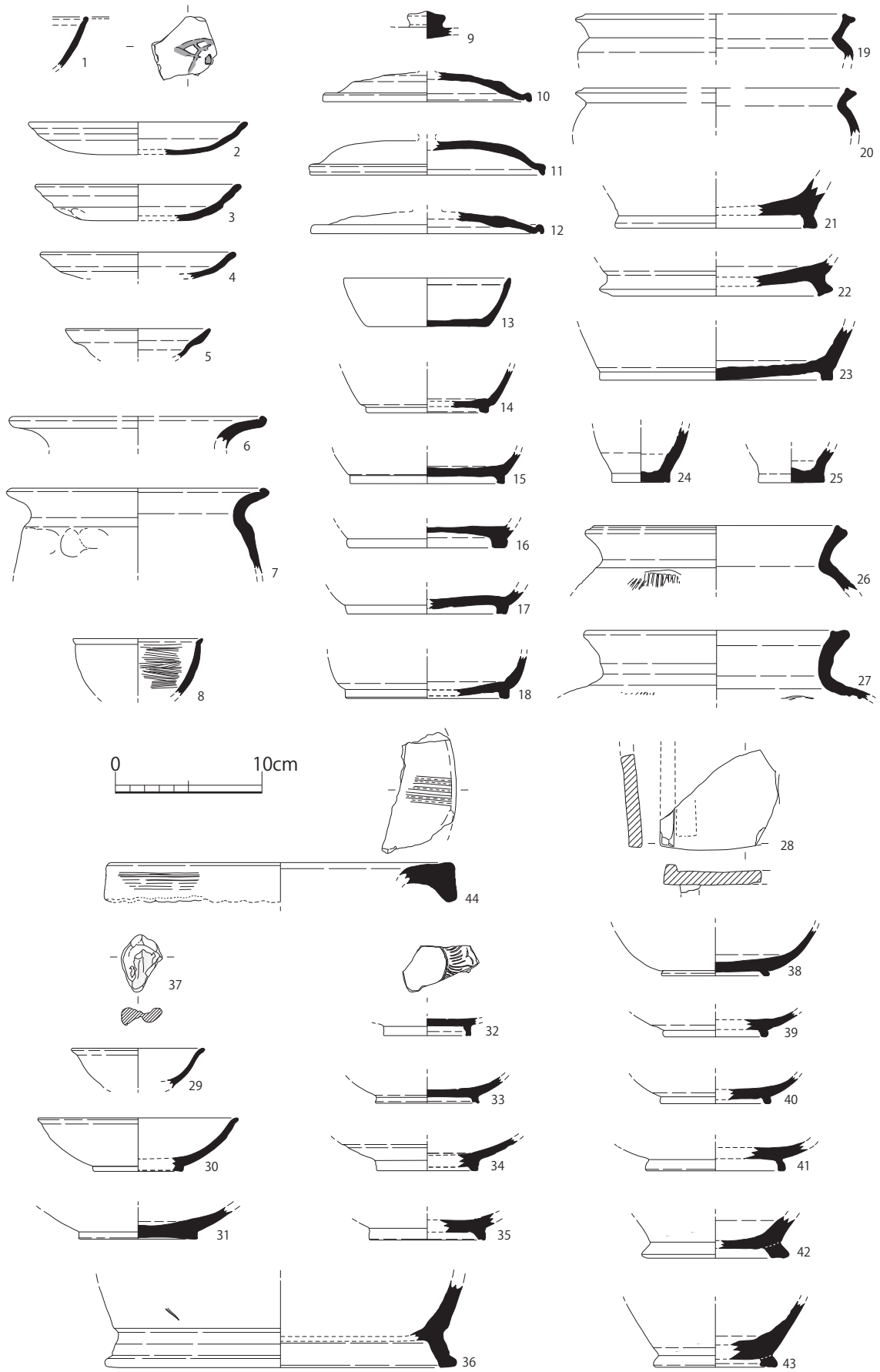


图 25 土器類実測図 (1:4)

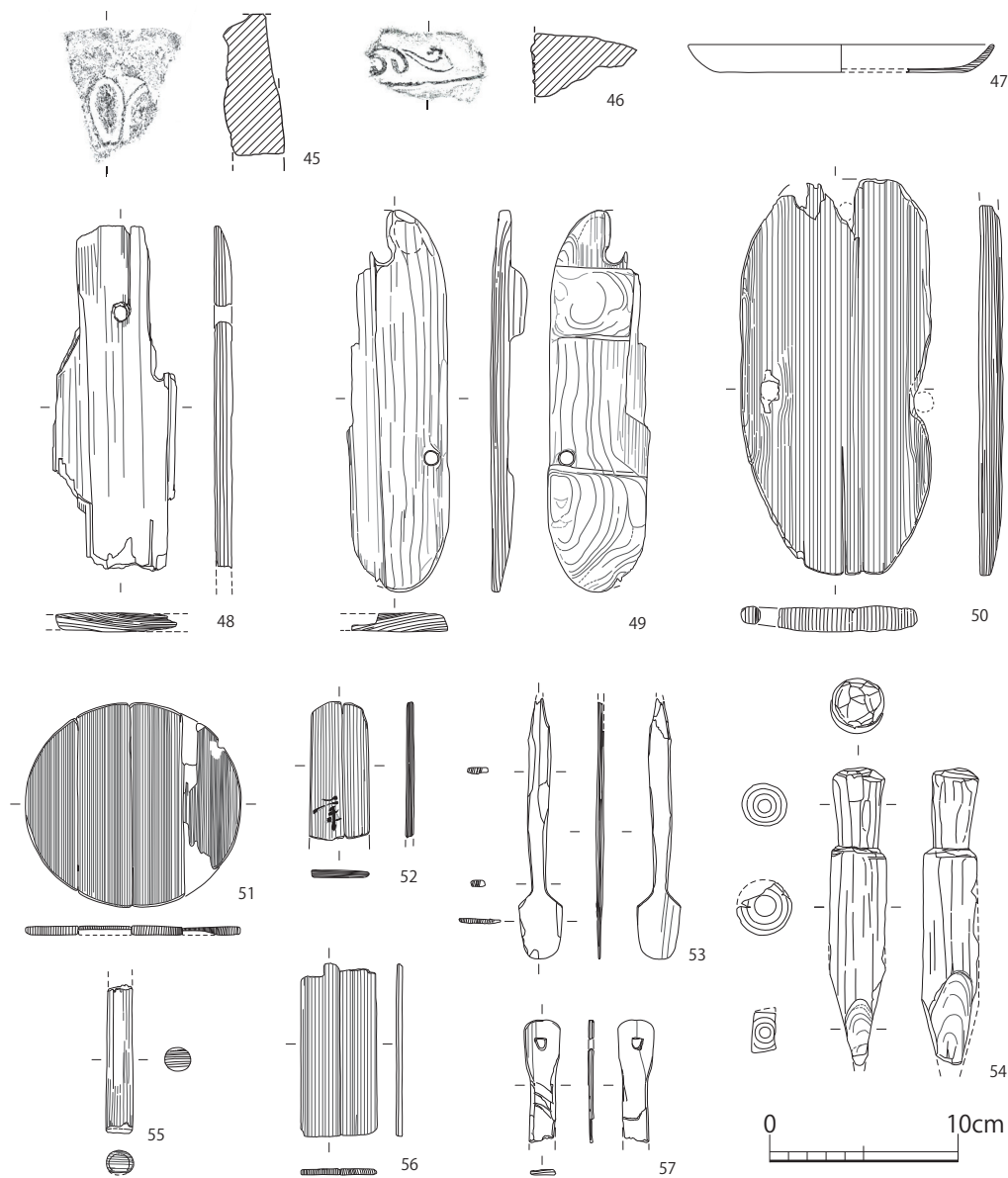


図 26 瓦類・木製品実測図 (1:4)

るものや杭形工具を模したものがある(53・54)。ほかにも、丸棒状、板状、竹製の不明木製品がある(55～57)。竹材を用いた57は端部が穿孔されており、柄を表現した何らかの形代の可能性もある。

加工痕を残す木製品のほかに、枝状あるいは棒状の自然木片も一定量出土した。その中には先端などに部分的に焼けた痕跡を残すものも認められた。

種実 径2.5cm程のヒメグルミの核である(写真8)。黒褐色で一端が尖った円形を呈す。

このほか、サンプルとして採取した池の埋土を篩にかけて水洗選別し、顕微鏡観察により同定するという方法で埋土中に含まれる微細な種実の同定をおこなった。その結果、水辺付近に生息する植物を含む多種の種実が確認できた(表2)。なかでも、ミズアオイの種子の含有が他種を凌駕しており、この傾向はサンプルを採取した池埋土の上下各層ならびに下層の上下位にも共通

表2 池埋土に含まれる種実一覧

サンプル土層				A-N	B1-N	B2-N	B1-S	B2-S
サンプル量				50ml	150ml	150ml	110ml	120ml
和名	科名	部位	生育地	個数	個数	個数	個数	個数
タデ科(扁平)	タデ	種子	原野・道端・湿地	5	5	14	4	3
タデ科(三稜)	タデ	種子	原野・道端・湿地	4	4	13	1	
ミゾソバ	タデ	種子	水辺	1	4	4		1
アカザ属	アカザ	種子	荒地・畑	1	1	1		1
ヒユ属	ヒユ	種子	畑・道端	3	1	27	2	7
ザクロソウ	ザクロソウ	種子	畑・道端		1	3	1	1
スベリヒユ	スベリヒユ	種子	畑・道端		2			
ハコベ属	ナデシコ	種子	道端・畑・山野	1	3	6	1	
ノミノフスマ	ナデシコ	種子	水田・畑・野原	7	63	28	33	34
ツメクサ	ナデシコ	種子	道端・庭			4		
キンボウゲ属	キンボウゲ	果実	山野・野原・道端・湿地		2	3		1
タガラシ	キンボウゲ	果実	水田・溝	10	42	48	33	31
アブラナ科	アブラナ	種子	山野・道端・湿地		13	7		3
キイチゴ属	バラ	核	山野		2	1		1
キジムシロ属	バラ	果実	山野	2	2	1		3
カタバミ属	カタバミ	種子	庭・道端	1	9	19	8	4
ミズハコベ	アワゴケ	種子	沼・水田(抽水)	7	5	84	10	8
オトギリソウ科	オトギリソウ	種子	山野・湿地	1		1	1	
ミズユキノシタ	アカバナ	種子	池・沼の岸部		2	1		
セリ科	セリ	果実	山野・湿地		1	1	1	2
チドメグサ属	セリ	果実	山野・道端	7	11	14	5	6
シソ科	シソ	果実	山野・道端	7	11	11	12	13
シロネ属	シソ	果実	水辺・湿地		1			3
トウバナ属	シソ	果実	山野	1	1	1		
ナス科	ナス	種子	山野・道端・畑			3		
ナス	ナス	種子	食用	3	6	12		2
ゴマノハグサ科	ゴマノハグサ	種子	野原・田のあぜ道		3			
オオバコ	オオバコ	種子	道端・畑			2		
ウリ	ウリ	種子	食用	1		1	2	
タカサブロウ	キク	果実	道端・水田		3	3	3	6
ヒルムシロ属	ヒルムシロ	果実	池沼(浮葉・沈水)	2	12	5	13	12
イバラモ属	イバラモ	種子	湖・池・沼・流水(沈水)		3	2	1	
オモダカ属	オモダカ	果実	水田・溝・浅い池(抽水)		9		5	
オモダカ科	オモダカ	種子	水田・溝・浅い池(抽水)			3		
マルミスブタ	トチカガミ	種子	水田・溝・浅い池(沈水)			4		
ニワホコリ	イネ	種子	庭・田・道端			2		
カヤツリグサ科(扁平)	カヤツリグサ	果実	畑・道端・水田・湿地	31	71	53	29	18
カヤツリグサ科(三稜)	カヤツリグサ	果実	畑・道端・水田・湿地	6	7	9	3	3
スゲ属	カヤツリグサ	果実	湿地	1	3			
ホタルイ属	カヤツリグサ	果実	溝・水田等湿地(抽水)	5		18	2	1
テンツキ属	カヤツリグサ	果実	道端・水田等湿地	5	1	5		1
イボクサ	ツユクサ	種子	水田・沼地	3	12	12	11	3
ミズアオイ	ミズアオイ	種子	水田・池沼(抽水)	132	1370	473	1045	934

〔サンプル土層凡例〕

- A-N : 池上層埋土 (⑩層・北壁)
- B1-N : 池下層埋土上位 (⑩層・北壁)
- B2-N : 池下層埋土下位 (⑩層・北壁)
- B1-S : 池下層埋土上位 (⑩層・南壁)
- B2-S : 池下層埋土下位 (⑩層・南壁)

■ : 池の水辺から水中にかけて生育、あるいはその可能性のあるもの。

して認められる³⁾。池は浅い水域をもち、水湿性草本が繁茂していたと推定される。

小結 堤状施設成形時の盛土から出土した遺物群(図25:1・10・13・38)は京都I期新形式~II期古形式に相当し、園池の造営時期の上限を平安時代前期(9世紀中頃)とみることができる。



写真8 ヒメグルミ核(1:1)

一方、池埋土には平安後期の遺物も一定量含まれ、この頃まで園池もしくは池としての機能が継続していたとも推定される。

4 まとめ

今回の調査では、調査区全面で平安時代前期（9世紀中頃）に位置づけられる園池遺構を検出した。園池は旧湿地および旧流路であった地山を削り出すことによって成形され、調査区中央の南北方向の堤状遺構を境に異なる景観を作り出していることが明らかになった。周辺の調査成果を踏まえつつ、点的な調査であった今回の調査内容について、より広い視野での位置づけを試みることで報告のまとめとしたい。

周辺における既往の調査として、調査地から後院通をはさんで南にあたる市立朱雀第一小学校の校舎増改築や防火水槽設置に伴う数次にわたる発掘調査が挙げられ、これらの調査でも平安時代前期の園池遺構が検出されている⁴⁾。特に平成4年度に確認された園池遺構は導水施設や洲浜を備えた9世紀中頃に属する池で、「朱雀院」銘の題箋が出土したことから公的施設の存在が想定されている。この池は東西幅38m、深さ0.3～0.4m、底面レベル標高31.0mを測り、東西

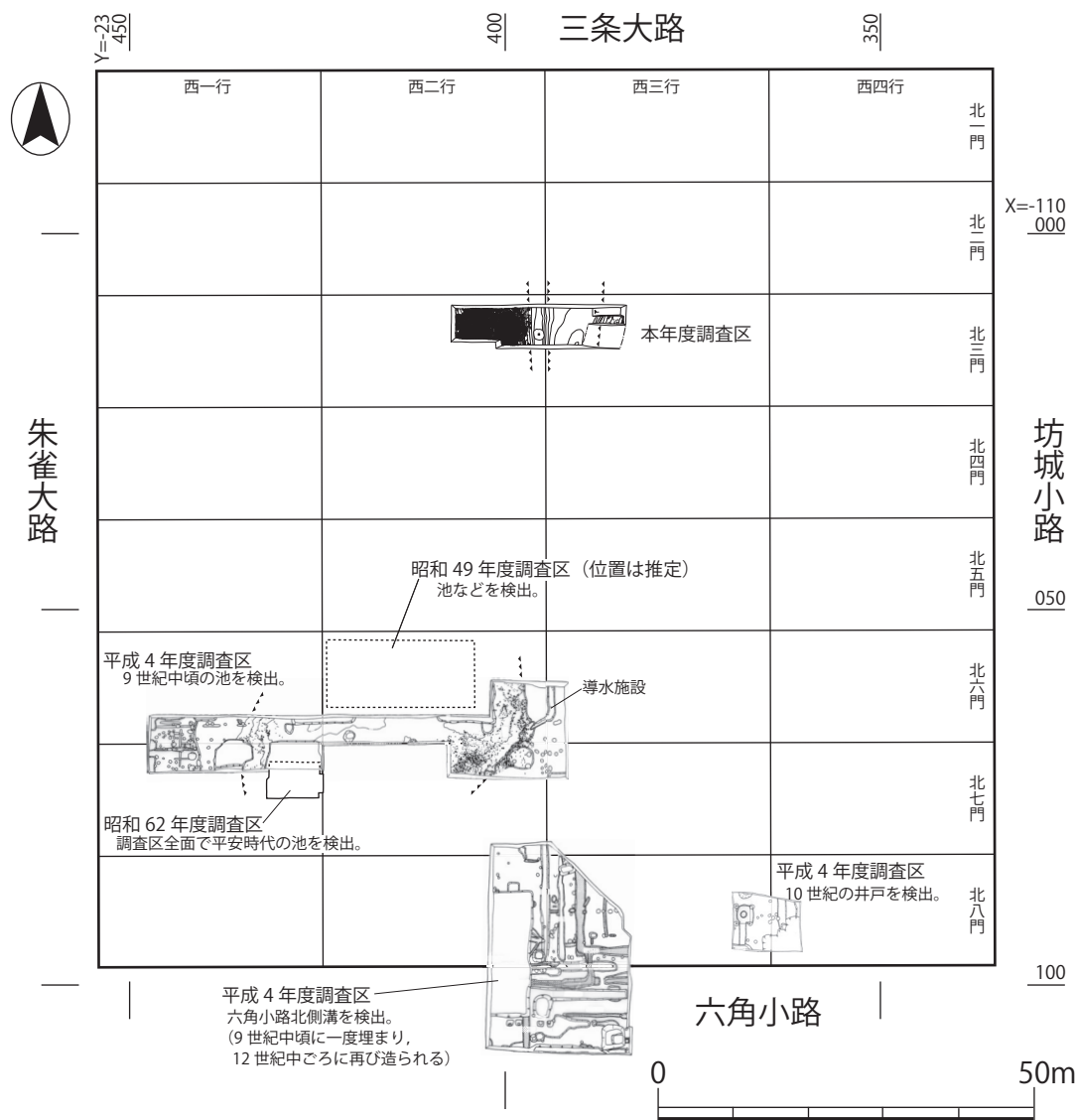


図 27 平安京左京四条一坊一町遺構配置図 (1 : 1,000)

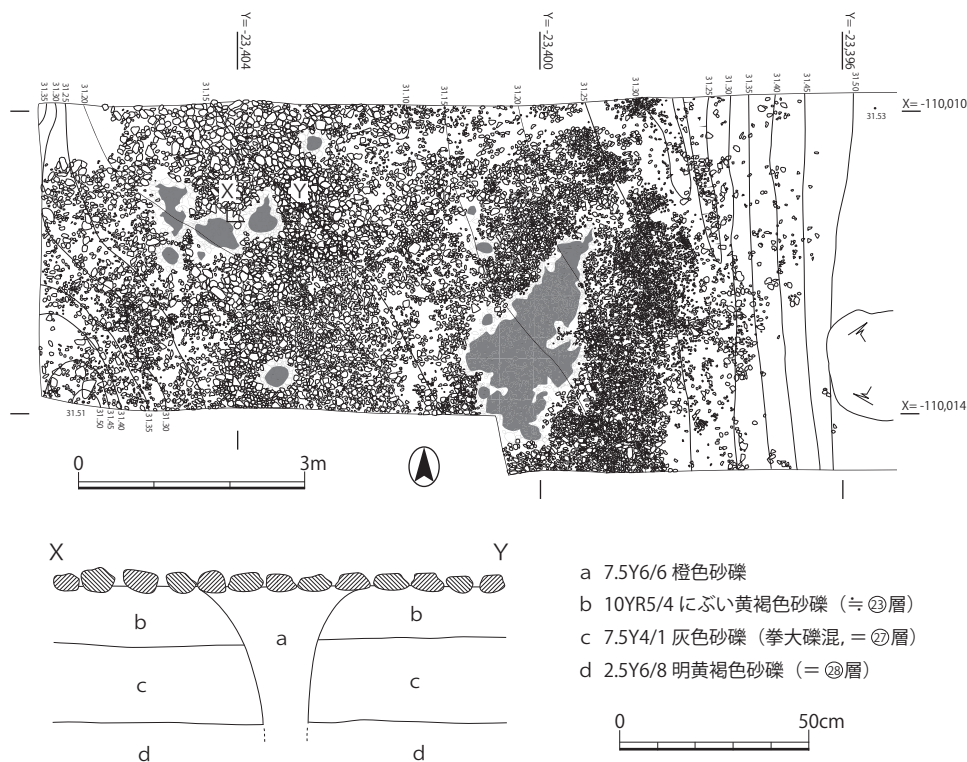


図 28 自噴痕跡の分布 (1:100) および部分断面模式図 (1:20)

両汀の標高 31.1～31.4m の範囲に洲浜が施工され、昭和 49 年度に実施された北隣の調査および昭和 62 年度に実施された南隣の調査でもその続きが検出されており、一定の大きさを有していたことがわかっている。

そこで、今回の調査で検出した園池遺構と小学校校地内検出の園池遺構を比較すれば、池の底面レベルは前者の方が後者よりわずかに高く、かつ出土遺物から推定される両者の造営時期も一致する。さらに、後者の東辺で検出された導水施設は南北方向の溝状を呈し、北ないし北東方向から水をひいてきたことを合わせると、両者が一連の園池を形成していた可能性がきわめて高いといえる。さらに、平成 4 年度の調査で園地形成時に六角小路の側溝が埋没していたことから、南北 2 町の敷地を有していたと考えられており、今後、より面的なデータの蓄積が課題となるが、南北 2 町宅地において北方宅地部分を中心に造営された園池を復元することも可能である。

ところで、調査区内では導水施設や泉はみつかっていないが、西池の灰色系の地山に平面円形ないしアメーバ状に橙色に変色する部分が認められた (図 28 上の網かけ部分)。一部を断ち割ったところ、断面形が漏斗状を呈する鉄分沈着部分が確認された (図 28)。鉄分の沈着は変色した地山上に敷かれた礫の下部表面にも同様に認められ、これはおそらく下層から水が自噴した痕跡と考えられる。池の成因あるいは園池を造営するに至った背景として、この地が水が豊富に湧き出る湧水地帯であったことが推定され、自然的要因が強く影響した可能性が高い。実際、調査地の北に位置する冷泉院や神泉苑から南の四条大宮にかけての帯には平安時代に位置づけられる湧水を利用した園池や湿地状堆積が密に分布している。なお、池の排水に関しては、上述したとおり朱雀第一小学校で検出した園池に直接つながるような排水施設が設けられた可能性が高い

が、朱雀大路東側溝に排水された可能性も考えられる。

今回の調査では、9世紀中頃に位置づけられる園池遺構を検出し、少ない周辺の調査事例と合わせれば1町規模さらには南北2町規模宅地の園池も想定できる。ただし、遺構のごく一部を検出したに過ぎず、園池遺構の全貌について論ずるには課題も多く、今後のさらなる調査成果の蓄積を待たねばならない。周辺に存在したであろう園池に伴う建物遺構の検出も将来の調査に期待したい。

なお、調査時には同志社大学鋤柄俊夫准教授から御協力を賜るとともに、調査から報告書作成に至るまで財団法人京都市埋蔵文化財研究所より多大な援助を得た。記して感謝の意を表したい。

(宇野 隆志)

註

- 1) 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀—』
京都編集工房
- 2) 山中 章(編) 1987 『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書第20集 向日市教育委員会
- 3) この結果は南方約50mで平成4年度に実施された発掘調査で検出された9世紀中頃の池の埋土における分析結果とも共通した内容を持つ。調査を担当した財団法人京都市埋蔵文化財研究所より分析データの提供を受けた。
- 4) 鈴木久男 1991 「平安京左京四条一坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所
南孝雄・鈴木久男・清藤玲子 1995 「平安京左京四条一坊」『平成4年度京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所
このほか、昭和49・50年度に平安京調査会によって発掘調査が行われている(京都市(編)1983『史料 京都の歴史』第2巻・考古 平凡社)。

参考文献

奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所史料第27冊

III- 3 平安京左京七条二坊十町跡・ 史跡 本願寺境内 No. 45

1 はじめに

調査地は、御影堂門と阿弥陀堂門の間の土堀際にあつて、本願寺に参詣する人々にお茶を接待した「お茶所」と言われる建物部分である。寛延2年(1749)から宝暦10年(1760)に行われた阿弥陀堂再建時の余材を受けた泉州接待講が造営したとの由緒¹⁾がある他、宝暦10年作の『京西六条本願寺御大絵図』、安永9年(1780)作の『都名所図会』等にもお茶所が描かれており、江戸時代中期には存在したと考えられる。江戸前期の絵図には阿弥陀堂門から御影堂門までの築地塀は直線で描かれており、お茶所造営に合わせて築地塀を東の堀川通側に屈曲させたこともわかる。

試掘調査は、平成10年の御影堂修理工事に伴い一時解体されていたお茶所の復旧に合わせて実施した。平成20年10月27日、12月5日に調査を行った結果、旧お茶所に伴う礎石等が検出され基礎深度の変更を行った。引き続き、12月22日、24、25、26日に立会調査を実施した。調査面積は153.20㎡である。

2 層序と遺構

層序 厚さ10cmの現地表面直下に、解体前のお茶所の整地層(灰黄褐色泥砂)がある。この下層に炭化物を含む黒褐色泥砂(厚さ25cm)、黒褐色泥砂(厚さ20cm)、締りの強い褐色泥砂と続く。さらに現地表下90cmで、中世土器片を含む淡黄色泥砂の整地層、同110cmで灰白色砂質土の地山に達する。

第1期遺構 1区北端から12.5m地点の淡黄色泥砂層で成立する径25cm、深さ25cmの柱穴1基がある。本願寺成立以前の遺構である。

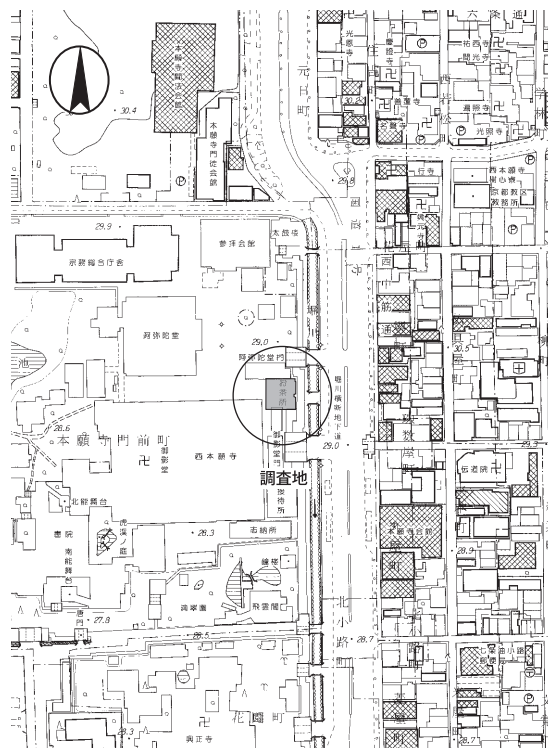


図29 調査位置図(1:5,000)



写真9 2区敷石遺構と下層礎石(東から)

第2期遺構 東西幅約17mのお茶所の東3.93m分は近代に増築されており、増築部分の下位の固く締まる褐色泥砂層で成立する建物礎石列と土間タタキがある。建物礎石列は、石5, 6, 7, 8の4石で構成され、心々距離は1.7m, 1.5m, 1.7mである。解体お茶所とは方位が異なる。土間タタキは、幅1.8mで、解体お茶所の土間がない場所である。

第3期遺構 黒褐色泥砂層で成立する敷石遺構、集石土坑、北端の竈がある。敷石遺構は、第2期の建物礎石列の上層で、第4期の石製U字溝に切られる。東西2.0m、南北0.8mの範

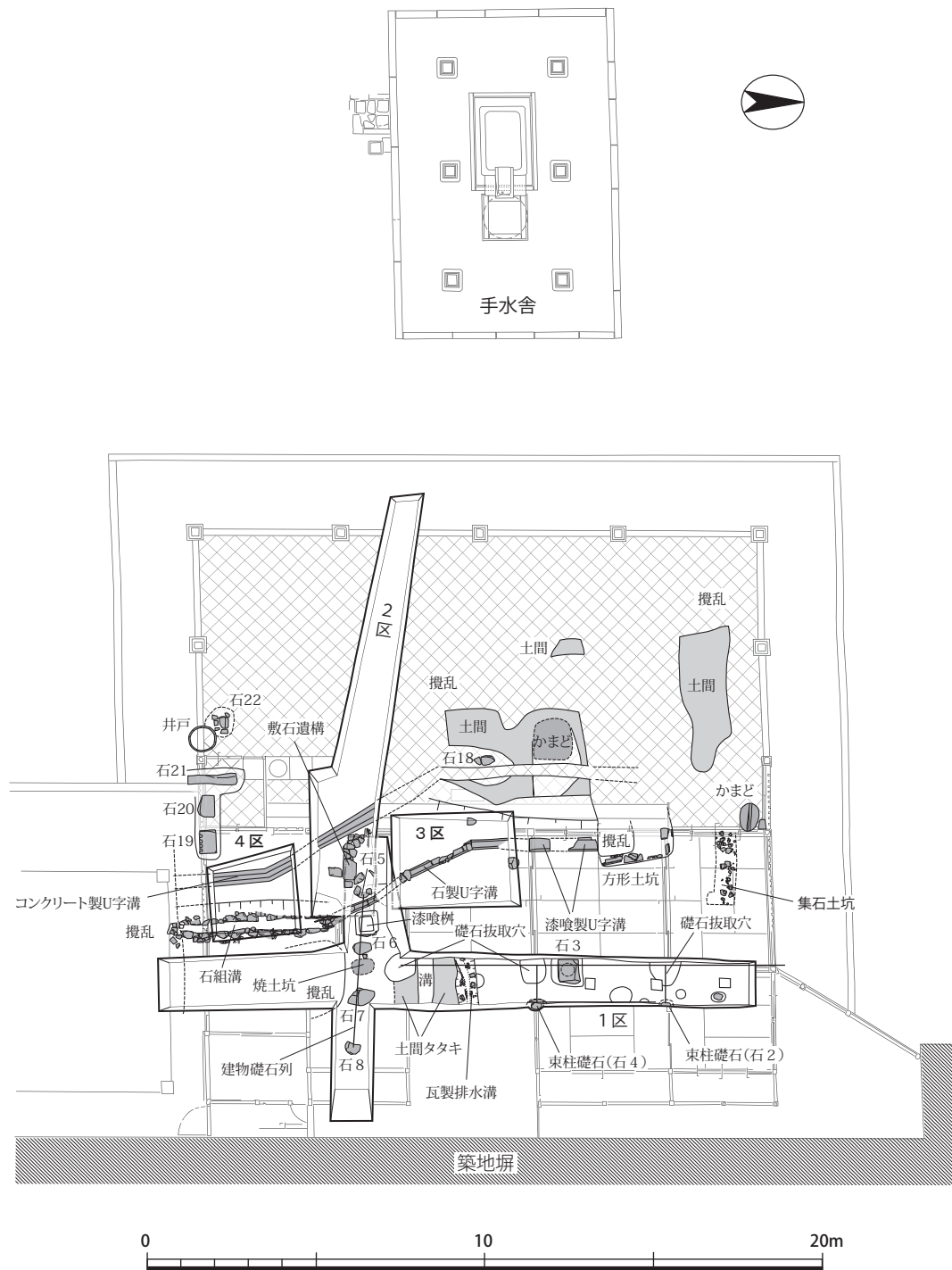


図30 調査区位置図及び検出遺構図(1:200)

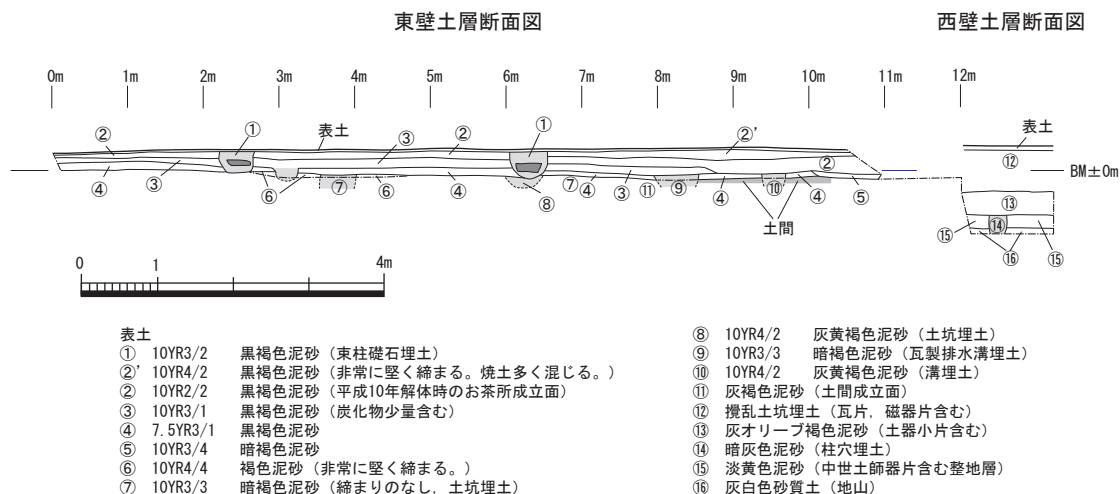


図 31 1区東壁土層断面図 (1:100)

囲で残り、石 10 が伴う。集石土坑は、南北幅 0.6 m で布基礎建物の掘方と考えられる。集石土坑に近接する「かまど」は東西 0.8 m、南北 0.5 m の楕円形で、焼土が堆積する。

第 4 期遺構 炭化物を含む黒褐色泥砂層で成立する方形土坑、土間、漆喰製・石製 U 字溝、石組溝、漆喰樹、瓦組井戸がある。一辺 2.1 m の方形土坑は縁に切り石を並べており、漆喰製 U 字溝と接続する。溝の延長は 8.5 m で、途中で石製 (暗渠) に代わり、開渠の石組溝に接続する。石組溝は長辺 0.3 ~ 0.4 m の自然石を並べたもので、幅は 0.3 m、深さ 0.3 m である。土間は攪乱著しいものの、解体前お茶所と同じ東西 8.5 m、南北 16.5 m の範囲に広がっていたと考えられる。

第 5 期遺構 平成 10 年解体前お茶所に伴う遺構で、束柱礎石 (2, 4)、支柱礎石 (3)、石 18・19・20・21・22、コンクリート製 U 字溝 (暗渠) がある。

3 遺物

石製 U 字溝内及び周辺 溝内から鉄釉椀 (7)、周辺から肥前系染付 (4)、京焼の平椀 (5)、蛇の目高台をもつ伊万里染付皿 (6) が出土し



写真 10 立会調査検出石組溝 (南から)



写真 11 1区・2区検出礎石列 (東から)

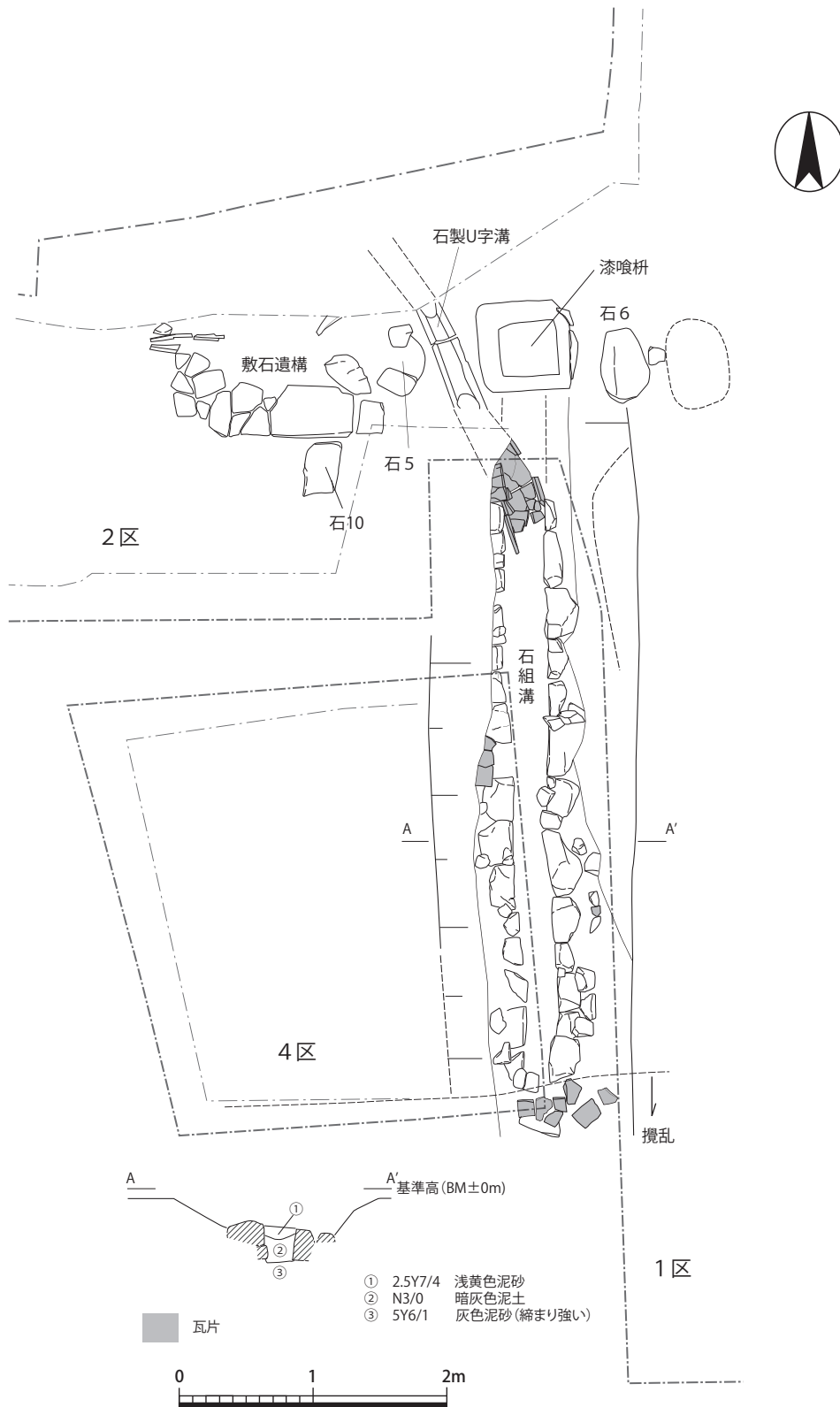


图 32 石組溝・敷石遺構平面図・断面図 (1:50)

ている。京焼5は18世紀中頃、伊万里皿6は18世紀末から19世紀前半のものである。

石組溝埋土 18世紀中頃から後半の伊万里染付碗(8)と京焼碗(9)、鬼瓦の顎(12)がある。

コンクリート製U字溝周辺 天目碗(10)、瓦質の釜ないし火鉢(11)がある。

その他 1区出土の土師器小皿(1, 2), 鉄製^{かすがい}鋸(3)が出土している。

4 まとめ

今回、本願寺成立前も含めて5期に及ぶ遺構群を確認した。江戸時代中期の成立以後、少なくとも4回の改変を受けて現在に至っている。宝暦10年の絵図では現在東西に並ぶお茶所と手水舎が南北に並んでおり、第2期の遺構群は現在のお茶所と方位が異なることから、創建当初に近い遺構と考えられる。(馬瀬 智光)

註

- 1) 金山正憲 「お茶所復旧工事について」『本願寺御影堂平成大修復推進事務所だより』106 (本願寺御影堂平成大修復推進事務所 2009年)

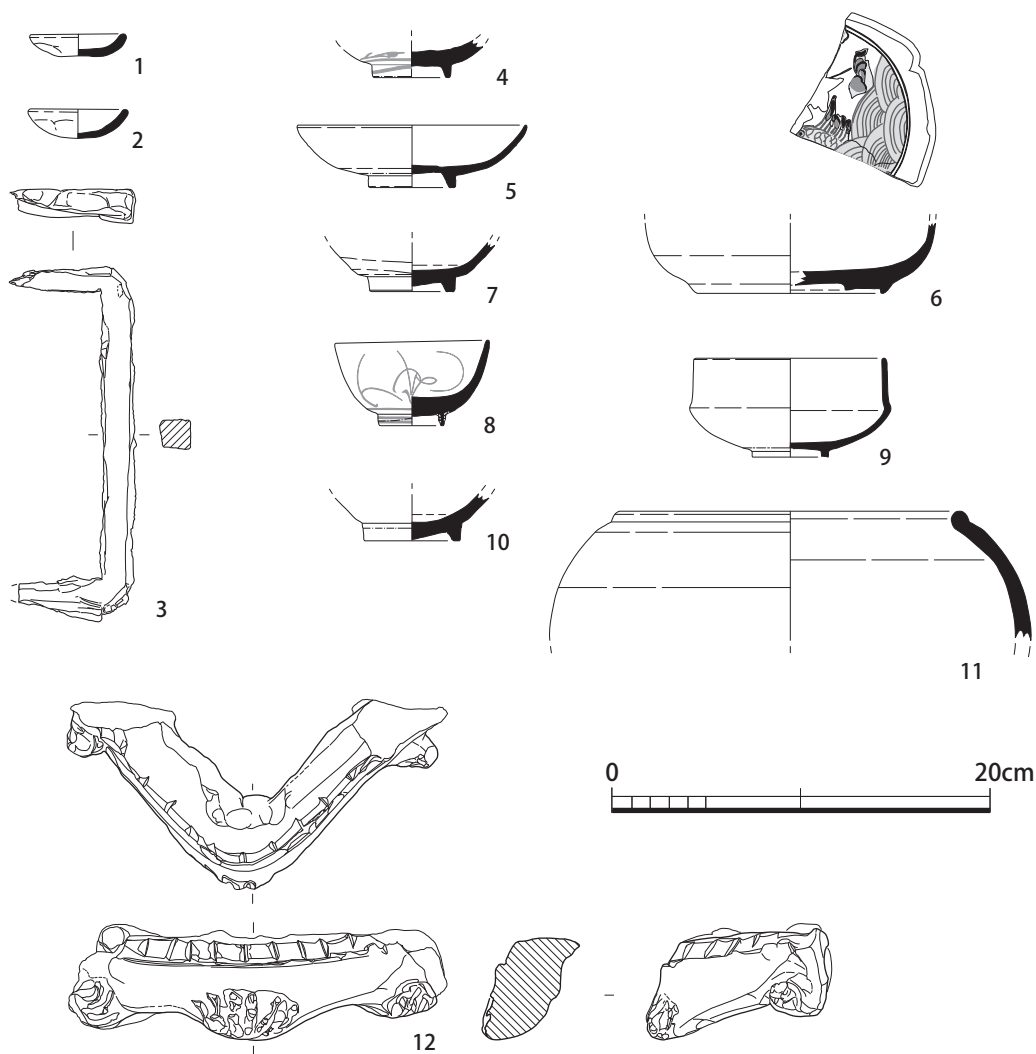


図33 出土土器・瓦実測図(1:4)

Ⅲ - 4 教王護国寺旧境内（東寺旧境内） No. 48

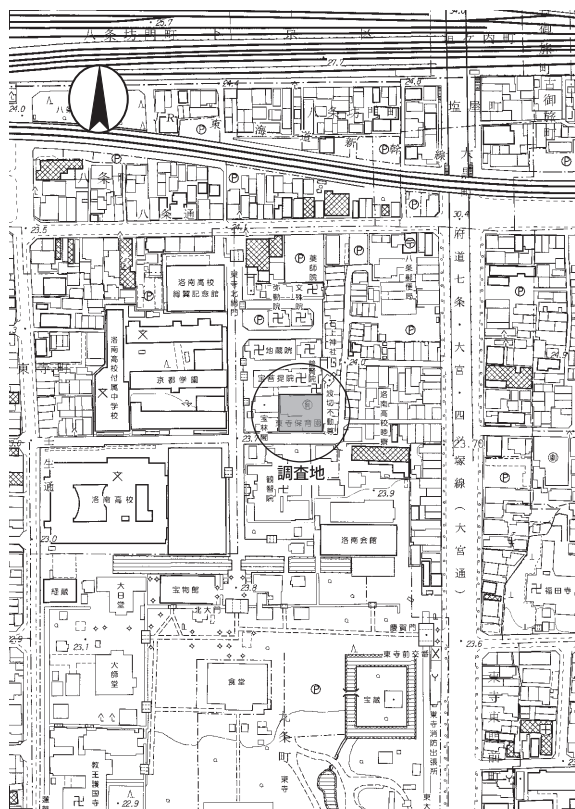


図 34 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は南区大宮通八条下る九条町 399-35 に所在する東寺保育園である。当該地は平安京左京九条一坊十六町にあたり、教王護国寺旧境内となっている。今回、この場所で保育園の建て替えが計画されたため、試掘調査を行った。

当該地は平安時代には教王護国寺の賤院があったと考えられており、江戸時代には子院である金剛珠院があった¹⁾。

調査の結果、顕著な遺構は見られなかったが、緑釉軒丸瓦が 1 点出土したため報告する。

2 層序

1 Tr の基本層序は現代盛土 (①層), 暗灰黄色泥砂 (②層), 褐灰色泥砂 (③層), 灰黄褐色泥砂 (④層), 黄灰色砂泥 (⑤層), オリーブ褐色砂礫 (⑥層) である。

2Tr の基本層序は現代盛土 (①層), にぶい黄褐色泥砂 (②層), 灰黄褐色泥砂 (③層), 黄褐色泥砂 (④層), 暗灰黄色泥砂 (⑤層), 黄灰色砂泥 (⑥層), 砂質土 (⑦層) である。1 Tr の②層と 2 Tr の③層は対応すると見られ、近世の遺構面となる。地山は 1 Tr では GL-1.2m で砂礫 (⑥層), 2 Tr では部分的な深掘りを行い GL-1.5m で砂礫の地山を検出した。

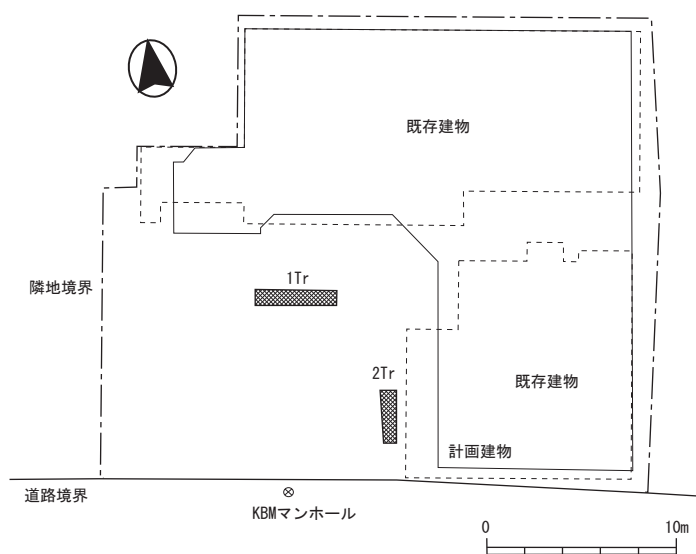


図 35 調査区配置図 (1:400)

3 出土遺物

2 Tr の⑥層から土師器皿（図 37- 1）、④層から緑釉軒丸瓦（図 37- 2）が出土した。

土師器皿は口径が 12cm 程度で、口縁部が外反する。平安時代後期頃とみられる。

緑釉軒丸瓦は複弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦。中房には 1 + 8 の蓮子がある。外区には珠紋が巡る。瓦当裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合する。瓦当紋様は、『新東宝記』に記載されている緑釉軒丸瓦と同紋とみられる²⁾。

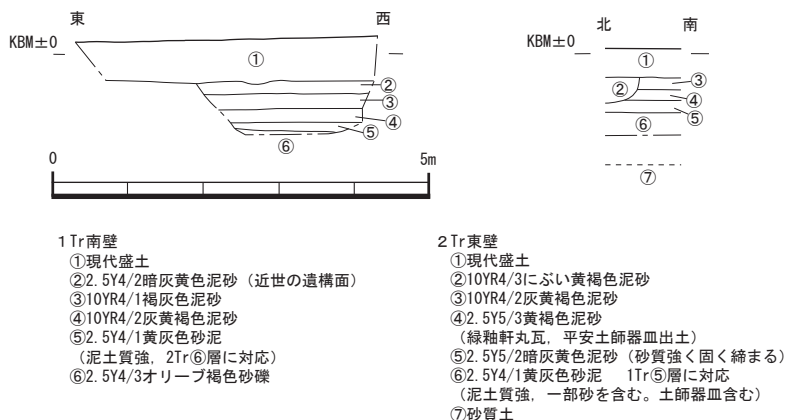


図 36 土層断面図（1：100）

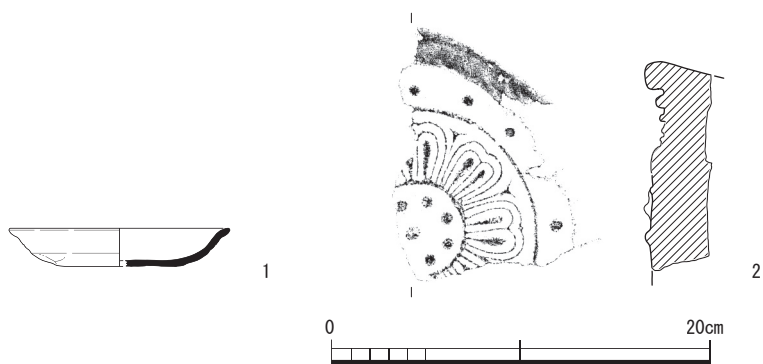


図 37 出土遺物実測図（1：4）

4 まとめ

教王護国寺旧境内では、1977 年度から 1980 年度にかけて行われた防災施設工事に伴う発掘調査で緑釉瓦が講堂周辺で出土している。このため、緑釉瓦は講堂の所用瓦で、製作年代は天長年間(825～832年)頃と考えられている。この調査で見つかった緑釉瓦を含む多量の瓦堆積は、出土状況から金堂と講堂が焼失した文明十八（1486）年に整地されたものと推定されている。

今回の調査地は教王護国寺中心伽藍から北東に離れたところであり、平安時代には賤院があったと想定されている。したがって、この周辺には緑釉瓦を葺くような建物はなかったと思われる。また、緑釉軒丸瓦が出土した層は浅く、下層から平安後期の土師器皿が出土していることから、講堂に葺かれていたものが、文明十八年の講堂焼失に伴い今回の調査地に移動してきたものと考えられる。

（家原 圭太）

註

1) 杉山信三「東寺と西寺」『平安京提要』1994年。

2) 真言宗総本山 東寺『東寺の歴史と美術 新東宝記』1995年記載の瓦資料9軒丸瓦と同紋とみられる。

IV - 1 平安京右京三条三坊十五町跡・ 西ノ京遺跡 No.54

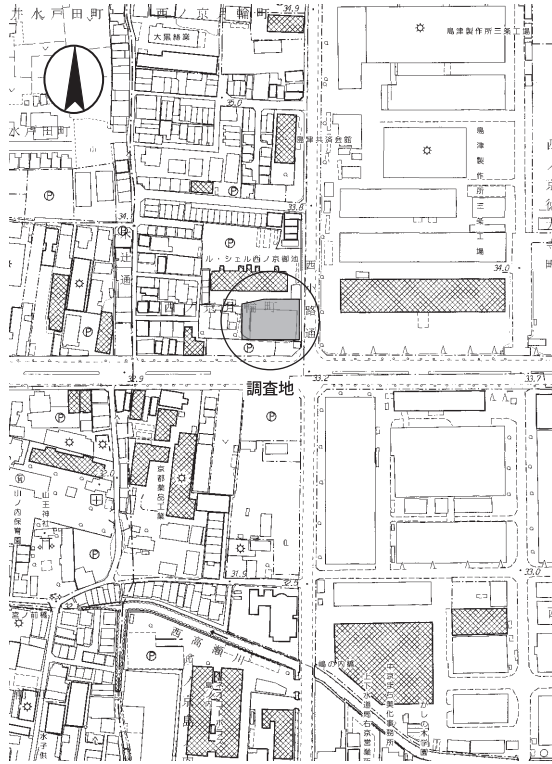


図 38 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は中京区西ノ京月輪町 24-2 で、西小路通と御池通交叉点北西の敷地である。従前自動車販売店があった敷地であるが既に解体されており、今回共同住宅を新築するに当たって試掘調査を実施することになった。

平安京にあつては右京三条三坊十五町の南東部に相当するが、12世紀前半に十四・十六町とともに六条修理大夫藤原顕季(1055～1123)の所領であったことが分かるほかに、占有状況は明らかでない。

十五町内での発掘調査の履歴はないが、試掘では当該地北隣で実施歴があり、中世の土坑・平安時代の包含層・古墳時代の溝などを検出している¹⁾。また、東隣の十町の発掘では9世紀前半の掘立柱建物9棟など多数の遺構を確認し

ており²⁾、西隣の三条四坊二町でも9世紀代の掘立柱建物跡7棟や古墳時代の土坑ほかを検出されている³⁾。このような状況から、今回も同様の遺構検出に期待が持たれた。平成20年4月3日に調査実施の運びとなり、調査面積は合計60㎡であった。

2 層序と遺構

今回計画の建物の大部分は既存建物と重なるため、計画建物の中軸に設けたトレンチ(2・3 Tr.)で既存建物の影響を確認し、既存と被らない場所に設けたトレンチ(1 Tr.)と状況の比較をすることとした。結果、1 Tr.で柱穴を見出したため、4 Tr.を掘削してこれを追及した。

層序 基本的にはGL～-0.50mまでが現代盛土、～-0.62mが現代耕土、～-0.70mが床土、～-0.80mがオリーブ黒色泥砂(旧耕土?)で、以下が地山になる。地山の表層10cmほどはやや脆弱な灰色砂泥層(⑥層)であるが、それより下は、水気は多いものの比較的しっかりした黄橙色砂泥層(⑦層)である。⑥層上面はその土質のために平面検出が難しく、精査は⑦層上面で行った。

既存建物と重なる2・3 Tr.及び1 Tr. 南半は、浅いところでもGL-1.45mまで、全面的に建設

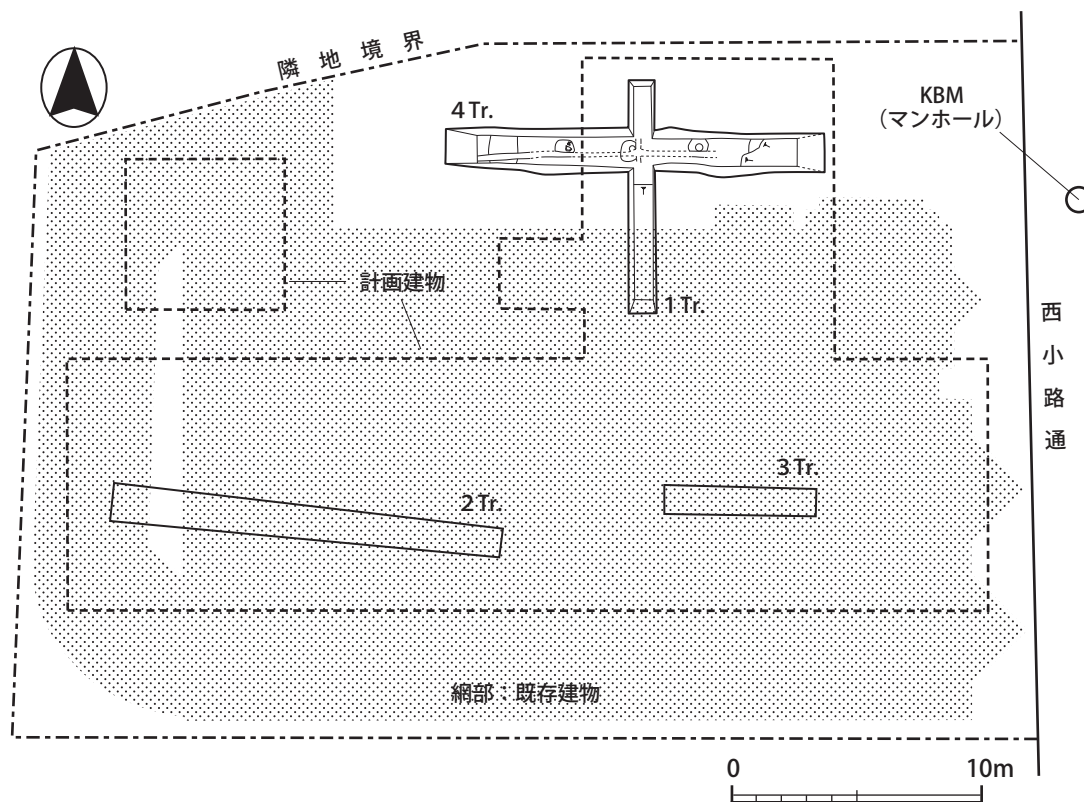


図 39 トレンチ位置図 (1:300)

と解体の攪乱が及んでおり、遺構面は全く残っていなかった。これに対し 1Tr. の北半と 4Tr. は遺構面がよく残っており、ここで柱穴 4 基と溝 1 条を検出した。

溝 1 幅 1.1m, 深さ 0.2m を測る南北溝で、地山ブロックの混じる特徴的な埋土が掘立柱建物 2 の柱穴と共通する。建物の西側を区切る区画排水溝と考えられる。

掘立柱建物 2 東西に並ぶ柱穴 4 基を確認した。柱穴はやや崩れた隅丸方形で、径 0.75 ~ 0.85m を測る。柱当たりを明確に確認できたのは柱穴 3 と 4 のみで、前者は径 0.23m, 後者は 0.29m である。両者の柱間寸法は 2.65 m を測る。また、柱穴 4・5 は検出面からの深さ約 0.3m で、下の砂礫層まで掘り抜いているが、柱穴 2・3 は 0.1m ほどと浅い。上述した溝 1 の存在から柱穴 2 が建物の西辺になると考えられるが、東西棟か南北棟か、また南北いずれに広がるのかは不明である。

3 まとめ

今回の敷地では既存建物による攪乱が著しく、残念ながらその範囲内では遺構面が全く残っていなかったため、本格的な発掘調査は不要と判断した。しかし、それ以外の僅かな面積では平安時代の掘立柱建物を検出し、十五町においても予想どおり宅地利用が行われていたことが確認できた。土師器の細片と瓦以外に遺物が出土しなかったため、具体的な遺構年代は明らかにし得ないが、周辺の事例から見て 10 世紀前葉以前としておいてよいだろう。

(堀 大輔)

IV 平安京右京

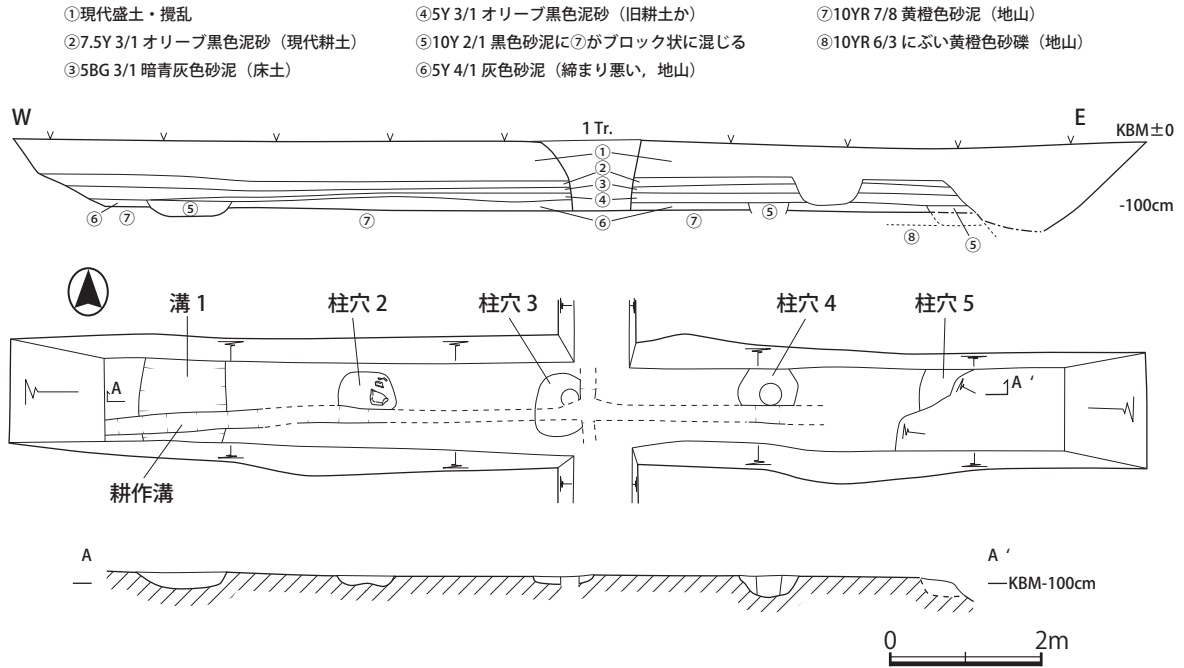


図 40 4トレンチ検出遺構平面図及び断面図 (1:100)



写真 12 4Tr. 全景 (南西から)

註

- 1) 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』調査一覧表 p.61 No.3-151, または註2) 文献表1 参照。
- 2) 平尾政幸ほか『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10集, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 1990年
- 3) 平尾政幸「平安京右京三条四坊」『平安京跡発掘調査概報 平成元年度』京都市文化観光局, 1990年

IV - 2 平安京右京六条二坊六町跡 No. 14・58

1 はじめに

この報告は、下京区西七条東御前田町 22 の一部、23-1 (No.14), および同町 15-1 (No.58) で実施した試掘調査のものである。当該地は平安京右京六条二坊六町に位置し、平安時代の後半には橘則光の山城国乙訓郡山方荘の一部であった可能性がある「号山荘」が所在していたと考えられている¹⁾。

周辺での調査は、調査地の北側で五条通拡幅工事に伴う発掘調査を継続的に行っており、平安時代の条坊道路や宅地内の建物跡、苑池遺構などが検出されている。No.14 調査地の北隣接地でも 2007 年に発掘調査を行っており²⁾、平安時代の掘立柱建物や道路遺構を検出している。

今回の調査地は、六町の中央東寄りに位置し、条坊道路にはかからない(図 45)。

No.14 地点では、事務所の新築が計画されたため試掘調査を平成 20 年 2 月 14 日に実施した。調査区は東西に長い敷地に合わせ、北寄り東西方向に 1 Tr を、南寄り東西方向に 2 Tr を設定した(図 42)。調査面積は 36 m²である。試掘調査の結果、平安時代の掘立柱建物や中世以前に遡る遺構を検出したため、基礎掘削深度の変更を行った上で、この遺構を地中に保存することとなった。

No.58 地点では、倉庫の新築が計画されたため試掘調査を平成 20 年 6 月 9 日に実施した。調査区は南北に長い敷地に合わせ、中央部南北方向に 1 Tr、西寄り南北方向に 2 Tr を設定した(図 42)。調査面積は 46 m²である。

2 層序と検出遺構

層序 No.14 地点の基本層序は、現代盛土、旧耕土、床土、暗灰黄色泥砂(中近世の整地層)、灰黄褐色泥砂、黄褐色泥砂(地山)である。1 Tr では KBM-0.6m で地山を検出しており、遺構検出は地山上面で行った。検出した遺構は近世土坑 1 基、中世耕作溝数条、平安時代の掘立柱建物、時期不明の柱穴、溝である。

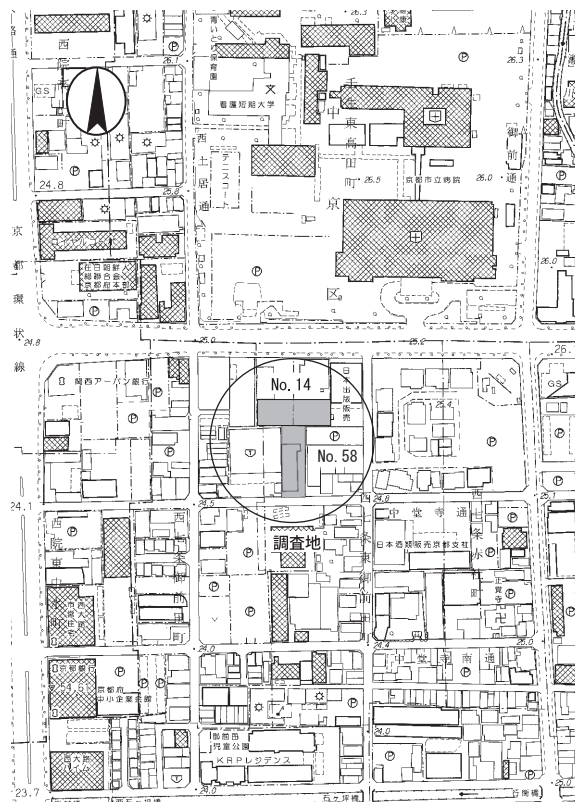


図 41 調査位置図 (1:5,000)

No.58 地点の基本層序は、現代盛土、旧耕土、床土、中近世の包含層、黄灰色砂礫(地山)である。地山は KBM-1.5m で検出した。No.14 地点と比べると GL が約 1 m 低くなっている。遺構検出は地山上面で行った。

掘立柱建物 1 No.14 地点の 1Tr で東西方向に柱穴を 3 基検出した。調査区北壁に沿うように検出したため、柱痕跡は検出できなかった。柱掘方は一辺 0.75m の隅丸方形で、柱間寸法は西から 3 m (10 尺), 2.7m (9 尺) である。西延長部分では柱穴を検出していないが、東延長部分は調査区外のため建物の規模は不明である。また、東西方向に 2 間分を検出したのみで

あるため、この建物が南北棟建物なのか、東西棟建物なのかについても明らかにできない。ただし、西側の柱間が広いことから西廂付の建物の可能性がある。柱掘方から遺物は出土しなかったが、周辺の調査データや、柱穴の規模などから、平安時代前期の建物である可能性が高い。

柱穴 2 No.14 地点の 1 Tr 西半で検出した柱穴である。一辺 0.45m の隅丸方形を呈する。柱痕跡は検出されなかったが、その形状から柱穴と見られる。中世耕作溝との切り合い関係がなく、また、遺物が出土しなかったため時期は不明である。

ピット 3 No.14 地点の 1 Tr 西半で検出したピットである。径 0.3m の円形とみられるが、西は柱穴 2 に切られており全形は不明である。柱穴 2 より古いことは明らかであるが、遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

南北溝 4 No.14 地点の 1 Tr 西端で検出した幅 0.3m の南北溝である。斜行する耕作溝と重複しており、それより古いことは明らかであるが、詳細な時期は不明である。斜行する耕作溝

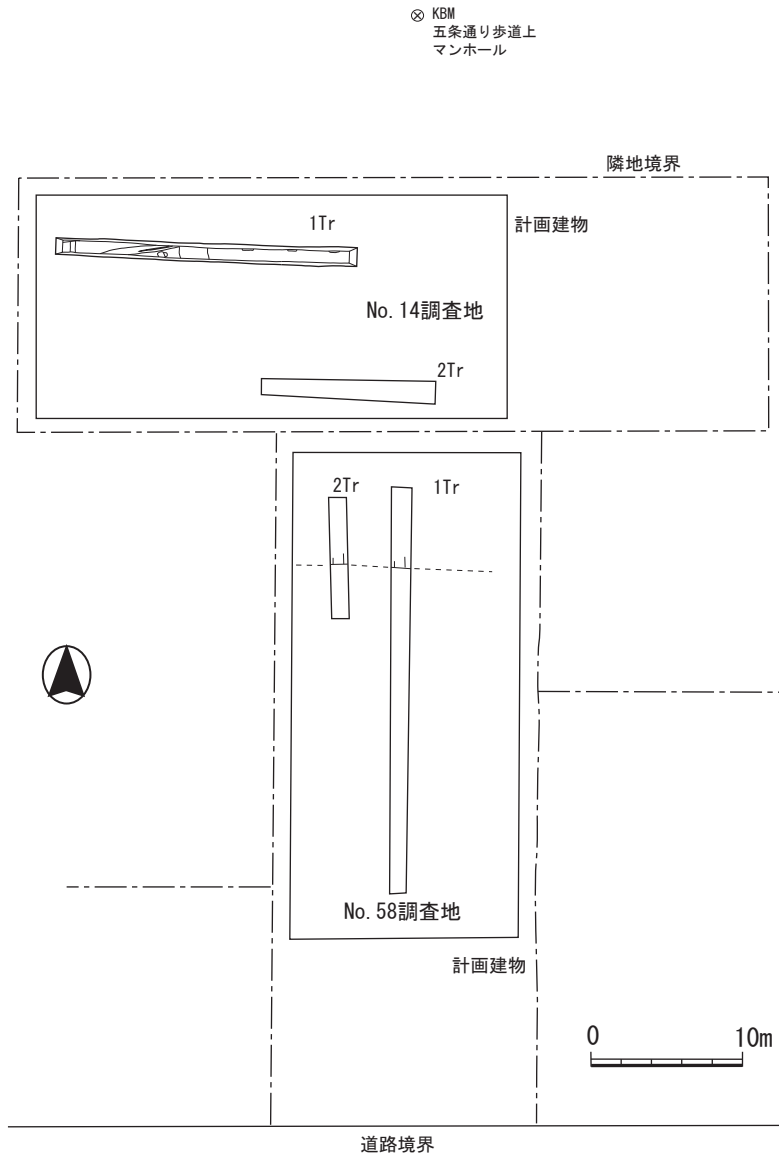


図 42 試掘調査区位置図 (1 : 500)

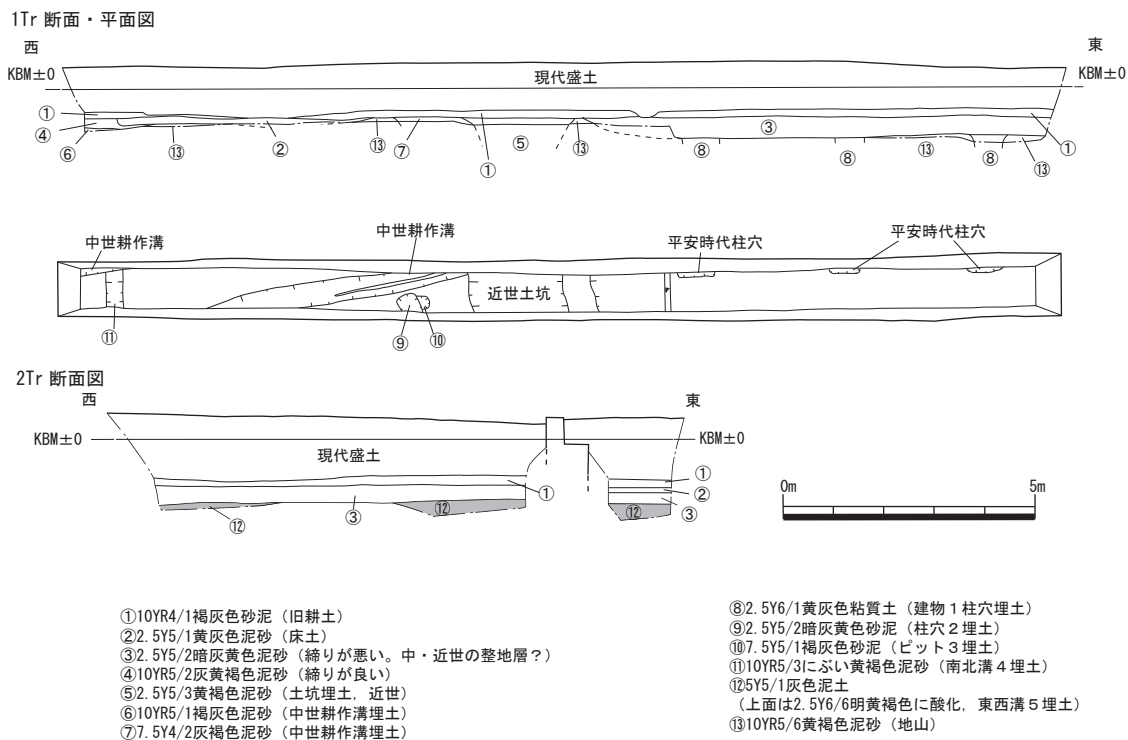


図 43 No.14 地点 1 Tr 断面・平面図, 2 Tr 断面図 (1:150)



写真 13 No.14 1 Tr 建物1 検出状況（西から）

は平安京右京六条二坊三町の発掘調査でも見つかっており、室町時代頃と見られている³⁾。今回検出した斜行する耕作溝が、これらの遺構と同時期のものとする、南北溝4は中世以前のものと考えられる。ただし、斜行する耕作溝は北隣接地の発掘調査では検出していない。

東西溝5 No.58 地点で検出した東西溝である。1 Tr 北端から南5mで溝の南肩を検出した。北肩は調査区外にのびる。埋土は暗青灰色泥土であり、No.14の2 Trで検出した灰色泥土と類似する。絶対高も近いことから、同じ遺構であると考えられる。No.14の2 Trで北肩は検出しておらず、1 Trでは埋土が見られないことから北肩は1 Trと2 Trの間であると思われる。その場合、幅は15m以上となる。深さは0.4～0.5mである。遺物の出土は僅かであるが、平安時代とみられる土師器小片が出土した。

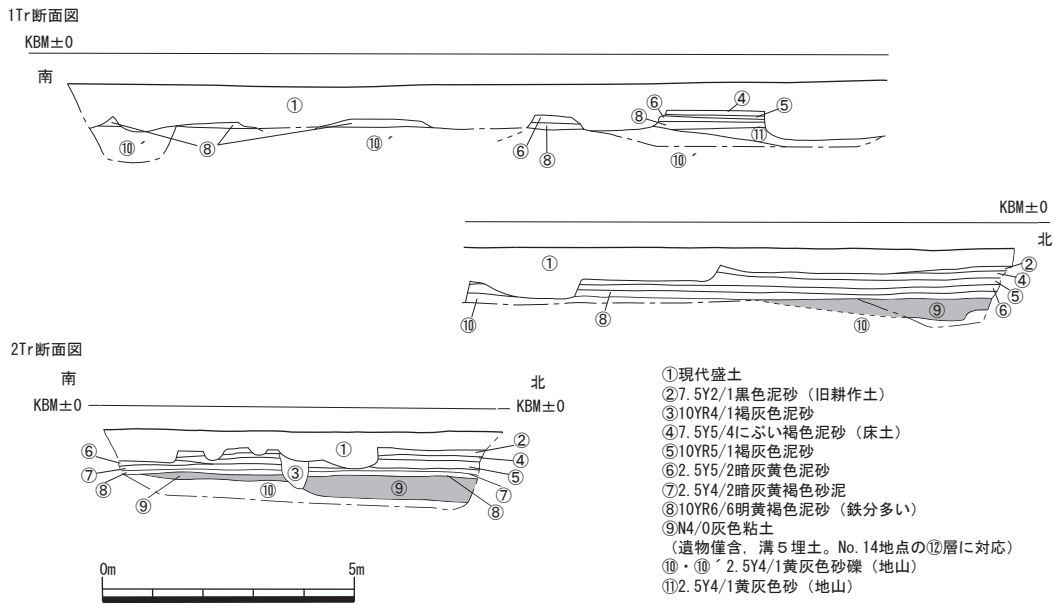


図44 No.58 地点1 Tr・2 Tr 断面図 (1:150)

3 まとめ

No.14 地点の調査では、周辺の調査成果から平安時代の遺構が良好に残存していると予想された。調査の結果、平安時代と思われる掘立柱建物跡などを検出した。特に建物1の柱掘方は一辺0.75mと規模が大きく、六町内で検出されている建物の中でも中心的な建物であった可能性がある。

南北溝4は六町の東西中軸に近い位置で検出した。北側で行った発掘調査では小径が検出されており、その延長の可能性も想定したが、南北溝4は若干東に寄るため、小径の東側溝であるという確証は得られなかった。

一方、No.58 地点の調査では、北端で平安時代の東西溝の南肩を検出したが、それより南では顕著な遺構は見られない。この東西溝は六町の南北中軸付近にあたるため、宅地として利用されたのは六町の北半であり、南半は宅地として利用されなかった可能性がある。

(家原 圭太)



写真14 No.58 地点2 Tr 全景 (南東から)

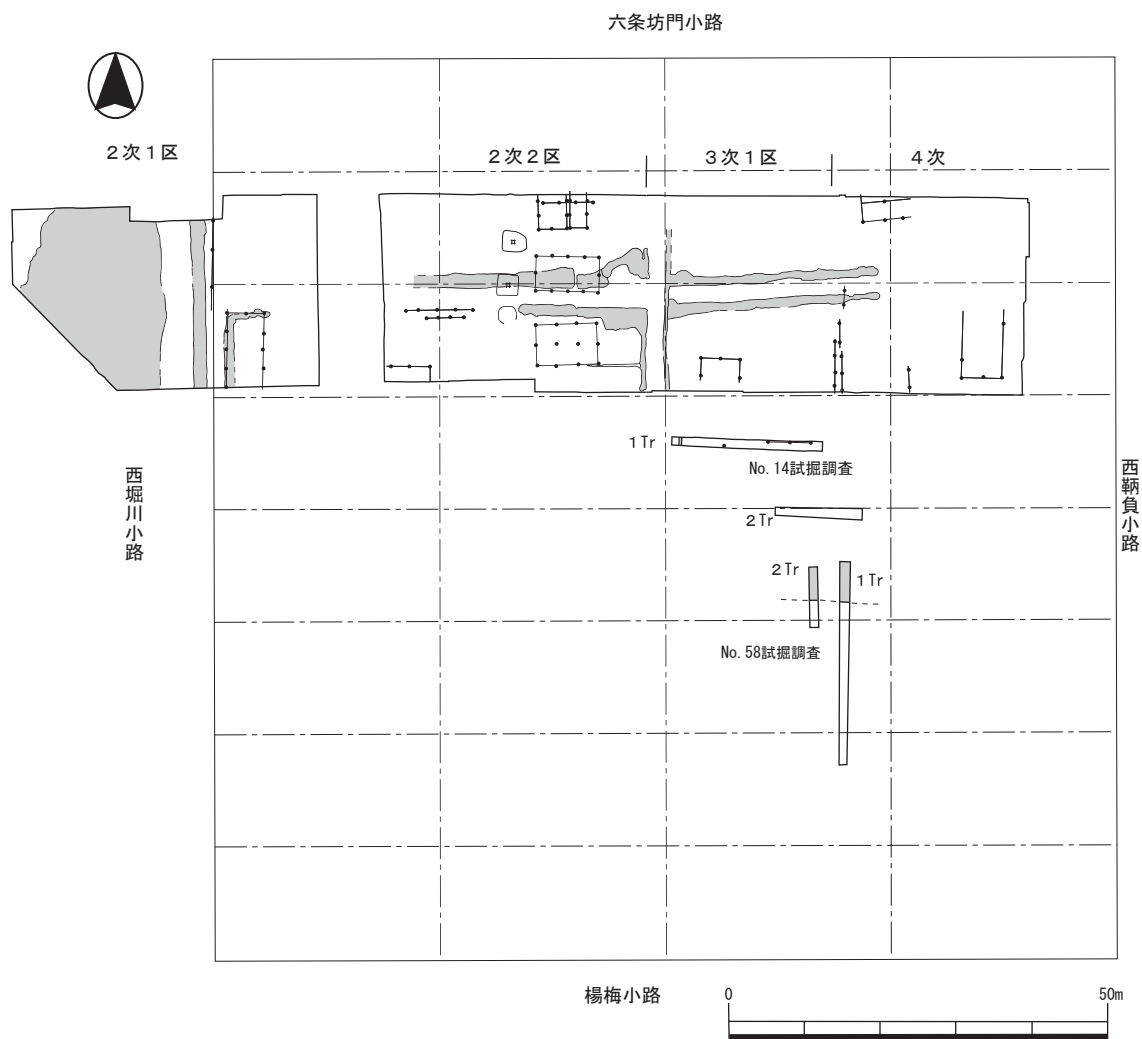


図 45 平安京右京六条二坊六町平安時代遺構配置図 (1/1,000)

註

- 1) 山田邦和「左京と右京」『平安京提要』1994年。
- 2) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-14 平安京右京六条二坊三・六町跡』2008年。
- 3) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-25 平安京右京六条二坊三町跡』2007年。

IV - 3 史跡 西寺跡・唐橋遺跡 No. 18

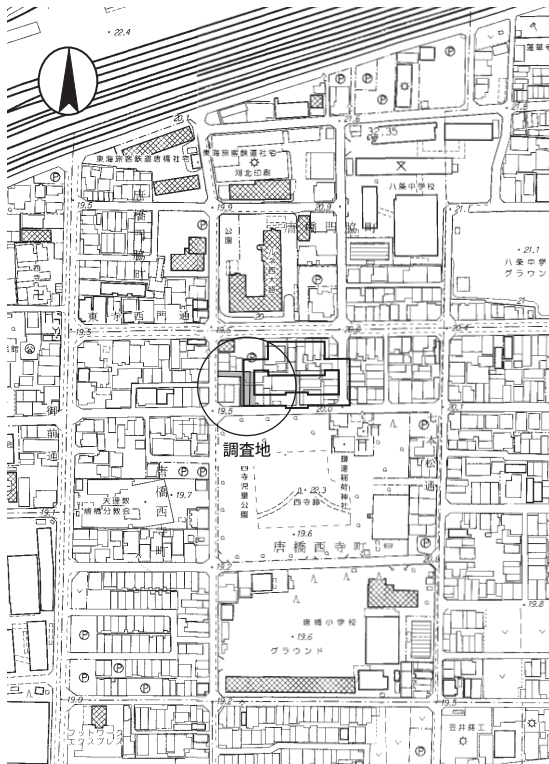


図 46 調査位置図 (1:5,000)

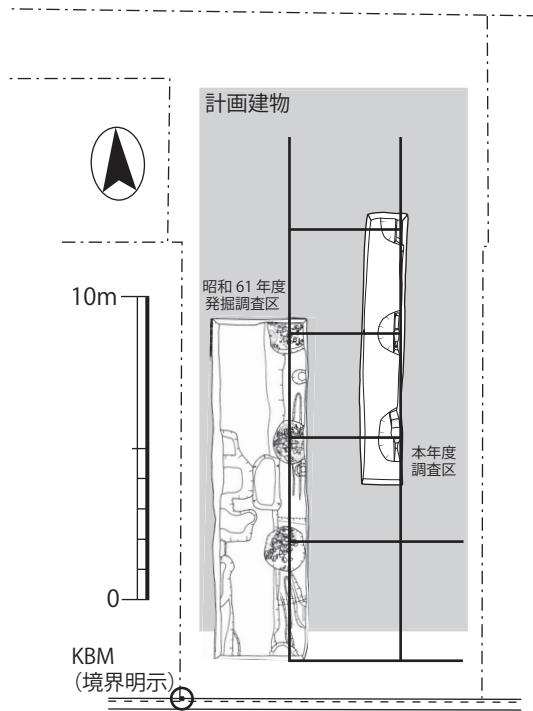


図 47 調査区位置図 (1:250)

1 はじめに

史跡西寺跡では昭和 34 年度に本格的な発掘調査が実施されて以降、これまでに 20 数次に及ぶ発掘調査がおこなわれ、伽藍配置の詳細な状況などが明らかにされてきた。今回の調査地は南区唐橋西寺町 35-6 で、食堂院西回廊跡にあたる。

食堂院跡については、昭和 36 年度の調査¹⁾以降もその位置や構造について成果が蓄積され、特に昭和 61 年度には今回の調査地と同じ敷地内の南西部分で発掘調査が行われており²⁾、食堂院西回廊部の礎石据え付け穴に相当する礎石抜き取り穴が南北方向に 4 基確認され、食堂院回廊の単廊西側柱列の正確な位置が判明している。

今回、木造 2 階建ての個人住宅建設が計画されたため、平成 20 年 3 月 26 日に試掘調査を実施し、食堂院西回廊の残存状況を確認することになった。調査区は昭和 61 年度の調査成果をもとに南北方向に 1 箇所設定した (1T)。調査面積は 13 m²である。

2 層序と遺構

基本層序は、現代盛土 (①層)、旧耕作土 (②層)、旧床土 (③層)、整地層 (⑨・⑩層) であり、遺構面となる整地層は GL- 約 0.3m で検出した。整地層には土師器や瓦の小片、炭片などが比較的多く含まれ、固く締まっており、回廊基壇の築成土に相当すると考えられる。

遺構としては、床土直下の整地層上面で礎石抜き取り穴を 3 基検出した (北から土坑 1 ~ 3 とする)。これらは径約 1.5 ~ 1.8m の平面円形を呈し、深さは検出面から約 0.4m 程度と推定さ

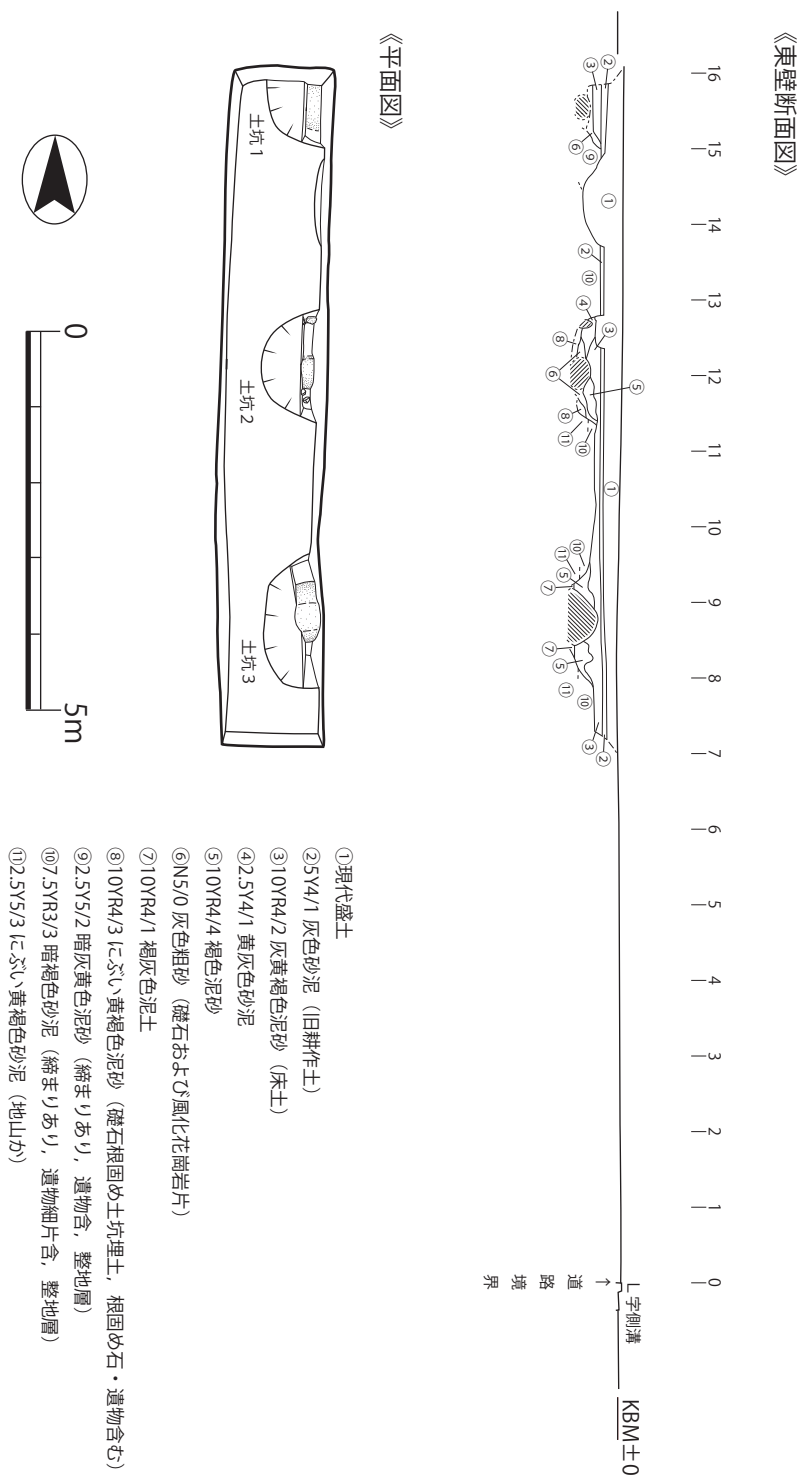


図 48 調査区平面・断面図 (1:100)

れる。調査地南の道路境界から 15.4m, 12.1m, 8.8m と南北方向に約 3.3m 間隔で並び、昭和 61 年度に検出された回廊西柱列に相当する礎石抜き取り穴に対応するもので、回廊東柱列に復元される。各土坑には人頭大ほどの花崗岩礎石の残欠がみられ、土坑の外縁部には花崗岩の破砕片や風化砂 (⑥層) の貼り付いた状況が確認された。各土坑の埋土上層には旧床土や整地層の一部と思われる遺物細片を含んだ土がブロック状に入り込んでおり、耕作を含む西寺荒廃以後の造作等で礎石や整地土の一部が削られたと考えられる。ただ、土坑 2 の埋土下層では礎石の下で拳



写真 15 礎石据え付け穴検出状況（南から）

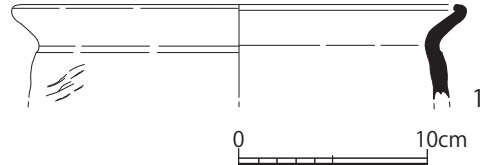


図 49 遺物実測図（1：4）

大ほどの根固め石も確認されており（⑧層）、土坑の位置および下層埋土の堆積状況については回廊造営時に設けられた礎石据え付け穴の旧状をとどめていることも判明した。

土坑 1～3 とそれらに対応する昭和 61 年度調査で確認した礎石抜き取り穴との位置関係から、食堂院西回廊の柱間寸法として桁行 11 尺、梁間 12 尺が復元される。なお、今回の調査は保存を前提にしているため、下層遺構を確認するための整地層の掘り下げはおこなっていない。

3 遺物

遺物は土師器や瓦の小片が出土し、一部を回収した。いずれも小片資料であり、図化できたのは土師器甕の口縁部から体部にかけての破片 1 点のみである。口縁端部は内側に屈曲し、口径は 23.2 cm に復元される。体部外面には煤が付着し、タタキの調整痕がわずかに観察される。土坑 3 埋土の⑤層より出土した。

4 まとめ

調査の結果、調査地東半において西寺食堂院西回廊東側柱列に伴う礎石据え付け穴（抜き取り穴）が 3 基確認された。調査区内では既存建物の影響がほとんどなく、遺構面が良好な状態で遺存しており、昭和 61 年度の調査成果と合わせて回廊の規模復元に関する貴重なデータが得ることができた。

計画建物建設にあたっては当初から遺構保存を前提とした設計が実施されており、検出した遺構は地中に保存されている。（宇野 隆志）

註

1) 杉山信三 1964 「西寺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会

鳥羽離宮跡調査研究所 1979 『史跡西寺跡』

2) 堀内明博 1987 「西寺跡第 13 次調査」『平安京跡発掘調査概報 昭和 61 年度』京都市文化観光局

V - 1 御土居跡・寺町旧域 No. 21

1 はじめに

御土居は、聚楽第の築城に始まる豊臣秀吉の京都改造の一環であり、洛中を囲む総構えである。ただし、御土居は全長が22.5kmと長大であり、当時の洛中の範囲を大きく越えた長坂口まで北端部が伸びることから、単純な防御施設ではないとの議論がなされている¹⁾。御土居の築造が始まったのは天正19年(1591)の1月から閏1月(太陰暦)頃であり、2箇月後には大略完成していたとの記録もある。洛中・洛外を視覚的に遮断したこの総構えも江戸時代以降、市街地や耕作地の拡大に伴い多くが失われ、現在では9箇所の国指定史跡を除くと、地割や町名等にその名を残すのみとなっている。

今回試掘調査を実施することになった土地は、御車道(今出川通の一本南側)と河原町通

との交差点から南へ約50mのところにある東西に長い敷地である。敷地の約4分の1は寺町旧域(推定正定院跡地)、残りの約4分の3は御土居跡として周知されている。また、当該地の約300m南にある廬山寺には河原町通に面した御土居が唯一現存している。

試掘調査は、建築面積552.28㎡の集合住宅が当該地で計画されたことから、御土居跡と寺町旧域の残存状況を確認する目的で平成20年2月25日に実施した。調査面積は27㎡であった。

試掘調査の結果、御土居跡の西を限る溝状遺構を検出することができた。

2 層序と遺構

層序 1986年から1987年頃に行われたとみられる大規模な削平により、中央部分の遺構面が完全に消失していた。層序は、この中央の攪乱範囲の東西両側で大きく異なっていた。調査区西端は、現代盛土(KBM+115cm~-5cm)、褐灰色泥砂(~-15cm)、暗褐色泥砂(~-55cm)と続き、地山の黄灰色砂礫に達する。一方、調査区東端は、現代盛土(KBM+70cm~±0cm)、灰色泥砂(~-15cm)、黒褐色泥砂(~-70cm)と続き、地山の黄灰色砂礫に達する。

溝1 調査区西端から3.1mの地点で、西に向かって落ち込む南北方向の溝状遺構を検出した。幅1.6m以上、深さ0.6mの断面逆台形を呈していると考えられる。上下2層の埋土をもち、上

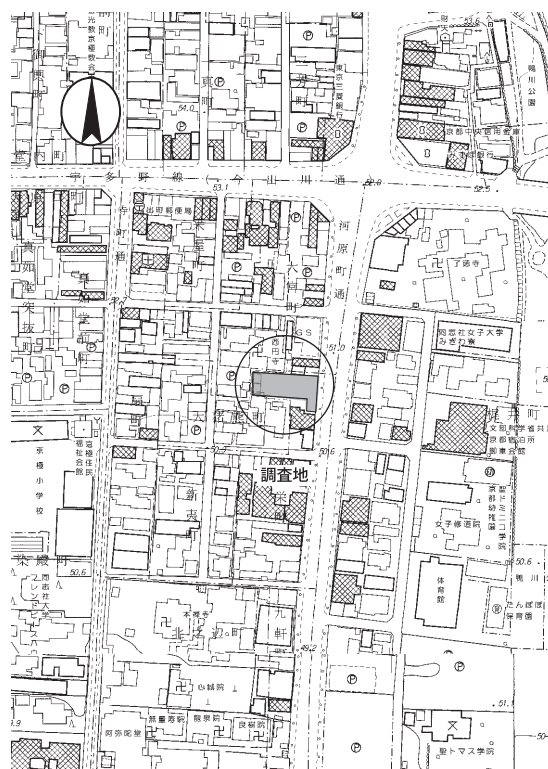


図50 調査位置図(1:5,000)

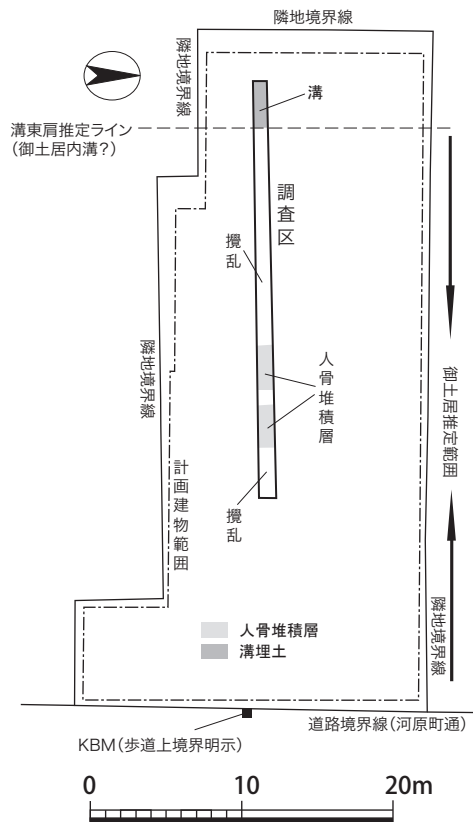


図 51 試掘調査区位置図 (1:500)

層は黒褐色泥砂層，下層は黒褐色泥砂（砂まじり）であった。埋土中の遺物はごく少量で，図化可能なものは出土していない。

人骨集中地点 調査区西端から約 17.5 m の地点以東で，江戸時代の土師器小片と人骨小片を大量に含む厚さ約 60 cm の黒褐色泥砂層を検出した。この埋土の底面を観察すると，複雑な凹凸を確認することができる。何度も埋葬を繰り返した結果，個々の土坑形状は不分明になり，一つの層になったと考えられる。

3 出土遺物

4層出土遺物 人骨小片を多量に含む黒褐色泥砂層である。土師器皿（1）は，口径 9.8 cm で底面に明瞭な圏線をもつ。18 世紀代後半であろうか。2 は陶器茶碗の口縁部で，3 は志野茶碗の底部片と考えられる。

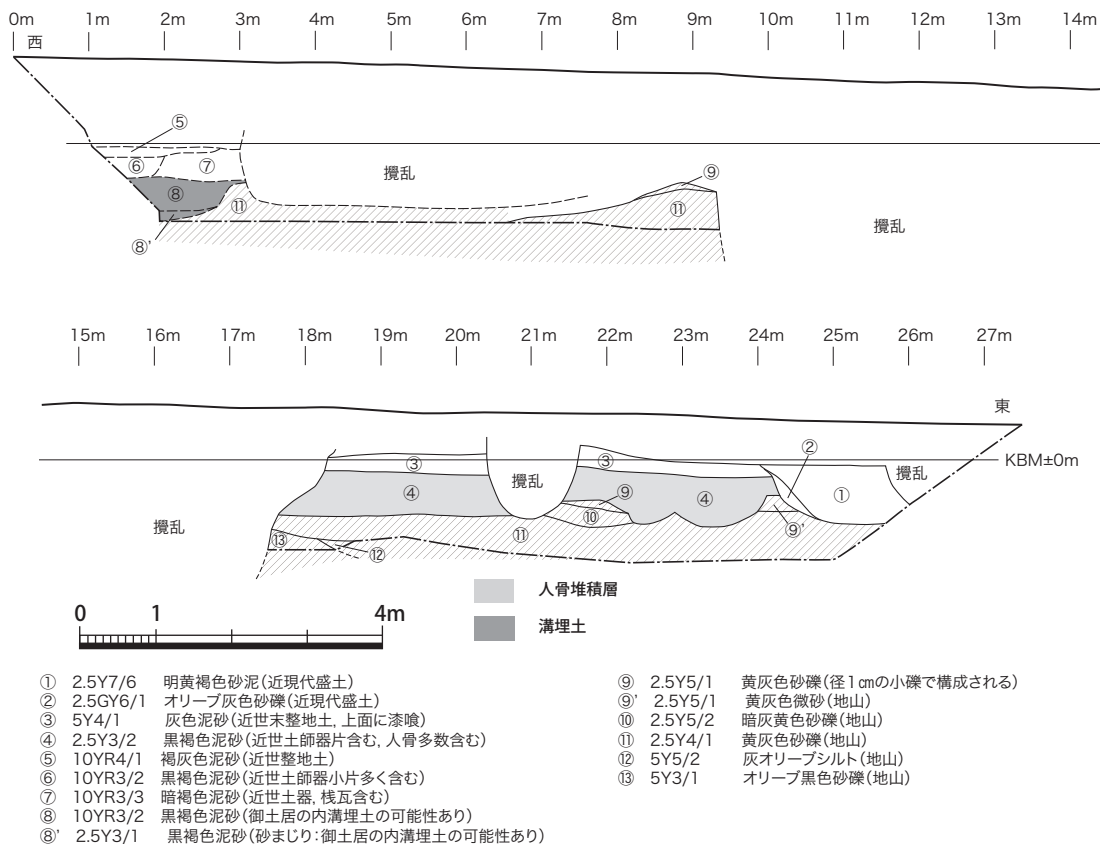


図 52 調査区北壁土層断面図 (1:100) (ただし，破線表示部分は南壁土層断面図を反転)

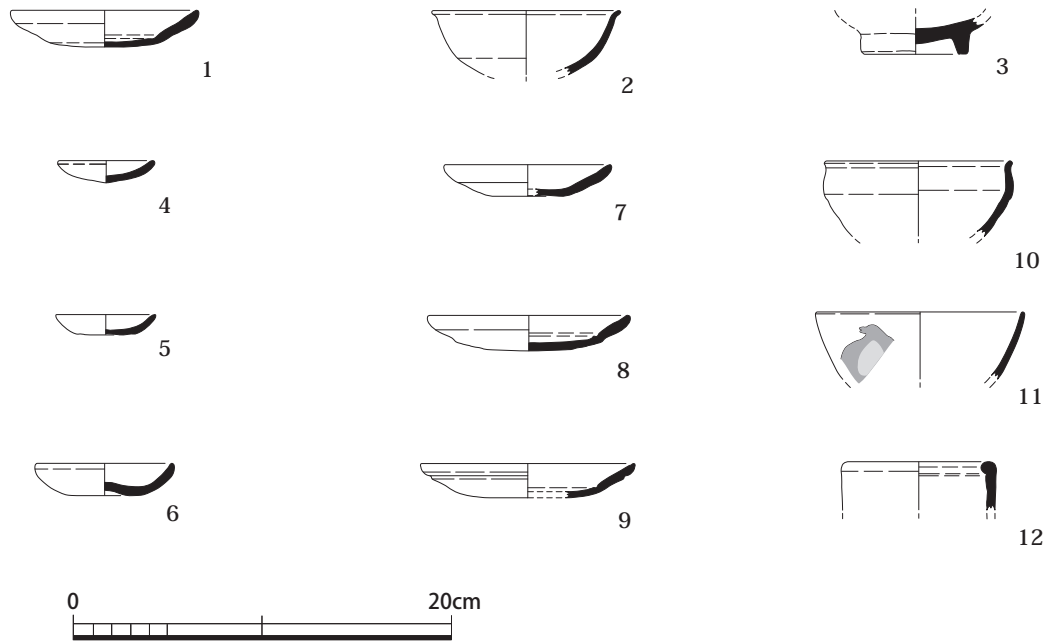


図 53 出土遺物実測図（1：4）
1～3：4層出土，4～12：7層出土

7層出土遺物 御土居内溝埋没後の上層遺物で，土師器小皿（4，5）は口径5cm，土師器小皿（6）は口径7cm，土師器皿（7）は口径8.8cm，土師器皿（8，9）は口径11cm前後で底部に圈線をもつ。京都XII期新段階（18世紀代前半）²⁾と思われる。10は天目茶碗，11は染付碗，12は磁器の壺の口縁部と考えられる。

4 まとめ

平成14年の遺跡地図への登載後，寺町旧域に接する御土居跡としては4回目となる今回の試掘調査で，初めて御土居に関連する遺構を検出できた意味は大きい。また，御土居本体が近世の早い段階で削平された後，寺域に取り込まれ，墓地として利用されたこと，この墓地も江戸時代の後半になると，市街地の拡大に伴い宅地化されたことがわかった。（馬瀬 智光）

註

- 1) 中村武生 「豊臣政権の京都都市改造」『京豊臣秀吉と京都一聚楽第・御土居と伏見城一』（日本史研究会編 文理閣 2001年）
- 2) 小森俊寛・上村憲章 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年）



写真 16 調査区西端 溝1検出状況（南東から）

V - 2 嵯峨遺跡 No. 70



図 54 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は清凉寺境内の西側，右京区嵯峨二尊院門前北中院町 2-7 で，すぐ北には瀬戸川が東ないし南方向に流れている。この地を含む桂川左岸の嵯峨一帯は，臨川寺や天龍寺などの禅宗系寺院の成立に伴って南北朝時代から室町時代にかけて寺院群が発展した地域であり，近年，寺院配置などを中心に明らかにされてきた中世都市史分野における研究動向¹⁾を受けて，平成 19 年度から新たに嵯峨遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に加えられた²⁾。今回の調査地は嵯峨遺跡の北端部に位置する。

こうした経過もあって，周辺における調査歴としては，広域立会調査によって調査地の南を東西に走る道路と重複するように中世以降の路面が確認された以外に目立ったものはない³⁾。

今回，ここに宅地造成が計画されたため，平成 20 年 5 月 27 日および 6 月 12 日に試掘調査を実施した。調査区は計画道路部分に 2 箇所設定した (1・2T)。調査面積は合計で 63 m²である。

2 層序と遺構

調査地は北から南への緩傾斜地であり，比高差は約 0.9m を測る。基本層序は，現地表面から表土および旧耕作土 (①層)，締まりのない遺物包含層 (客土か，②層)，締まりのある遺物包含層 (③～⑤層，部分的)，地山 (⑦層) である。地山は GL-0.8～1.1m で検出され，周辺を含めた現地地形と同様，南に向かって緩やかに傾斜し，2T 南北両端での比高差は約 1.2m である。遺物包含層を含め，各層とも傾斜に沿って堆積し，単純な層序を示しており，すぐ北を流れる瀬戸川からの氾濫の影響などは看取されない。

調査地は最近まで畑地として利用されていたため焼却灰の処理穴が各所で確認されたが，それ以外に大きな攪乱はない。地山上面で遺構検出を試みたところ，遺構密度は全体的にきわめて希薄であり，東西方向に設けた 1T では谷状の落ち込みを確認し，2T では南端から 6～11m の範囲で溝や土坑，ピットなどの複数の遺構が切り合って検出された程度であった。これらの遺構群は，遺物包含層上面で成立するピット 1 基を除けば，地山面で成立するもので，そのうち土坑

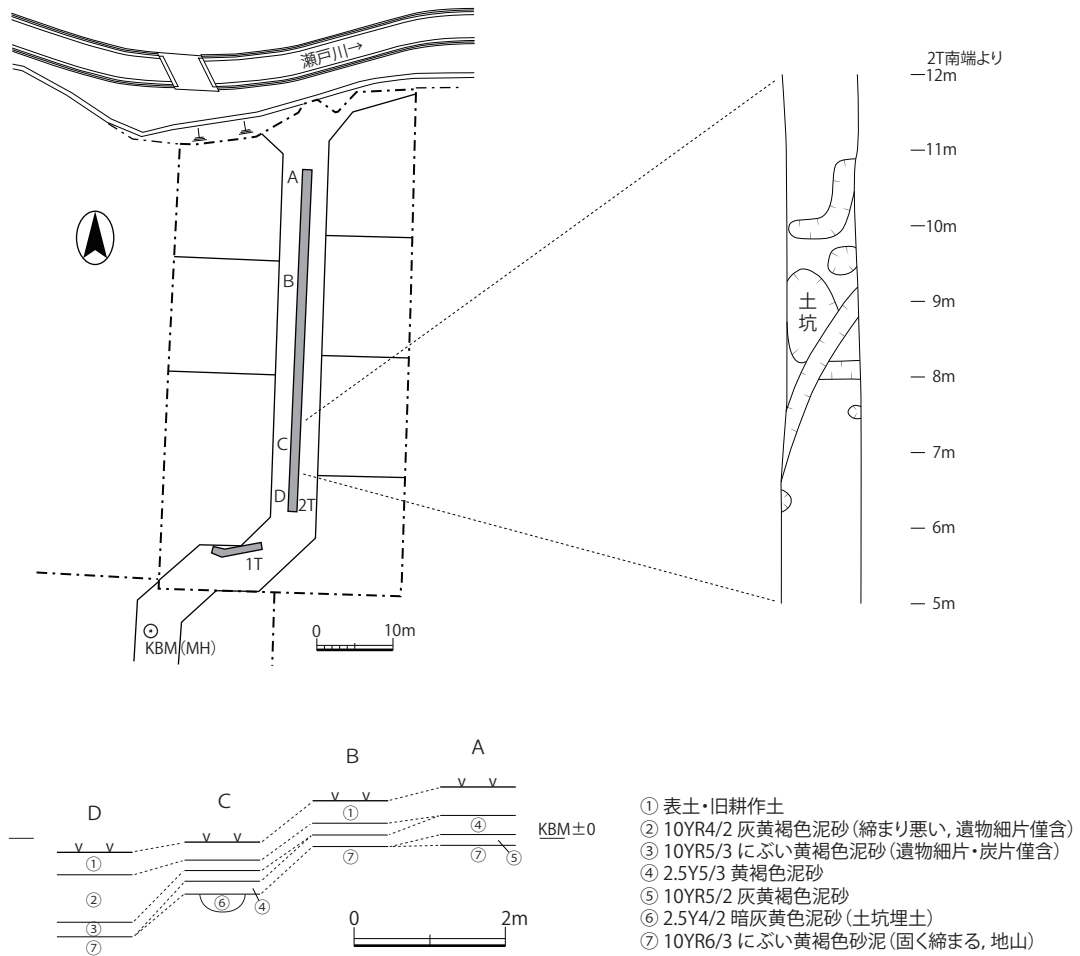


図 55 調査区位置図 (1 : 1,000)・部分平面図 (1 : 100)・2T 西壁断面柱状図 (1 : 100)

からは多量の土師器皿が出土した。

土坑の平面形は東西約 0.7m, 南北約 1.2m の南北に長い楕円形で, 深さは検出面から約 0.3m を測り, 全形は扁平な楕円形を呈す。一部は土圧によって割れていたが多量の完形土師器皿が水平に複数枚重ねられ, また複数枚は垂直に立て掛けられた状態で, 土坑のほぼ中央に局所的にまとまって出土した (写真 16)。出土状況から, 無作為に投棄されたというよりは, 意識的に土坑内に据え置かれたと表現されるべきものである。そのほかの遺構からは土師器の細片が出土したが, まとまった遺物の出土はなかった。



写真 17 土器溜検出状況 (南から)

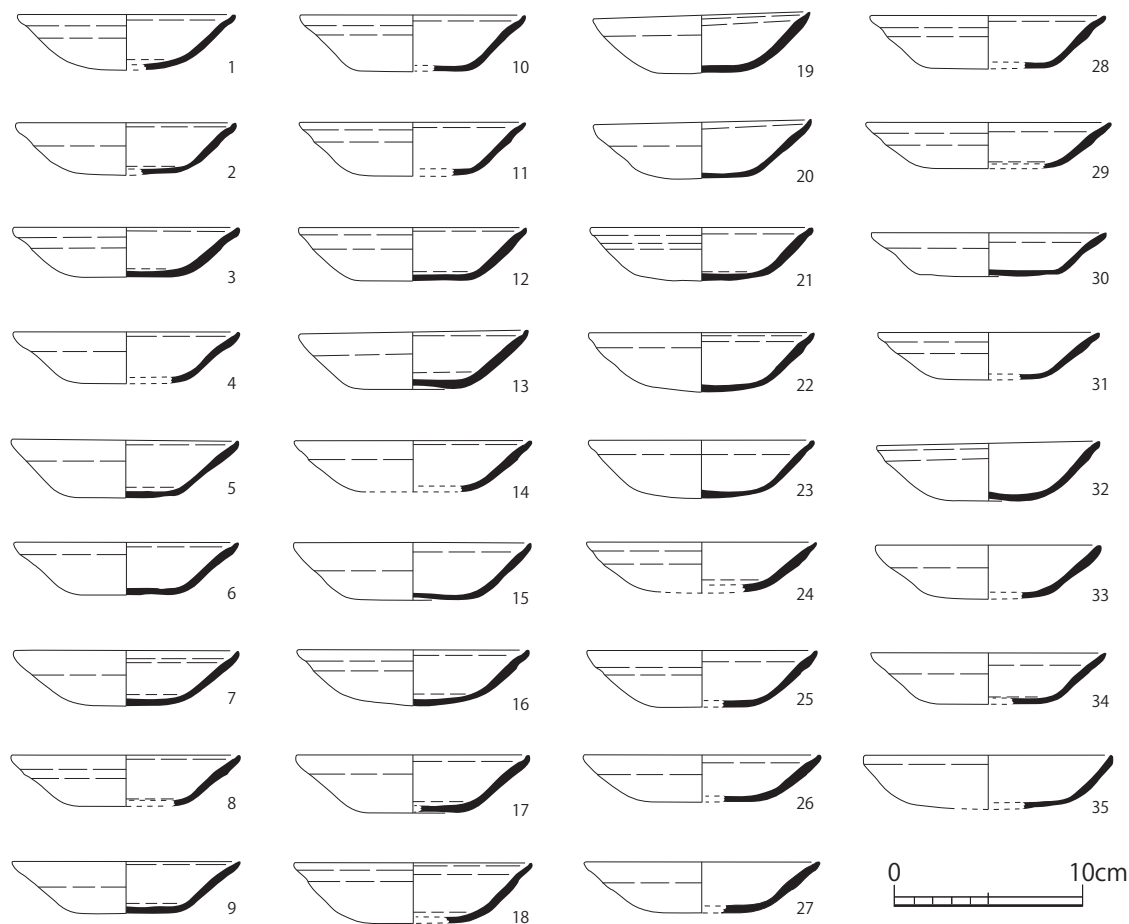


図 56 遺物実測図 (1:4)

3 出土遺物 (図 56)

遺物は土坑から出土した土師器皿にほぼ限られる。土圧によってすでに割れていた個体も多く、総個体数は判然としない。総重量は 3,690g に及び、完形個体の重量 90 g から算出すれば総個体数が 40 個体前後であったことが推定される。

土師器皿は焼成が不良のためにいずれの個体も器面の摩滅が著しいが、形態は平らな底部を持ち、器壁が口縁部に向かってほぼまっすぐに外方に開くという基本的な特徴を有している。口縁部はその端部をわずかにつまみ上げてやや内湾させて仕上げるものが顕著であり、端部のつまみ上げが明瞭なもの (1～18) とややにぶいもの (19～29) の 2 群に大別される。このほか、口縁部に向かってやや外反し、器高がやや低いもの (30) や口縁端部をつまみ上げることなく、丸くおさめるもの (31～34)、立ち上がりから口縁端部までの器壁全体がわずかに内湾するもの (35) なども少数であるが認められる。色調は白色系を呈するものが顕著である。

法量については、完形の個体や復元値を得られる個体から口径 12.0～13.0 cm 前後、器高 2.7～3.2 cm 前後にまとまる。法量の個体差は非常に小さく、全体的に規格性が高い。

これらの一括遺物は、形態や法量から京都IX期古～中型式に相当すると考えられ、15 世紀後半の年代が与えられる⁴⁾。

4 まとめ

調査の結果、遺構密度は希薄であったが、調査区の一部で土坑や溝などの遺構群がまとまって検出された。そのうち、土坑からは多量の土師器皿が出土し、出土した遺物は室町時代中期（15世紀後半）に属するものである。

嵯峨遺跡は、南北朝期以降、禅宗系寺院の成立に伴って急速に寺院群が発展するとともに市街地が形成された地域であり、実際に、室町時代中期に作られた『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』（1426）には、臨川寺や天龍寺、釈迦堂（清涼寺）を中心に100を超える寺院が広範囲に描かれ、嵯峨一帯に門前町が形成されていたことが窺える。絵図にみられる街路や街区の枠組みの多くが現在の町並みにも踏襲されていることを頼りに、絵図と現在の地図を照らし合わせると、釈迦堂の西にあたる調査地付近は東西通に面して南門を備えた「千光寺」という寺名が表現されており、調査地はこの寺域の北半部分に相当するとみられる。寺院に関する主要建物遺構は調査地南の東西通に面して形成されたと予想され、遺構密度からみても調査地は寺域内の耕作地あるいは空閑地であった可能性が高い。

今回の調査で検出した遺構が絵図記載の千光寺に直接関連するか否かは別にしても、絵図の示すとおり、嵯峨遺跡の時期に属す遺構が当該地まで展開していることは注目すべきであり、絵図の記載内容を裏付けるものである。不明な点も多いが、嵯峨遺跡での調査は始まったばかりであり、今後の調査の進展が期待される。

なお、調査地では造成後の住宅建設時においても、今回の調査成果に基づいた上で建築計画に見合った調査を実施する予定である。（宇野 隆志）

註

- 1) 山田邦和 2005 「中世都市嵯峨の変遷」『平安京—京都の都市図・都市構造に関する比較統合研究とデジタルデータベースの構築—』平成14～16年度科学研究費補助金 基礎研究（A）（1）研究成果報告書
- 2) 京都市文化財保護課（編）2007 『京都市遺跡地図台帳 第8版』京都市文化市民局
- 3) 加納敬二他（編）1997 『京都嵯峨野の遺跡—広域立会調査による遺跡調査報告—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 4) 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』京都編集工房

V - 3 山科本願寺跡 No. 85

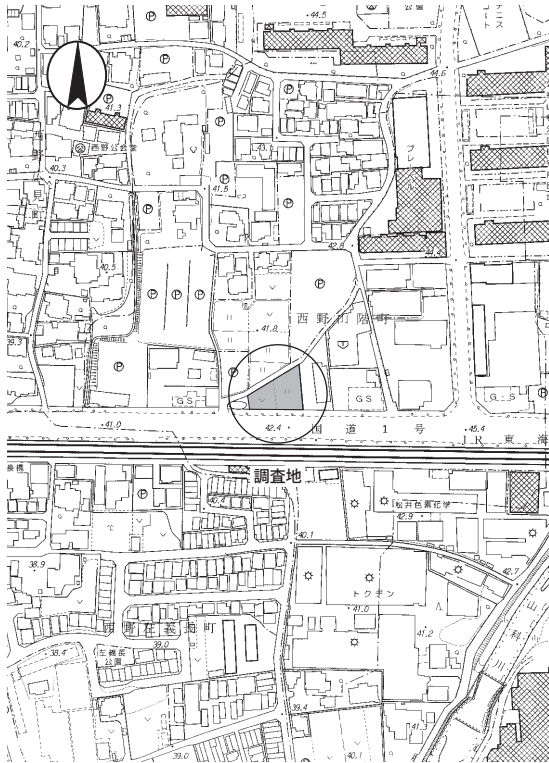


図 57 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は山科区西野山階町 11-5,11-6,29-16 の各一部,85 で、国道 1 号線に面した北側の畑である。一帯は本願寺八世蓮如が文明 10 年 (1478) から 6 年近くをかけて造営し、天文元年 (1532) に法華宗徒と六角氏の連合軍に攻め落とされるまで、半世紀にわたって繁栄した山科本願寺の跡地である。なかでも当該地周辺は、本願寺の中核域である「御本寺」に当たる重要なエリアである。

左図からも分かるように、開発の進む中において調査地を含む一画のみは田畑として残り、発掘調査もその周辺部に限られていたため、御本寺の具体的な様相は未だ明らかになっていない。しかし、北西隣接地で平成 17 年度に実施した第 14 次発掘調査では、庭園遺構や廃絶時の

焼土、大量の輸入陶磁器やガラス玉、漆製品の断片など、従前の調査では見られなかった重要遺構・遺物が確認されており¹⁾、主要堂宇跡が近傍に眠っているものと期待が高まっている。当該地は長らく畑として利用されていたが、今回ここを盛土造成し飲食店を新築する計画が届け出られたため、試掘調査を実施することとなった。

調査は、平成 20 年 9 月 1 日、南北トレンチを 1 本設けて行った。調査面積は 18 m² である。

2 層序と遺構

層序 14 次調査では、遺構面の全面に本願寺廃絶時の焼土が広がり、遺物を含んだ遺構が密に分布していたが、今回の調査地では、焼土はもとより生活面とするに足るような締まりの良い面がなく、遺物も皆無に近かったことから、どこを遺構面と見るかで作業は難渋した。比較的締まりの良い⑧層上面で精査を行ったが何ら遺構を見いだせず、結局、⑥層上面が現況の遺構面であるが本来の遺構面は削平されているのであろう、という結論に至った。⑧層以下が地山、⑥・⑦層は整地層と考えられる。

遺構 このような経緯により、遺構検出は断面観察によることになってしまったが、トレンチ西壁でピット状の遺構 3 基 (③~⑤) を確認した。②層と⑥層は色調がほとんど同一で識別が難

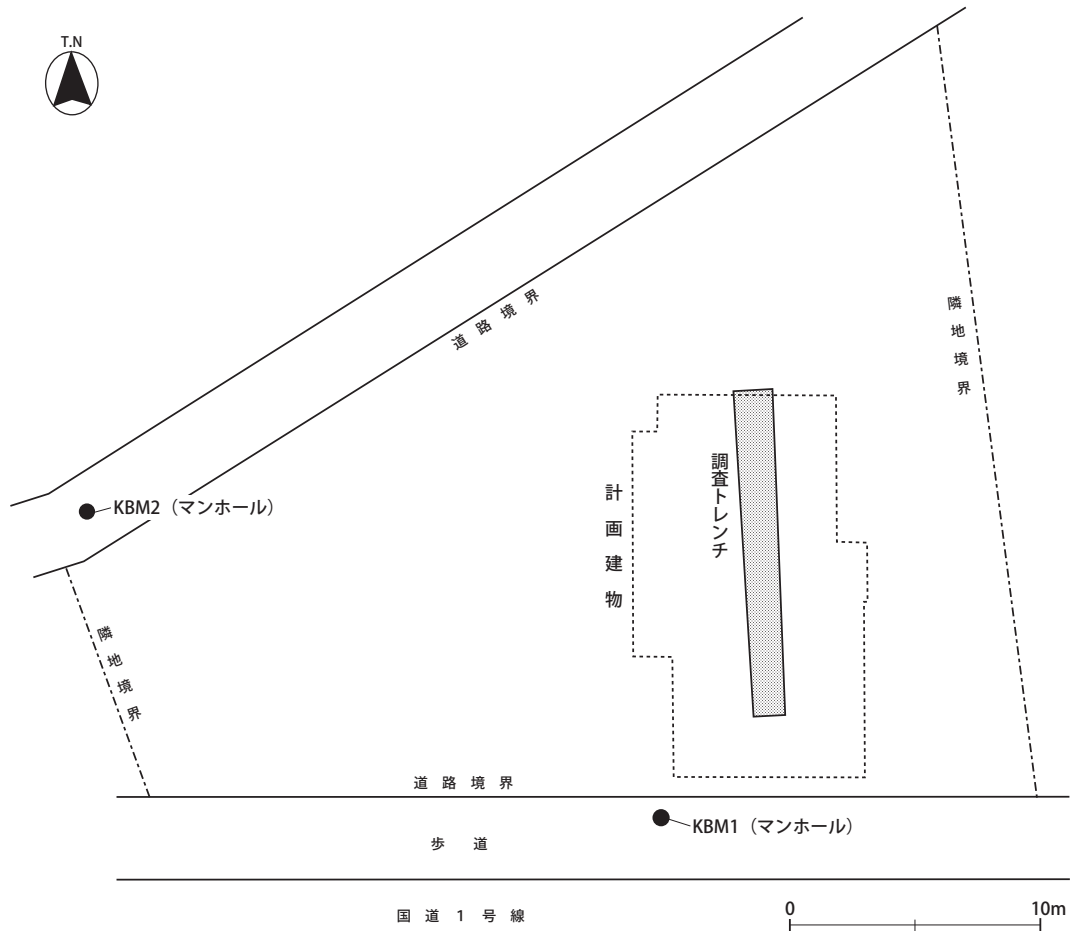


図 58 トレンチ位置図 (1:300)

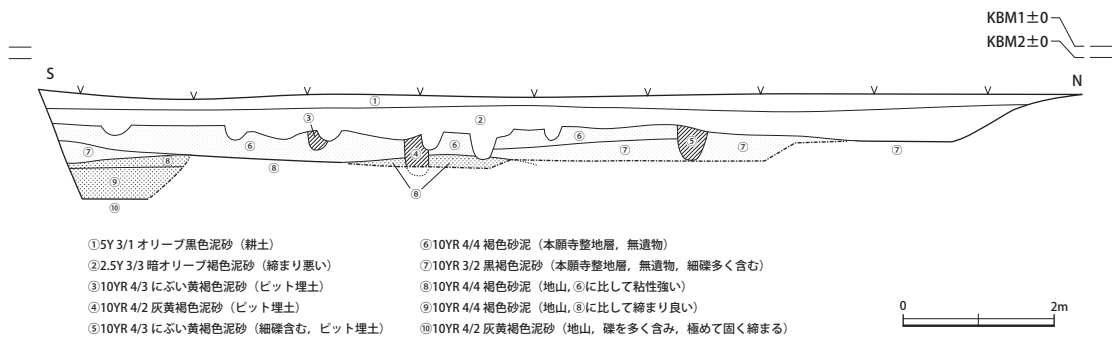


図 59 4 トレンチ検出遺構平面図及び断面図 (1:100)

しいため、断面図で②層に含めているピット状の落ち込みにも、実際には遺構が含まれているかもしれない。

3 まとめ

以上のように本件では、多大な成果を上げた 14 次調査地から 40m ほどの距離にあるにもかかわらず、遺物の散布さえ認められず、遺構面が削平を受けているものと判断された。

試掘調査では海拔高の測量を行っていないので厳密な比較は難しいが、14 次調査の遺構面は



写真 18 調査前風景（南東から）
中央の建物が第 14 次調査地。左奥の白い建物は
第 2 次調査地（昭和 49 年度）。



写真 19 トレンチ全景（北から）

今回の KBM 1 から -0.2m 前後の深さであり、今回のトレンチ⑥層上面よりおよそ 0.85m 高い。とは言え、耕土層上面の比較でも本件調査地より 14 次調査地の方が 0.7m ほど高く、これが本願寺期の地形を反映している可能性もあるため、単純に本調査地の本来の遺構面が 0.85m の削平を受けているということにはならないだろう。

つまり本トレンチでの所見では、遺構面が削平を受けてはいるがそれは数十 cm に満たないものであり、わずかな地点の違いで遺構の残り具合が大きく変わることもなお考えられるということになる。

以上を踏まえた協議の結果、本件の工事計画については事業主が遺跡の重要性に理解を示され、建物の基礎を遺構面より浅くすることでその保存が図られることとなった。

（堀 大輔）

註

1) 柏田有香ほか「山科本願寺跡 (4)」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 17 年度』京都市文化市民局、2006 年。また、既往の調査については、同書所載の小檜山一良「山科本願寺跡 (1)」に詳しい。

V - 4 福西古墳群 No. 96

1 はじめに

調査地は西京区大枝東長町内、福西古墳群の古墳分布域を北群と南群に分けたならば、両群の間からやや北東寄りに位置し、これまで古墳が確認されていないエリアにあたる。東隣地でも平成11年度に老人保健施設建設に伴って試掘調査が実施されているが、古墳に関連する遺構は見つかっていない。

南北に細長い3つの敷地を東西に合筆した調査地は、各境界部分に大きな段差があり、東から西に大きく落ちる雛壇状の地形を呈しており、現地表面からは古墳と思われるような高まりや石室石材は観察されない。今回、ここに宅地造成が計画されたため、8月11日に試掘調査を実施した。西側の1筆は個人住宅と柿畑があるため、実際の調査は中央および東側の旧田畠地の2筆で行った。調査区は計画道路部分に設定した(1～5T)。調査面積は61㎡である。

2 層序と遺構

調査地の東西3筆を東から上段、中段、下段と呼べば、中段に設定した1・2Tでは耕作土直下で非常に固く締まった層が確認され(⑥層)、上段の3～5Tでは耕作土下で複数の薄い水平堆積層があり、その下層で固く締まった地山と考えられる層(⑦層)が確認できた。福西古墳群分布域は小畑川左岸の河岸段丘上に位置し、東から西へ大きく傾斜している。調査地も、耕地化に伴って雛壇状に切土造成された可能性が考えられる。

各層ともほぼ水平に堆積しており、遺構は一切確認されなかった。

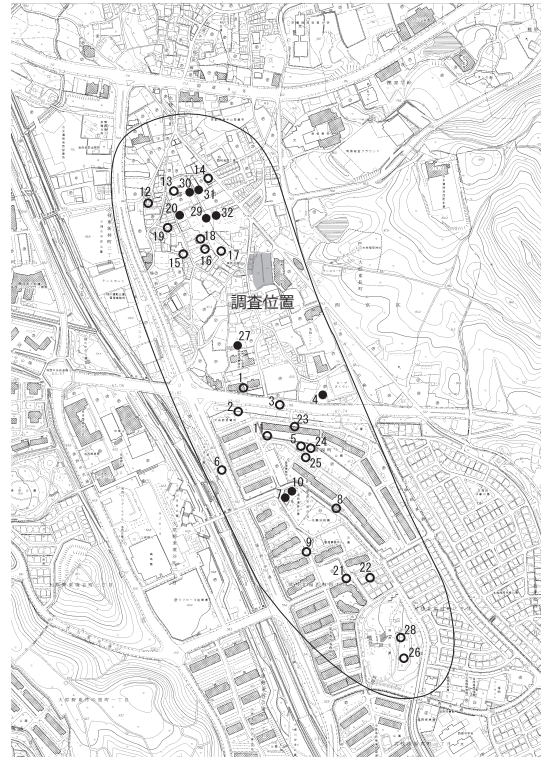


図60 調査位置図 (1:15,000)

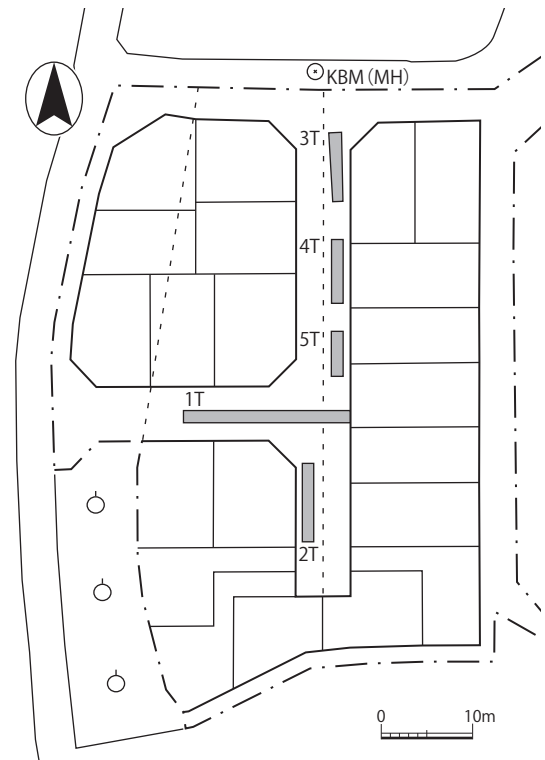


図61 調査区位置図 (1:800)

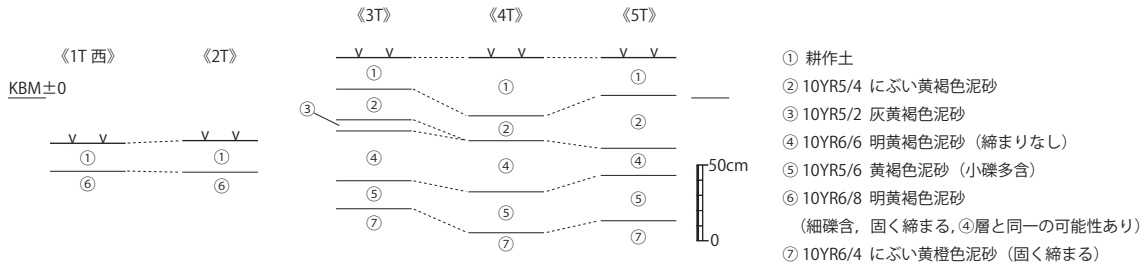


図 62 各調査区断面柱状図 (1:50)

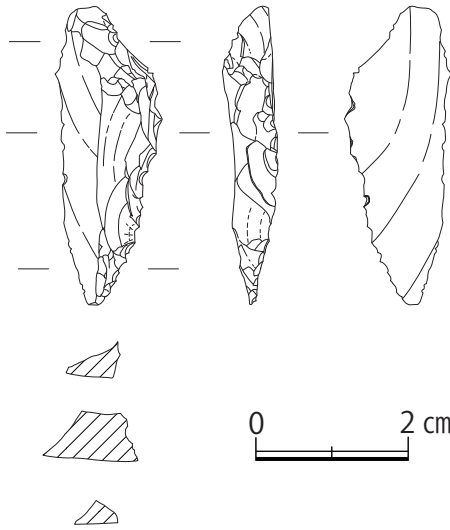


図 63 石器実測図 (1:1)

3 出土遺物

古墳に関連する遺物は出土しなかったが、5T ⑤層からナイフ形石器が 1 点出土した。⑤層は小礫を非常に多く含む厚さ 30 cm ほどの黄褐色泥砂層で、上段に設定した 3～5T の GL-0.78～1.16m の範囲にほぼ水平に堆積し、比較的広範囲に及ぶと予想される。石器はその層に多く含まれる小礫と混じり合った状態で出土した。石器出土層は遺構埋土層ではなく遺物包含層と理解される。

出土した石器はいわゆる国府型ナイフ形石器で、全長 4.0 cm、最大幅 1.35 cm、最大厚 0.72 cm を測る。素材から得られた剥片の片縁のみを裏面から二次加工を施して背部を作り出し、もう一方の側縁辺を刃部として残している。石材はサヌカイトである。

4 まとめ

福西古墳群に関連する遺構、遺物は確認されなかったが、遺物包含層よりサヌカイト製のナイフ形石器が出土した。調査地から約 300m 南方に所在する大枝遺跡では、以前の調査等で段丘の礫層からの石器の出土が確認されている¹⁾。点的な調査であるため不明な点も多いが、今回の調査で確認した遺物包含層は大枝遺跡で確認されている包含層と同様の成因を持つ可能性が十分考えられ、大枝遺跡として包括される石器の分布範囲がさらに北へ広がるという知見を得ることができた。

(宇野 隆志)

註

1) 都出比呂志・四手井晴子(編) 1971『京都府乙訓地方の石器—資料篇—』乙訓の文化遺産を守る会第一日曜部会

藤岡謙二郎他 1972『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査—発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告—』京都市都市開発局洛西開発室

藤岡謙二郎他 1973『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査—発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告—補遺編』京都市都市開発局洛西開発室

V - 5 革嶋館跡 No. 24

1 はじめに

周知の埋蔵文化財包蔵地として掲載されている革嶋館跡は、山城国^{かどのくに}葛野郡革嶋荘を本拠とする国人領主革嶋氏の居館である。革嶋氏は清和源氏佐竹氏の流れであり、平安時代末期に^{このえもとみち}近衛基通の縁で同家領の革嶋南荘に来住し、以後下司職を務めている。室町時代には幕府御家人となり、本能寺の変では明智光秀に属して所領を失うものの、江戸時代になると再び地主として革嶋荘を支配するに至る¹⁾。革嶋氏の居館については、元禄15年(1702)の『革嶋家文書』に堀と土塁で囲まれた単郭の城郭として描かれているが、現在は住宅地と畑になっており、その痕跡を地上から観察することはできない状況である。

今回、この革嶋館跡の一角、西京区川島玉頭町37-16、40-15、40-14、40-4、37-4で、遺跡の保存と宅地造成の両立が可能かどうか地主から相談を受けたため、地下遺構の残存状況、遺構深度の情報を得る目的で試掘調査を実施した。試掘調査は、平成20年1月9日に実施し、調査面積は44㎡であった。

試掘調査の結果、革嶋館の範囲復元に有効な資料となる濠状遺構を検出したこと、高度規制により高層建築の建設が不可能な場所であることから、遺構保存可能な基礎掘削深度を提示し、工事中の立会調査を指導した。

2 層序と遺構

層序 調査区の基本層序は、現代盛土(厚さ55cm)、明黄褐色泥砂(厚さ25cm)、明赤褐色泥砂(厚さ30cm)、橙色泥砂(厚さ20cm)と続き、現地表下1.3mで濠の成立面となるにぶい黄橙色泥砂層または、にぶい褐色泥砂層の地山に達する。

濠1 1トレンチの調査区西端から2.1mの地点で南北方向の濠状遺構を検出した。濠の東西幅は5.0m、深さは1.5mで、断面の形は逆台形をしている。2トレンチも含めて南北16m分検出したが、調査区内では東西方向に屈曲する肩口を検出することはできなかった。濠の断面に観察される⑤層及び⑥層は、濠の埋没過程において一時期浅い溝として機能したことを示すもの

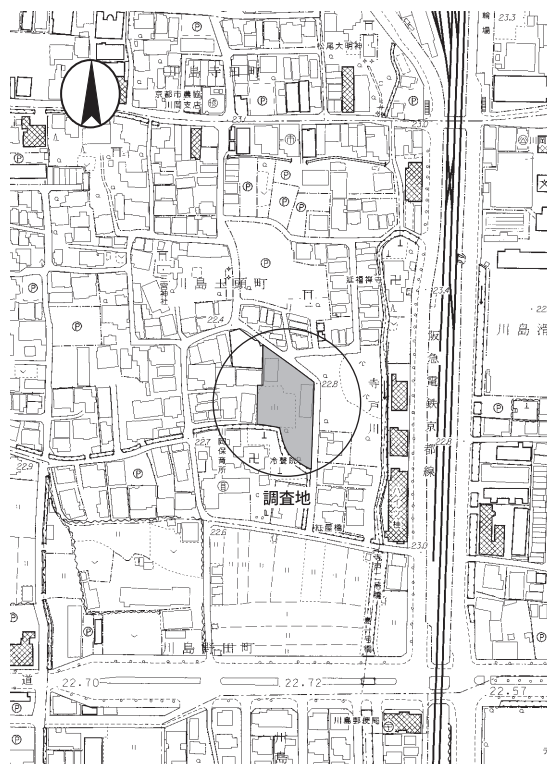


図64 調査位置図(1:5,000)

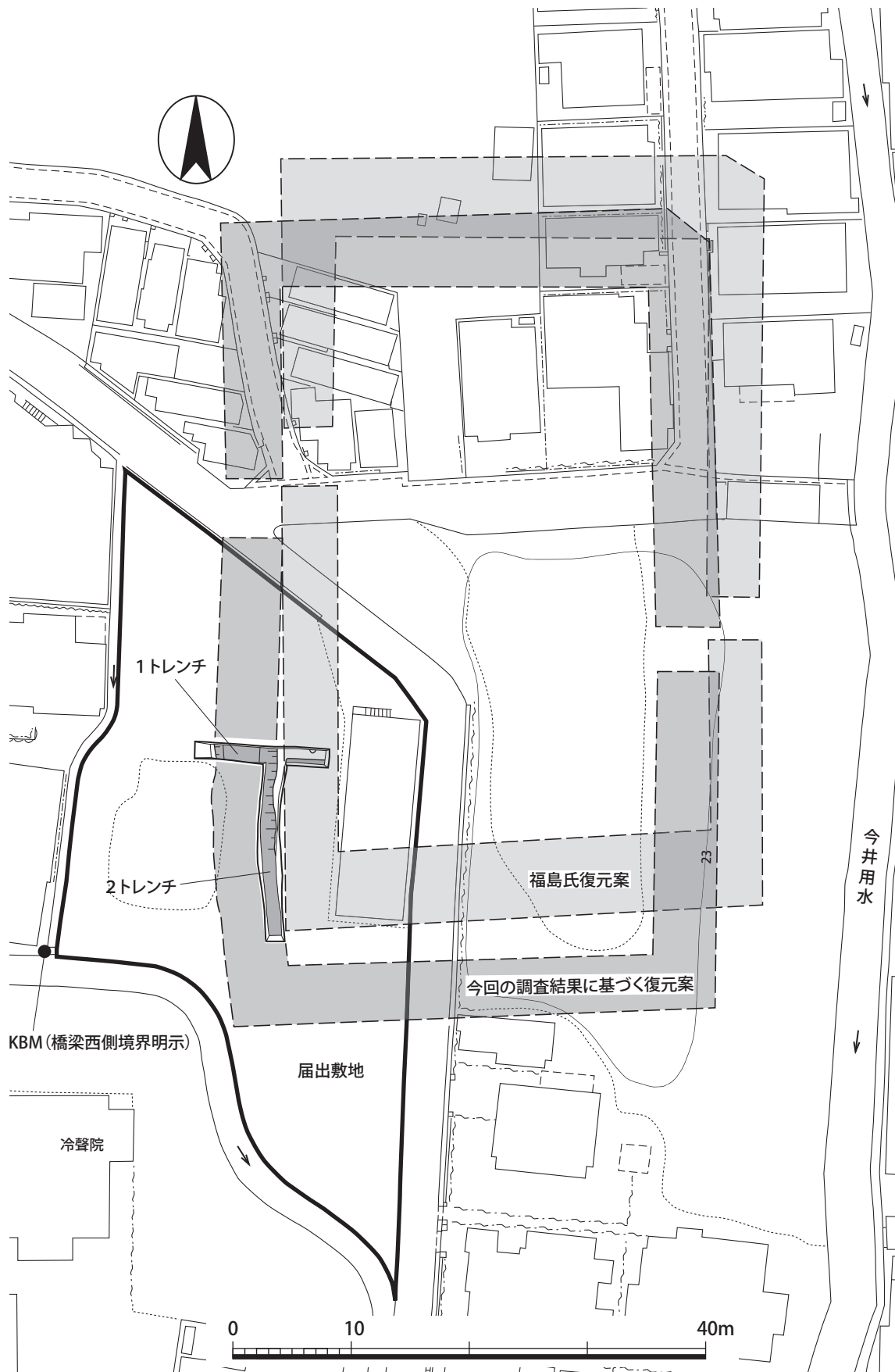


図 65 試掘調査区位置図 (1:500)

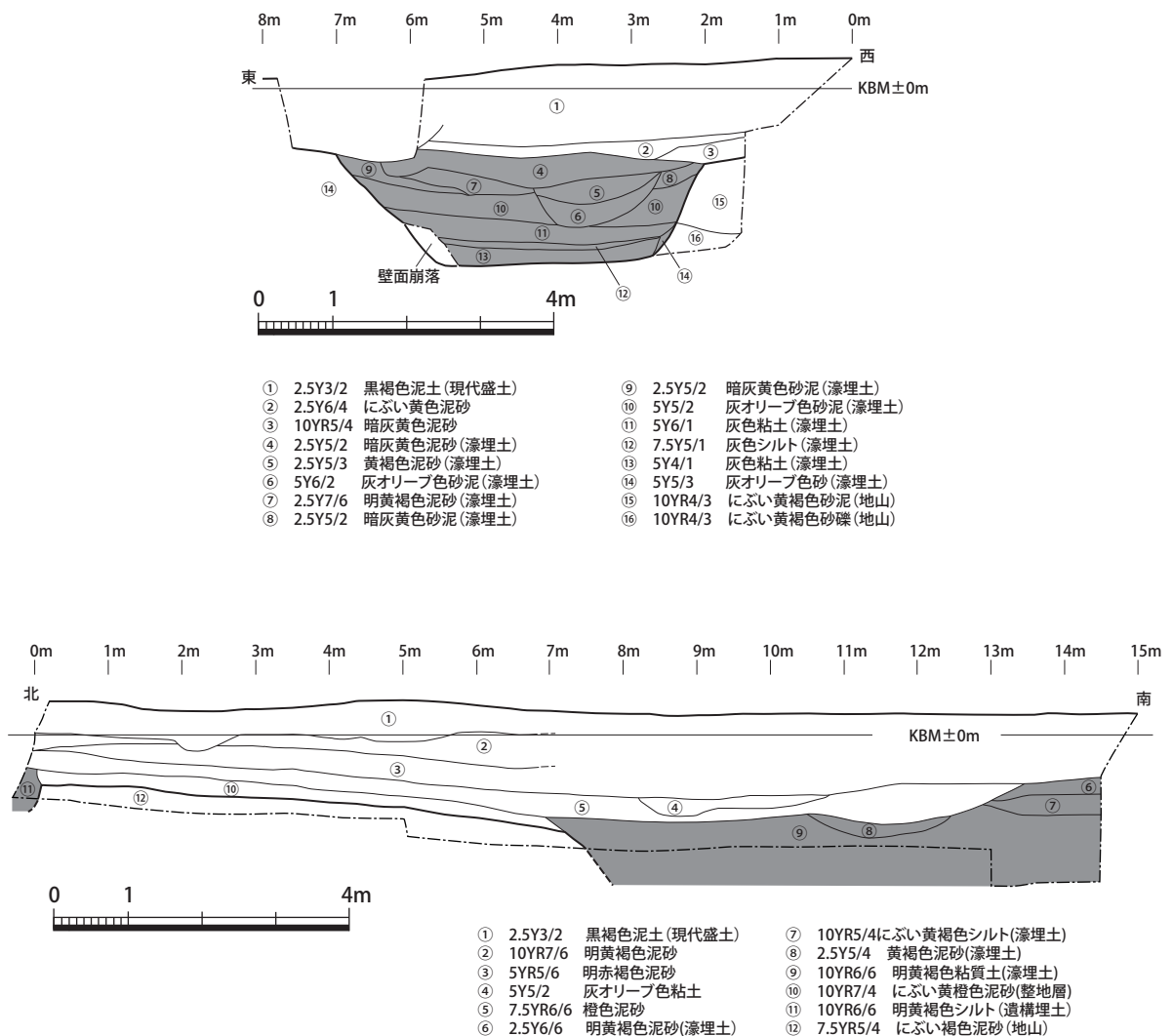
である。調査区内の濠状遺構の埋没時期を確定する目的で遺物の回収に努めたものの、度重なる土砂崩落を受けたため、土層と直接結び付けた検出は不可能であった。

溝状遺構 1トレンチ東端から3.5mまでの範囲で、調査区の南端に沿って幅30cm以上の東西溝が認められた。遺物はなく、時期等は不明であるが、館内部から濠に向けた排水溝の可能性もある。

3 出土遺物

遺物は、土砂崩落の危険を回避しながら行ったことから、図化可能なもので特定の埋土と結びつくものは2点だけであった。

濠出土遺物 重機掘削で回収した遺物に須恵器坏蓋(2)がある。埋土不明なものに、瓦器



※KBM=敷地南西角橋脚西側の境界明示

図66 1T濠部分南壁土層断面図(上), 2T東壁土層断面図(下)(1:100)



写真 20 1T 濠検出状況（北西から）



写真 21 2T 濠検出状況（北から）

羽釜（4, 5）、瓦質の丸型火鉢の底部（7）、方形飾り瓦（8）がある。瓦器羽釜4, 5は17世紀中頃のものと考えられる。また、方形飾り瓦は「丸に3単位のおもだか沢瀉紋」と見られる。1辺33cmの方形で、丸の直径は30cmである。革嶋家は佐竹氏流であることから、通常「丸の内五本骨扇に月丸」を家紋とするので、沢瀉紋の由緒は不明である。

濠埋土9層 唐津と考えられる椀（3）が出土した。京都XI期中段階から新段階²⁾（17世紀中頃）と考えられる。

濠埋土10層 信楽製播鉢（7）が濠埋土の中位で出土した。16世紀末から17世紀初頭のものと考えられる。

2T出土土器 素焼きの通称「つぼつぼ」（1）が出土した。濠埋没後の上面からの出土である。「伏見稻荷の初午祭で売られたものは、稻荷山の土を入れて持ち帰り、田畑に埋めて豊穰を祈願したもの」であるとも、「茶の湯の懐石で使用される釉薬のかかった「つぼつぼ」の祖形」ともされる³⁾。

4 まとめ

革嶋館跡の周知範囲において、今回の調査は第2次調査である。調査の結果、検出された南北方向の濠状遺構は、革嶋館跡の西濠と考えられる。従来は、現在に残る地割から三

宮神社を中核とする説⁴⁾、革嶋春日神社を中核とする説⁵⁾などがあったものの、『革嶋家文書』の絵図を基に福島氏の復元した案⁶⁾と今回の調査結果がほぼ一致することが明らかとなった。絵図と調査結果により、濠幅を含めて館の規模は南北68m、東西42mと想定される。また、土塁の痕跡が確認できなかったことについては、土地所有者が「昭和8年に購入した際に全体が竹林であり、高い部分を削って低い所を埋めた。」と語っていることから、購入直後のかなり早い段階で土塁は消滅したと考えられる。ただし、濠の埋没時期を考えると、17世紀以降、役目を終えた土塁は徐々に削られ、濠は埋められていった可能性が高い。今回の調査により、革嶋春日神社や三宮神社を中核とする説等は成り立たなくなると考えられる。ただし、三宮神社周辺の地

割は古く、革嶋館を含めた革嶋荘の防御施設等が周辺に存在する可能性があり、周知範囲の変更をするにはまだ時期尚早である。

(馬瀬 智光)

註

- 1) 国史大辞典編集委員会編 『国史大辞典』第3巻 ((株)吉川弘文館 1997年)の716頁
- 2) 小森俊寛・上村憲章 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 ((財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年) 以下、本章における編年は当該文献に従った。
- 3) 堀内寛昭 「土製小壺と茶の湯の“つぼつぼ”」『リーフレット京都』No.98 ((財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1997年)
- 4) 『京都市遺跡地図台帳』(京都市 2007年)
- 5) 山下正男 『京都市内およびその近辺の中世城郭—復原図と関連資料—』(『京都大学人文科学研究所調査報告』第35号 京都大学人文科学研究所 1986年)
- 6) 福島克彦 「乙訓・西岡の城館と集落」『京都乙訓・西岡の戦国時代と物集女城』(中井均・仁木宏編 文理閣 2005年)

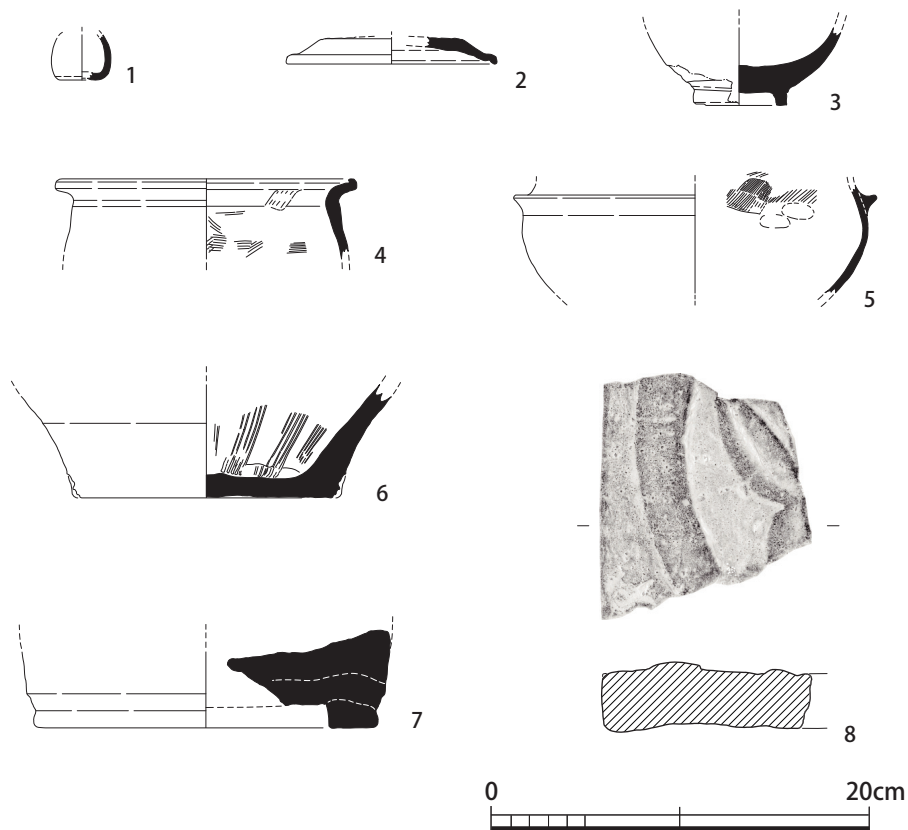


図 67 出土土器・瓦実測図 (1:4)

VI 試掘調査一覧表

平成19年度1月～3月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
1	職御曹司・聚楽第跡	上京区智恵光院通出水上る 天秤丸町183	1/21, 2/28	GL-1.0mで聚楽第南二ノ丸の西濠肩口を 検出した。 本文3頁。	75	07K420
2	宴松原跡	上京区七本松通下立売上る 七番町351	3/28	南面道路側溝-0.45mで地山を確認。	6	07K525

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
3	一条大路跡(北辺三坊 五町北)・上京遺跡・内 膳町遺跡	上京区一条通烏丸西入る広 橋殿町400	3/31, 6/2	GL-1.7mで中世以前の土坑や柱穴を検 出。設計変更を指導。	22	07H133
4	四条一坊一町跡	中京区壬生朱雀町5-2, 5-5	1/8～ 2/22	平安前期の園池を確認。 本文21頁。	135	07H239
5	四条四坊十二町跡	中京区西大文字町609	3/3, 4	GL-2.67mまで近世層。以下砂礫の地山。 中世湿地状堆積, 土坑5基検出。	12	07H477
6	七条一坊二町跡	下京区西新屋敷上之町128, 太夫町84, 84-5	3/5	GL-1.2mで中世の土取穴多数。	24	07H468
7	八条四坊八町跡	下京区小稲荷町, 郷之町	1/16	概ねGL-1.3mまで近世包含層, 以下地 山。顕著な遺構なし。	27	07H454
8	教王護国寺旧境内 (東寺旧境内)	南区大宮八条下る九条町621	2/4, 5	八条大路南側溝, 東寺東堀などを検出。 発掘調査を指導。	88	07H416
9	九条四坊七, 八町跡・ 針小路跡	南区東九条西岩本町26- 1, 31, 32, 33, 30-2, 34-3	2/7	砂利採取による攪乱が顕著。	61	07H424

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
10	二条四坊十一町跡	右京区太秦安井馬塚町18- 8, 14, 15, 35, 45, 46	3/13	GL-0.8mで地山。中世耕作溝多数のほ か, 耕作に伴う杭跡などを検出。	53	07H523
11	四条三坊十四町跡・山 ノ内遺跡	右京区山ノ内赤山町 13, 14, 15	2/20	GL-1.9mで黄褐色砂泥の地山。基礎掘削 深度未達のため, 立会調査を指導。	14	07H452
12	五条一坊十二町跡	中京区壬生下溝町33-1	3/21	GL-0.85mで褐色砂泥の地山。粘土探掘土 坑と近世以降の杭列等を検出。	77	07H471
13	六条一坊三町跡	下京区朱雀分木町80(中央 卸売市場第一市場)	2/18, 3/7	GL-1.0mで地山。西坊城小路東側溝・柱 穴・土坑等を検出。 発掘調査を指導。	272	07H507
14	六条二坊六町跡	下京区西七条東御前田町22 の一部, 23-1	2/14	1TrはGL-1.1mの地山面で柱穴等を検出。 2Trは-1.4mで中世整地層。 本文43頁。	36	07H434
15	六条四坊十六町跡	右京区西京極葛野町4	1/24	GL-0.9m以下, にぶい黄褐色砂泥層の地 山。遺構なし。攪乱著しい。	38	07H137
16	八条三坊四町跡	右京区吉祥院西ノ庄東屋敷 町16, 17, 18	3/17	GL-2.0mで敷地西半は河川の氾濫原, 東 半は後背湿地。	53	07H458
17	史跡西寺跡	南区唐橋西寺町62	1/23	GL-0.34mで西寺東小子房基壇等を確認。 掘削深度未達のため, 地中保存。	7	19N061
18	史跡西寺跡・唐橋遺跡	南区唐橋西寺町35-6	3/26	GL-0.3mで食堂院西回廊東柱列の礎石抜 取穴3基を確認。 本文48頁。	13	19N074

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
19	常盤東ノ町古墳群・村 ノ内町遺跡	右京区常盤東ノ町26-5他	2/18, 19	調査地南西で墳丘及び周溝を確認。設計 変更を指導。	118	07S443
20	上ノ段町遺跡	右京区太秦堀ヶ内町1-1	3/27	遺構, 遺物ともになし。	18	07S385

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
21	御土居跡・寺町旧域	上京区御車道今出川下る二 丁目栄町361	2/25	御土居と寺町を区画する溝を検出。 本文 51頁。	27	07S460

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
22	中臣遺跡	山科区東野舞台町77-2	1/15	GL-2.6mで土坑を検出。掘削深度未達のため、立会調査。	4	07N402

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
23	深草坊町遺跡・貞観寺跡	伏見区深草瓦町65-1, 64-1, 119	1/17	GL-0.4mで土取り穴を検出。立会調査を指導。	26	07S438

南・桂地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
24	革嶋館跡	西京区川島玉頭町37-16, 40-15, 40-14, 40-4, 37-4	1/9	GL-1.3mで革嶋館跡の西濠と南濠を検出。 本文63頁。	44	07S429

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
25	鳥羽離宮跡	伏見区中島秋ノ山町133-1	1/28	GL-1.3mで勝光明院の園池の陸部を検出。設計変更のうえ立会調査を指導。	23	07T456
26	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区中島秋ノ山町134	3/19	GL-1.1mで勝光明院の園池, GL-1.4mで池底。設計変更を指導。	20	07T562
27	鳥羽離宮跡	伏見区竹田東小屋ノ内町91の一部	2/27	GL-1.2mで平安期瓦を含む灰色泥砂層, GL-1.6m以下氾濫堆積。	17	07T457
28	志水落合城跡	伏見区羽東師志水町18, 19-1	3/24	遺構, 遺物ともになし。	54	07S492

平成20年度 4月～12月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
29	茶園跡・主殿寮跡・聚楽第跡	上京区中立売日暮東入新白水丸町462-82	4/21	GL-0.8mで聚楽第廃絶後の整地層を確認。工事中の立会調査を指導。	20	08K003
30	梨本跡・聚楽第跡	上京区下長者町通裏門西入坤高町82, 85-2	6/30	GL-1.4mで聚楽第西之丸南堀を検出。 本文3頁。	7	07K081
31	内蔵寮跡	上京区千本通上長者町下る革堂前之町115-2, 117, 119, 下長者町通千本西入六番町370	11/6	GL-0.38mで平安の整地層。顕著な遺構・遺物なし。工事中の立会調査を指導。	23	08K278
32	職御曹司跡・聚楽第跡	上京区智恵光院通出水上天秤丸町182-1の一部	5/7	GL-1.7mで砂礫の地山。顕著な遺構なし。	15	07K570
33	紫宸殿跡・聚楽遺跡	上京区下立売通千本東入田中町465, 463, 461-1	6/30	GL-2.27mまで掘削したが、すべて江戸時代の盛土。 本文10頁。	10	08K061
34	宴松原跡	上京区下立売通七本松東入長門町407	7/31	GL-1.0mでにぶい黄褐色砂礫の地山を検出。顕著な遺構, 遺物なし。	13	08K049
35	御井跡	中京区西ノ京車坂町14-12, 14-13, 14-17	6/25	GL-0.15～0.3mで御井東築地に伴う南北溝を検出。 本文14頁。	21	08K087
36	朝堂院跡・聚楽遺跡	上京区竹屋町通千本東入主税町1185, 1186, 1184	7/10	GL-1.25mで地山。大半が土取穴で遺構は残存せず。立会調査を指導。	15	08K070

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
37	一条大路跡(北辺三坊五町北)・上京遺跡・内膳町遺跡	上京区一条通烏丸西入広橋殿町400	3/31, 6/2	GL-1.1～1.7mで中世以前の土坑や柱穴を検出。設計変更を指導。	22	07H133
38	一条三坊六町跡・旧二条城跡	上京区下立売通室町西入東立売町209-1他	7/28, 29	GL-1.8mで中世の土坑を検出。攪乱の多い北側を除き 発掘調査を指導。	54	08H094
39	中御門大路跡(二条四坊一町北)・烏丸丸太町遺跡・公家町遺跡	上京区京都御苑3の一部	7/9	GL-0.87mで江戸前半の石組溝などを検出。 本文17頁。	10	07H486

VI 試掘調査一覧表

40	三条一坊十三町跡	中京区大宮通姉小路下る姉大宮町西側83	11/20	敷地全域において桃山期の湿地状堆積を確認。工事中の立会調査を指導。	22	08H342
41	三条三坊二町跡・烏丸御池遺跡	中京区新町通押小路下る中之町49, 51他2筆	10/17	敷地東端で南北方向の堀状遺構を確認。 発掘調査を指導。	66	08H294
42	三条三坊七町跡・烏丸御池遺跡・妙覚寺城跡	中京区室町通押小路下る御池之町298他	6/19	既存建物による攪乱が顕著。	23	07H529
43	四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡	中京区新町通三条下る三条町339-1他	6/23	GL-1.5mで室町時代の包含層、その下層で土坑等を検出。 発掘調査を指導。	29	08H069
44	五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区室町通仏光寺上る白楽天町522-1, 仏光寺通室町東入釘隠町245	8/18, 19	攪乱が顕著だが、一部で平安の遺構を確認。工事中の立会調査を指導。	111	08H149
45	七条二坊十町跡・史跡 本願寺境内	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町60	10/27, 12/5	本願寺に関連する整地面2面を確認。下位面で礎石列を検出。 本文33頁。	32	20N043
46	七条四坊十一町跡・御土居跡	下京区土手町通正面下る紺屋町382	11/4	GL-0.86mで砂礫の地山。顕著な遺構なし。	18	08H199
47	八条四坊二町跡・塩小路若山城跡	下京区東洞院通七条下る東塩小路町558	5/14, 15	調査地西半を中心に中世土坑群を検出。 発掘調査を指導。	51	07H527
48	教王護国寺旧境内(東寺旧境内)	南区大宮通八条下る九条町399-35	8/25	GL-0.55mで平安時代の遺物包含層を検出。 本文38頁。	6	08H197
49	九条二坊十六町跡	南区西九条北ノ内町13-1他	10/21	GL-1.3mで地山。中世の井戸を検出。工事中の立会調査を指導。	31	08H327
50	九条二坊十四町跡・烏丸町遺跡	南区西九条春日町45	12/15	GL-0.6mで砂礫の地山を確認。	7	08H405
51	九条大路跡(九条三坊五町南)・烏丸町遺跡	南区東九条下殿田町56	12/22	GL-0.5mで地山を確認。ただし、グラウンド南側の大半は攪乱顕著。	85	08H412

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
52	二条二坊九町跡	中京区西ノ京円町31	11/10	地表面又はその直下で平安遺物を大量に包含する層。 発掘調査を指導。	25	08H329
53	三条二坊九, 十町跡・西ノ京遺跡・御土居跡	中京区西ノ京東中合町62他	9/18, 22	GL-1.25mで地山。平安時代の園池?・柱穴・土坑等を検出。 発掘調査を指導。	129	08H168
54	三条三坊十五町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京月輪町24-2	4/3	GL-0.8mで掘立柱建物1棟ほかを検出するも大部分は攪乱。 本文40頁。	60	07H588
55	四条三坊十町・十一町跡	右京区西院春栄町39他	8/13	GL-1.0mで遺構面を確認。工事中の立会調査を指導。	38	08H198
56	五条三坊三町跡・西院遺跡	右京区西院西矢掛町14	10/30	GL-0.8mで地山を検出。西半は湿地堆積。	11	08H354
57	五条四坊十五町跡・西京極遺跡	右京区西院東貝川町57	8/8	GL-1.1m以下、流れ堆積。	22	08H108
58	六条二坊六町跡	下京区西七条東御前田町15-1	6/9	GL-0.9mで幅5m以上の平安?の東西溝を検出。 本文43頁。	46	08H088
59	七条一坊十五町跡・衣田町遺跡	下京区西七条西八反田町129-1	12/8	GL-1.0mで柱穴、西櫛筒小路側溝等を検出。 発掘調査を指導。	58	08H301
60	七条二坊四町(西市)跡・衣田町遺跡	下京区西七条中野町14-1, 37	12/12	GL-0.4~1.0mで地山。近世土取りが顕著。工事中の立会調査を指導。	42	08H416
61	七条二坊八町跡	下京区西七条西石ヶ坪町5	7/30	GL-1.4mで砂礫層を検出。顕著な遺構なし。	12	08H008
62	七条四坊一町跡	右京区西京極豆田町2	6/17, 18	数度にわたる湿地の陸地化を示す土層堆積を確認。	25	08H020
63	八条二坊十, 十五町跡・衣田町遺跡	下京区七条御所ノ内北町63-1	7/3	GL-0.9mで野寺小路側溝を検出。 発掘調査を指導。	45	08H066
64	八条二坊十二町跡	下京区七条御所ノ内本町90-2の一部, 91-2, 92, 93の一部	6/5	GL-1.0mで中世の南北溝1条検出。	35	08H044
65	八条四坊十六町跡	右京区西京極西川町他 地内	8/27	GL-1.4mで地山を検出。顕著な遺構、遺物は検出されなかった。	25	05H274
66	九条二坊九町跡	下京区七条御所ノ内南町82-1	4/11	北半ではGL-0.5m以下湿地堆積。南半は-0.65mで砂礫の地山。	42	07H540
67	西京極大路跡・九条大路跡	南区吉祥院堤外町9	6/3	河川堆積を確認。	32	08H057

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
68	仁和寺院家跡・円宗寺跡	右京区宇多野柴橋町16-19	11/17	遺構なし。削平を受けているか。	9	08S366

69	嵯峨遺跡	右京区嵯峨鳥居本仏餉田町20, 21	8/20	顕著な遺構なし。	48	08S165
70	嵯峨遺跡	右京区嵯峨二尊院門前北中院町2-7	5/27, 6/12	GL-0.6mで黄褐色砂泥の地山。室町時代の土器溜を確認。本文54頁。	63	08S026
71	嵯峨折戸町遺跡	右京区嵯峨新宮町43-1ほか	7/7	GL-0.9~1.2mで地山。平安?の土坑3基のみで、遺構は希薄。	37	08S068
72	常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡	右京区常盤東ノ町6-3, 26-3, 26-4の各一部	12/10	GL-0.3~0.4mでにぶい黄褐色砂泥の地山。攪乱多く、顕著な遺構なし。	20	08S340
73	常盤東ノ町古墳群・常盤仲之町遺跡・村ノ内町遺跡	右京区常盤仲之町3-26	9/30, 10/2	地山上面で土坑、柱穴、溝、竪穴住居を確認。発掘調査を指導。	81	08S079
74	常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡	右京区常盤東ノ町6, 6-2, 1-3の一部	4/25	1TrはGL-1m, 2Trは-0.9mで中世以前の遺構検出。設計変更を指導。	38	07S580
75	常盤仲之町遺跡	右京区太秦蜂岡町10-23他6筆	11/12, 13	顕著な遺構なし。	114	08S324
76	御所ノ内町遺跡	右京区太秦御所ノ内町25-1, 25-2の一部, 25-9	4/16, 18	GL-0.7mで褐色砂泥の地山。鎌倉時代の溝、土坑を検出。遺構は希薄。	137	07S481

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
77	中の谷窯跡	左京区岩倉木野町137-1他43筆	5/12	北方向へ下る旧表土を確認。	76	07S491
78	大徳寺旧境内	北区紫野大徳寺町54-1	4/15	GL-0.45mで明黄褐色砂泥の地山。慶長期以前に遡る遺構・遺物なし。	6	07S571
79	大徳寺旧境内	北区紫野大徳寺町74	9/9	表土直下で塀基礎と考えられるピット群と溝を検出。発掘調査を指導。	32	08S130
80	上総町遺跡	北区小山上総町1-2, 1-4	10/6, 7	GL-0.4mで弥生時代、奈良時代、中世の土坑等を検出。発掘調査を指導。	85	08S209
81	上京遺跡・革堂跡(行願寺)	上京区小川通一条上る革堂町577, 579, 580	9/8	GL-0.7~1.05mで地山。ピット・土坑等検出。大部分は近世以降の攪乱。	49	08S163
82	公家町遺跡	上京区京都御苑3の一部	9/16	GL-0.2mで幕末の火災層、下層でも複数の遺構面を確認。発掘調査を指導。	17	08S164

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
83	修学院遺跡	左京区修学院桧峠町11-15, 11-26, 11-28, 23-2, 23-3, 35-2	9/10	GL-1.1m~2.4mで地山。明確な遺物・遺構なし。調査時に既存建物が一部存在したため、立会調査を指導。	16	08S093

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
84	法住寺殿跡	東山区今熊野榎ノ森町7, 7-6, 7-7, 7-21	9/24	顕著な遺構、遺物なし。	23	08S138
85	山科本願寺跡	山科区西野山階町11-5, 11-6, 29-16の各一部, 85	9/1	GL-0.4mで整地層。顕著な遺構・遺物なし。既に削平か。本文58頁。	18	08S103
86	山科本願寺南殿跡	山科区音羽伊勢宿町17, 18-1, 19-6	9/11	GL-0.65~0.87mで時期不明の小ピット2, 土坑1基を検出。	16	08S264
87	中臣遺跡	山科区勸修寺東栗栖野町12-1, 12-5, 12-8, 12-29の各一部, 東野舞台町90-17	10/8	GL-0.1~0.3mで地山。顕著な遺構、遺物なし。	42	08N214

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
88	伏見稻荷大社境内	伏見区深草藪之内町68他69筆	10/1	GL-0.2~1.1mで地山。近世以前の遺構なし。	27	08S202
89	伏見城跡	伏見区村上町394	7/22	GL-1.73mで地山を検出。顕著な遺構、遺物なし。	72	08F096
90	伏見城跡	伏見区深草大亀谷五郎太町25他3筆	7/14	GL-0.8~1.3mで整地面。ピット4基を検出。	36	07F366
91	伏見城跡	伏見区竹中町609の一部, 下板橋町509の一部, 新町8丁目433-1	5/19, 21, 22	既存建物基礎により遺構面の大半が消失。	235	07F524
92	伏見城跡	伏見区新町五丁目487, 488, 銀座一丁目356-6, 356-12, 356-18	8/4, 8/5	敷地東端ではGL-0.1m, 西端では-1.37mで地山。中央では雛壇造成に伴う盛土層を検出。削平・攪乱が顕著。	39	08F075

VI 試掘調査一覧表

南・桂地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
93	大藪遺跡・中久世遺跡・下久世構跡	南区久世殿城町505-1	8/7	GL-0.38mで黄褐色砂泥の地山。遺構なし。	33	08S115
94	史跡名勝嵐山	西京区嵐山元禄山町11-2	10/9	GL-0.5mで土石流による砂礫層、-2.1mでシルト層。遺構・遺物なし。	9	20N022
95	福西古墳群	西京区大枝中山町7-116, 7-122, 7-125	9/3	GL-3.6mまで現代盛土。おそらく、GL-4mまでは現代盛土とみられる。	12	08S185
96	福西古墳群	西京区大枝東長町1-34, 1-35	8/11	ナイフ形石器の包含層を確認。 本文61頁 。	61	08S102
97	上久世遺跡	南区久世上久世町350, 383-1	7/24	GL-0.9mで湿地状堆積を検出し、弥生土器が出土。 立会調査報告書参照 。	39	08S193
98	中久世遺跡	南区久世殿城町94の一部, 95の一部	10/27	GL-1~1.5mで地山。弥生時代のピット数基を検出。	51	08S289

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
99	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区竹田真幡木町181, 182, 183	6/13	GL-0.9mで中世の柱穴、平安後期の柱穴を確認。設計変更を指導。	16	08T078
100	鳥羽離宮跡, 鳥羽遺跡	伏見区中島鳥羽離宮町23	10/22	GL-1.0mで湿地状堆積を確認。顕著な遺構や遺物なし。	30	08T257
101	鳥羽離宮跡	伏見区竹田田中宮町12の一部	7/1	主として流水堆積。顕著な遺構なし。	8	08T041

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	概要	面積	受付番号
102	長岡京左京一条三坊五町跡	南区久世東土川町126-1, 126-5	5/28, 30	GL-1.8~2mでにぶい黄褐色砂泥の地山。顕著な遺構・遺物なし。	142	08NG043
103	長岡京左京二条四坊六, 七町跡	南区久世東土川町472-1, 473, 474, 475, 476	4/30~5/2	GL-0.35mで長岡京の条坊（二条条間大路側溝）を検出。 発掘調査を指導 。	139	08NG019
104	長岡京左京二条四坊六, 十一町跡	伏見区久我西出町1-1, 1-2, 1-3, 1-4	10/28	GL-0.5mで長岡京の条坊（東四坊坊間小路）、柱穴を確認。設計変更を指導。	82	08NG267
105	長岡京左京三条四坊十, 十一町跡	伏見区久我西出町8-8, 8-9	10/16	GL-1.1mで長岡京の条坊（三条条間小路側溝）検出。 発掘調査を指導 。	42	08NG282
106	長岡京左京三条四坊十二町跡	伏見区久我西出町13-24, 13-26	11/25	GL-1~1.2mでにぶい黄褐色砂泥の地山。顕著な遺構・遺物なし。	73	08NG345
107	長岡京左京四条四坊十町跡	伏見区久我西出町14-9, 14-10の一部	10/15	顕著な遺構なし。	59	08NG227

表4 遺物概要表

	Aランク点数 (箱数)	内容	Bランク 箱数	Cランク 箱数	出土箱 数合計
点数及び箱数	392点 (9箱)	弥生土器1点, 土師器137点, 須恵器30点, 黒色土器2点, 緑釉陶器10点, 灰釉陶器6点, 瓦質土器7点, 陶磁器64点, 土製品2点, 瓦111点, 石器1点, 銭貨5点, 木製品13点, 鉄製品2点, 種実1点	4箱	29箱	42箱

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなしいせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・堀 大輔・宇野隆志・家原圭太・西森正晃							
編集機関	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課							
所在地	〒 606- 8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会館内							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
平安宮職御曹司跡 聚楽第跡	京都府京都市上京区 智恵光院通水上の天祥丸町 183	26100	2 234	35度 1分 20秒	135度 44分 48秒	2008/1/21, 2/28	75	共同住宅
平安宮梨本跡 聚楽第跡	京都府京都市上京区 下長者町通裏門西入 坤高町82.85-2	26100	2 234	35度 1分 22秒	135度 44分 45秒	2008/6/30	7	共同住宅
平安宮紫宸殿跡 聚楽遺跡	京都府京都市上京区 下立売通千本東入 田中町465他	26100	2 237	35度 1分 13秒	135度 44分 40秒	2008/6/30	10	共同住宅
平安宮御井跡	京都府京都市中京区 西ノ京車坂町14-12他	26100	2 237	35度 1分 0秒	135度 44分 21秒	2008/6/25	21	共同住宅
平安京左京中御門大路跡 烏丸丸太町遺跡 公家町遺跡	京都府京都市上京区 京都御苑3の一部	26100	1 246 241	35度 1分 8秒	135度 45分 43秒	2008/7/9	10	休憩所
平安京左京四條一坊一町跡	京都府京都市中京区 壬生朱雀町5-2. 5-5	26100	1 237	35度 0分 29秒	135度 44分 37秒	2008/1/8~ 1/22	172	共同住宅
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安宮職御曹司跡	宮殿跡	平安時代				瓦		
聚楽第跡	城館跡	桃山時代		南二ノ丸の西堀肩口		土師器, 漆器		
平安宮梨本跡	宮殿跡	室町時代						
聚楽第跡	城館跡	平安時代		外郭南堀		土師器		
平安宮紫宸殿跡	宮殿跡	平安時代				土師器		
聚楽遺跡	集落跡	弥生時代~古墳時代		聚楽第堀		天目茶碗		
平安宮御井跡	宮殿跡	平安時代		築地に伴う溝		瓦		地中保存
平安京左京中御門大路跡	都城跡	平安時代		石組溝		土師器, 陶磁器		地中保存
烏丸丸太町遺跡	集落跡	古墳時代~飛鳥時代						
公家町遺跡	邸宅跡	江戸時代						
平安京左京四條四坊一町跡	都城跡	平安時代		園池		土師器, 須恵器, 瓦		

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなしいせきしくつちようさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・堀 大輔・宇野隆志・家原圭太・西森正晃							
編集機関	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課							
所在地	〒 606- 8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会館内							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京左京七条二坊十町跡	京都府京都市下京区堀川通花屋町下る	26100	1	34度59分31秒	135度45分9秒	2008/10/27, 12/5	153	復旧工事
史跡本願寺境内	京都府京都市南区本願寺門前町60		A702					
教王護国寺旧境内(東寺旧境内)	京都府京都市南区大宮通八条下る九条町399-35	26100	758	34度58分59秒	135度44分54秒	2008/8/25	6	保育園
平安京右京三条三坊十五町跡	京都府京都市伏見区竹田松林町58, 59	26100	1	35度0分41秒	135度43分31秒	2008/4/3	60	共同住宅
西ノ京遺跡			461					
平安京右京六条二坊六町跡	京都府京都市下京区西七条東御前田町22, 23-1の一部	26100	1	34度59分45秒	135度44分3秒	2008/2/14	36	事務所
平安京右京六条二坊六町跡	京都府京都市下京区西七条東御前田町15-1	26100	1	34度59分44秒	135度44分3秒	2008/6/9	46	事務所
史跡西寺跡	京都府京都市南区唐橋西寺町35-6	26100	A751	34度58分53秒	135度44分15秒	2008/3/26	13	個人住宅
唐橋遺跡			756					
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安京左京七条二坊十町跡	都城跡	平安時代		整地層, 礎石列		土師器, 瓦, 銅銭		地中保存
史跡本願寺境内	寺院跡	室町時代～江戸時代						
教王護国寺旧境内	寺院跡	平安時代		包含層, 溝		土師器, 須恵器, 緑釉軒丸瓦		地中保存
平安京右京三条三坊十五町跡	都城跡	平安時代		建物, 溝		土師器, 瓦		
西ノ京遺跡	散布地	弥生時代～古墳時代						
平安京右京六条二坊六町跡	都城跡	平安時代		溝, 柱穴, 整地層		土師器, 須恵器		地中保存
平安京右京六条二坊六町跡	都城跡	平安時代		溝				
史跡西寺跡	寺院跡	平安時代		回廊礎石抜き取り穴				地中保存
唐橋遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代						

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなしいせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・堀 大輔・宇野隆志・家原圭太・西森正晃							
編集機関	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課							
所在地	〒 606- 8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会館内							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
御土居跡 寺町旧域	京都府京都市上京区 御車道今出川下る二丁目栄町 361	26100	149	35度 1分 40秒	135度 46分 9秒	2008/2/25	27	集合住宅
嵯峨遺跡	京都府京都市右京区 嵯峨二尊院門前北中院町2-7	26100	937	35度 1分 27秒	135度 40分 20秒	2008/5/27, 6/12	63	宅地造成
山科本願寺跡	京都府京都市山科区 西野山階町11-5他	26100	626	34度 58分 54秒	135度 48秒 36秒	2008/9/1	18	店舗
福西古墳群	京都府京都市西京区 おおえひがしながちょう 大枝東長町1-34, 1-35	26100	998	34度 58分 2秒	135度 40分 43秒	2008/8/11	61	宅地造成
革嶋館跡	京都府京都市西京区 かわしまたまがしらちょうほか 川島玉頭町37-16他	26100	997	34度 58分 30秒	135度 42分 6秒	2008/1/9	44	宅地造成
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
御土居跡 寺町旧域	土塁跡 寺院跡	桃山時代		区画溝		土師器		
嵯峨遺跡	寺院跡	桃山時代～江戸時代						
山科本願寺跡	寺院跡	鎌倉時代～室町時代		土坑		土師器		
福西古墳群	古墳跡	室町時代						地中保存
革嶋館跡	古墳跡	古墳時代				ナイフ形石器		
革嶋館跡	城館跡	鎌倉時代～室町時代		濠				地中保存

版 圖

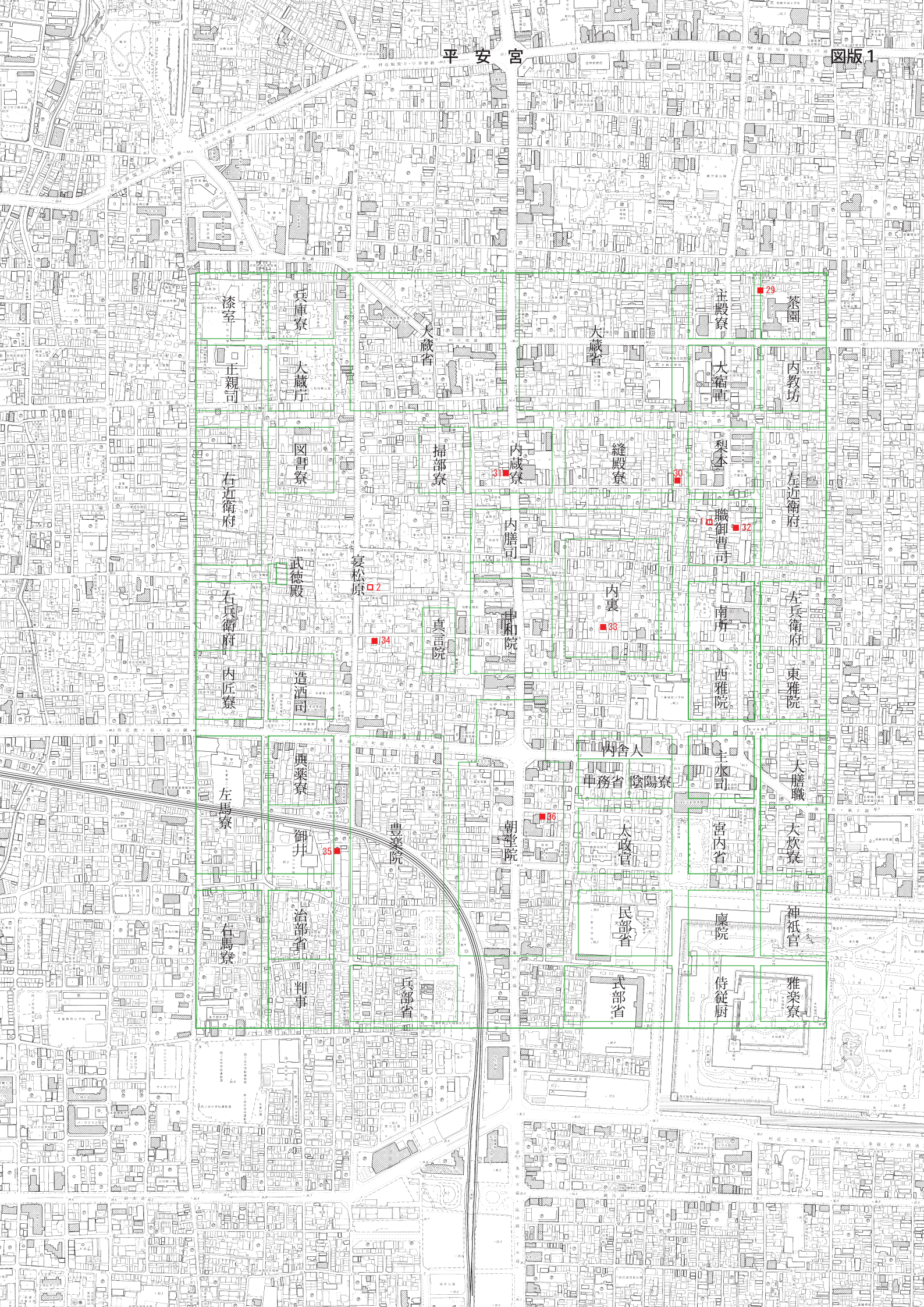
凡 例

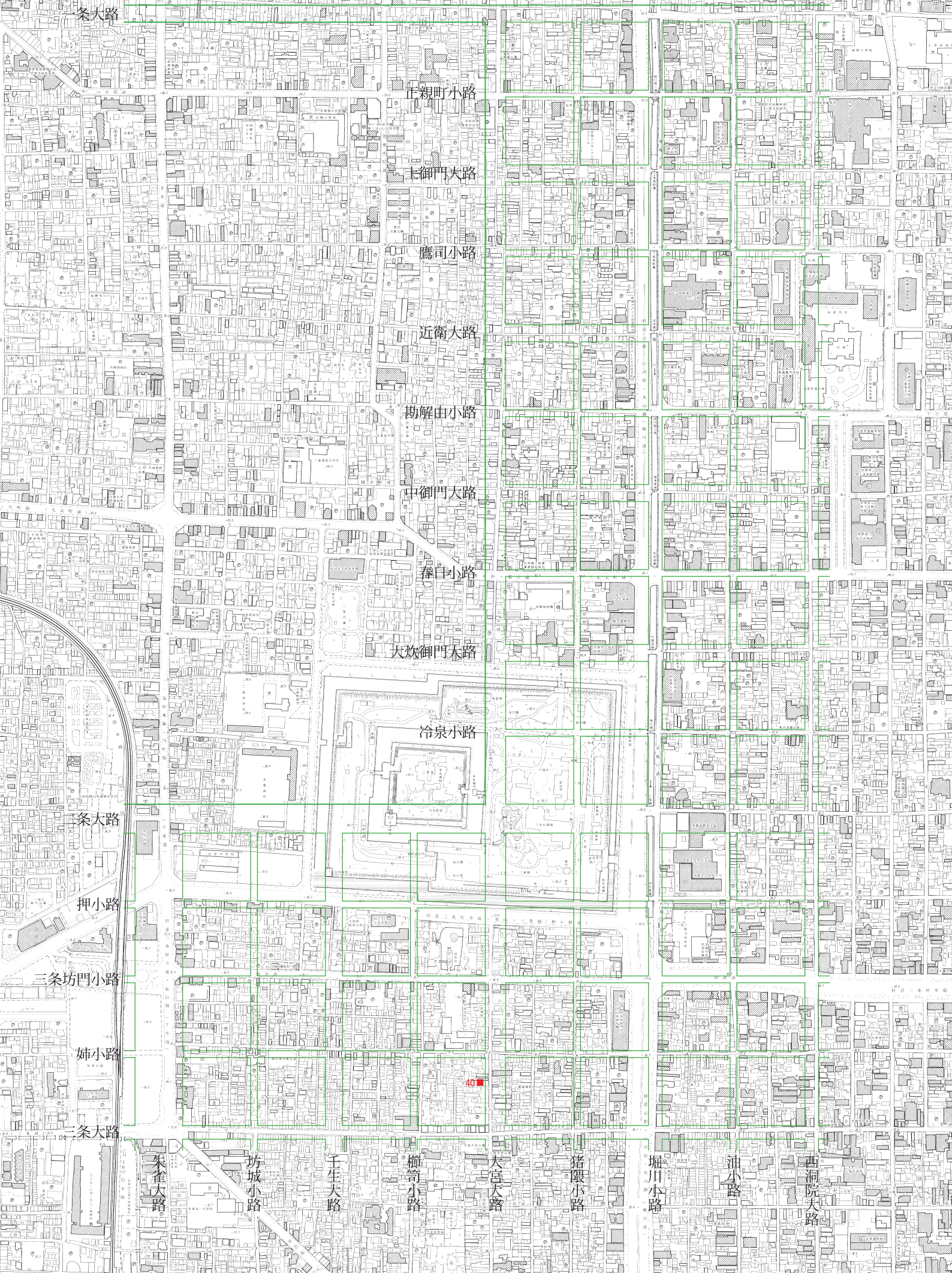
平成20年試掘調査地点

□ 1月～3月

■ 4月～12月

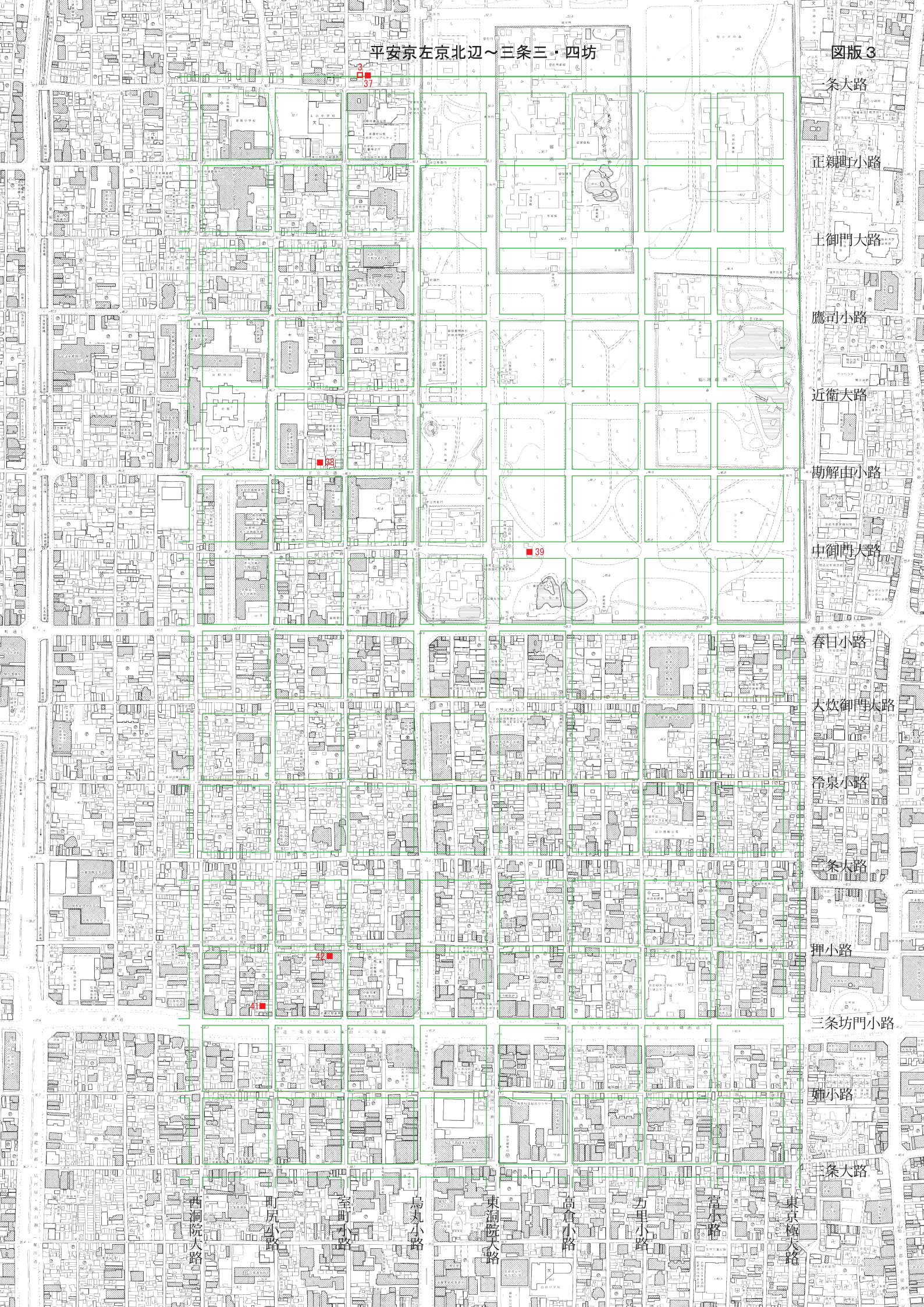
----- 遺跡範囲





平安京左京北辺～三条三・四坊

図版3



条大路

正親町小路

土御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

条大路

押小路

三条坊門小路

堀小路

条大路

西洞院大路

町尻小路

室町小路

烏丸小路

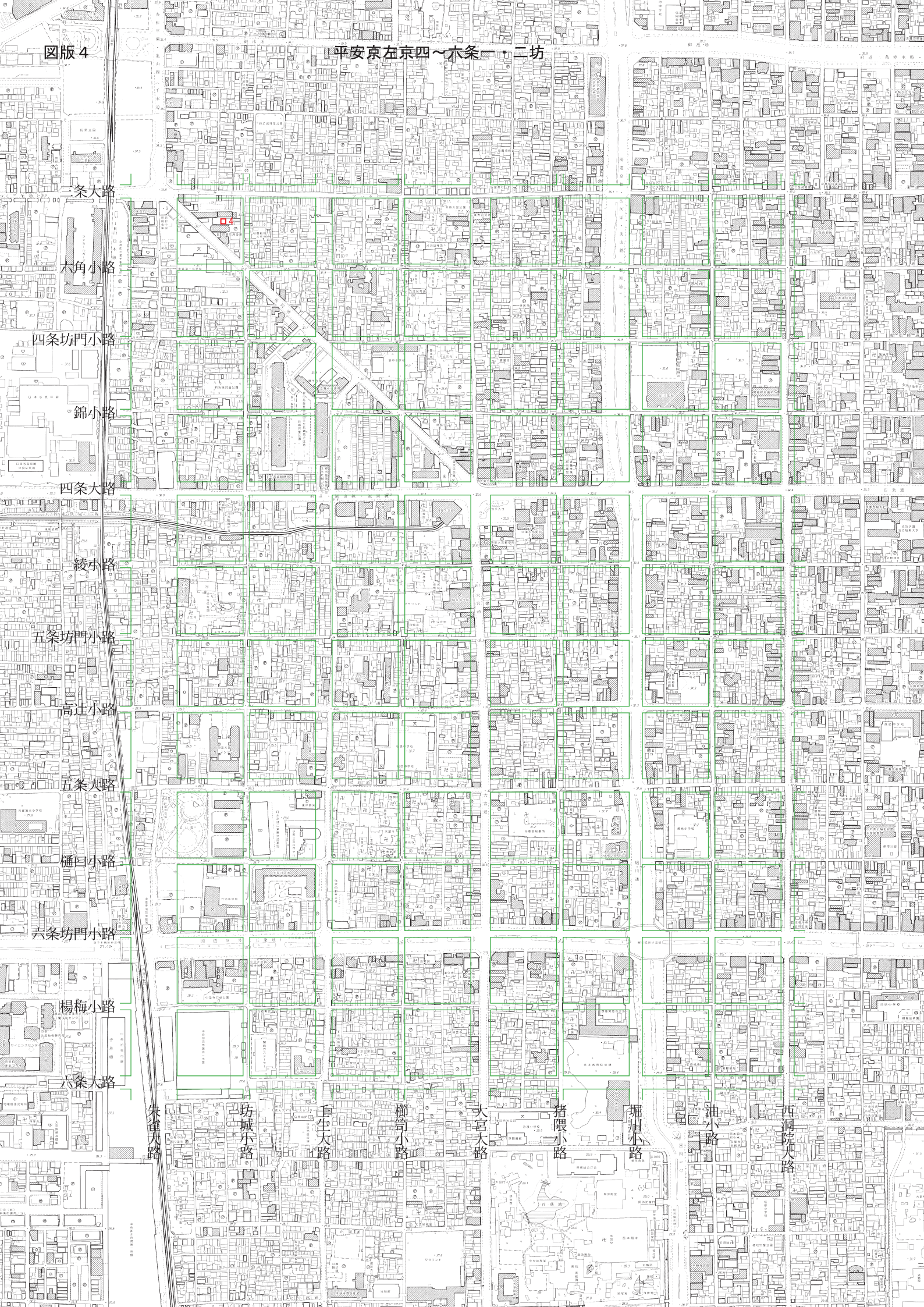
東洞院大路

高倉小路

方里小路

富水小路

東京極大路



三条大路

六角小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

樋口小路

六条坊門小路

楊梅小路

六条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫛笥小路

大宮大路

猪隈小路

堀州小路

油小路

西洞院大路



■43

■45

■44

三条大路

六角小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

廳口小路

六条坊門小路

楊梅小路

六条大路

西洞院大路

町丸小路

室町小路

烏丸小路

東洞院大路

高倉小路

万里小路

富小路

東京極大路



七条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

梅小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫛笥小路

大宮大路

猪鬣小路

堀川小路

油小路

西洞院大路

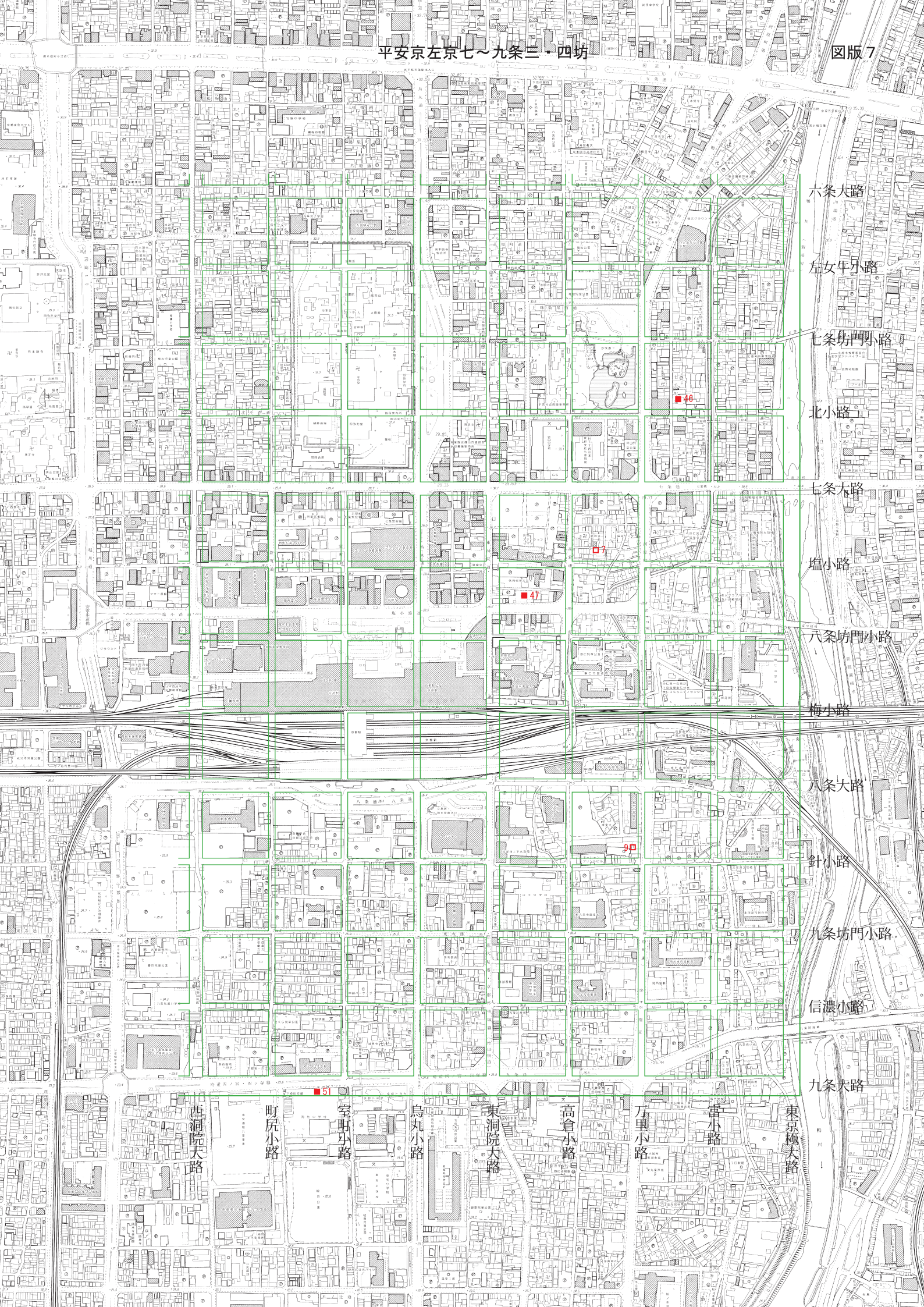
6

45

48

49

60



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西洞院大路

町尻小路

室町小路

烏丸小路

東洞院大路

高倉小路

万里小路

雷小路

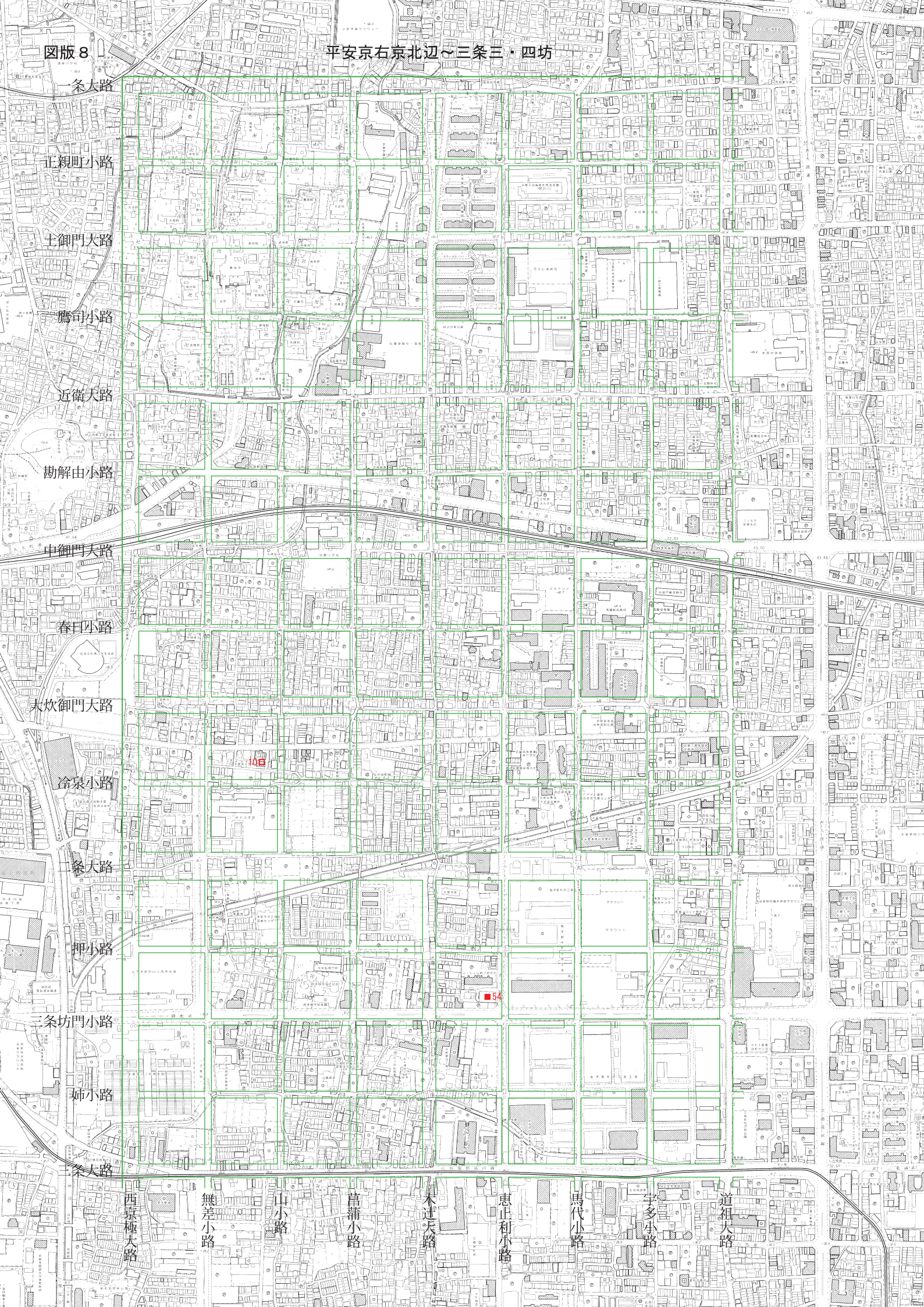
東京極大路

46

47

48

51



条大路

正親町小路

土御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

太炊御門大路

冷泉小路

条大路

押小路

三条坊門小路

姉小路

条大路

西京極大路

無差小路

山小路

菖蒲小路

木辻大路

恵止和小路

馬代小路

宇多小路

道祖大路

10日

54

条大路

正親町小路

上御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

条大路

押小路

三条坊門小路

姉小路

三条大路

道祖大路

野寺小路

西堀小路

西朝負小路

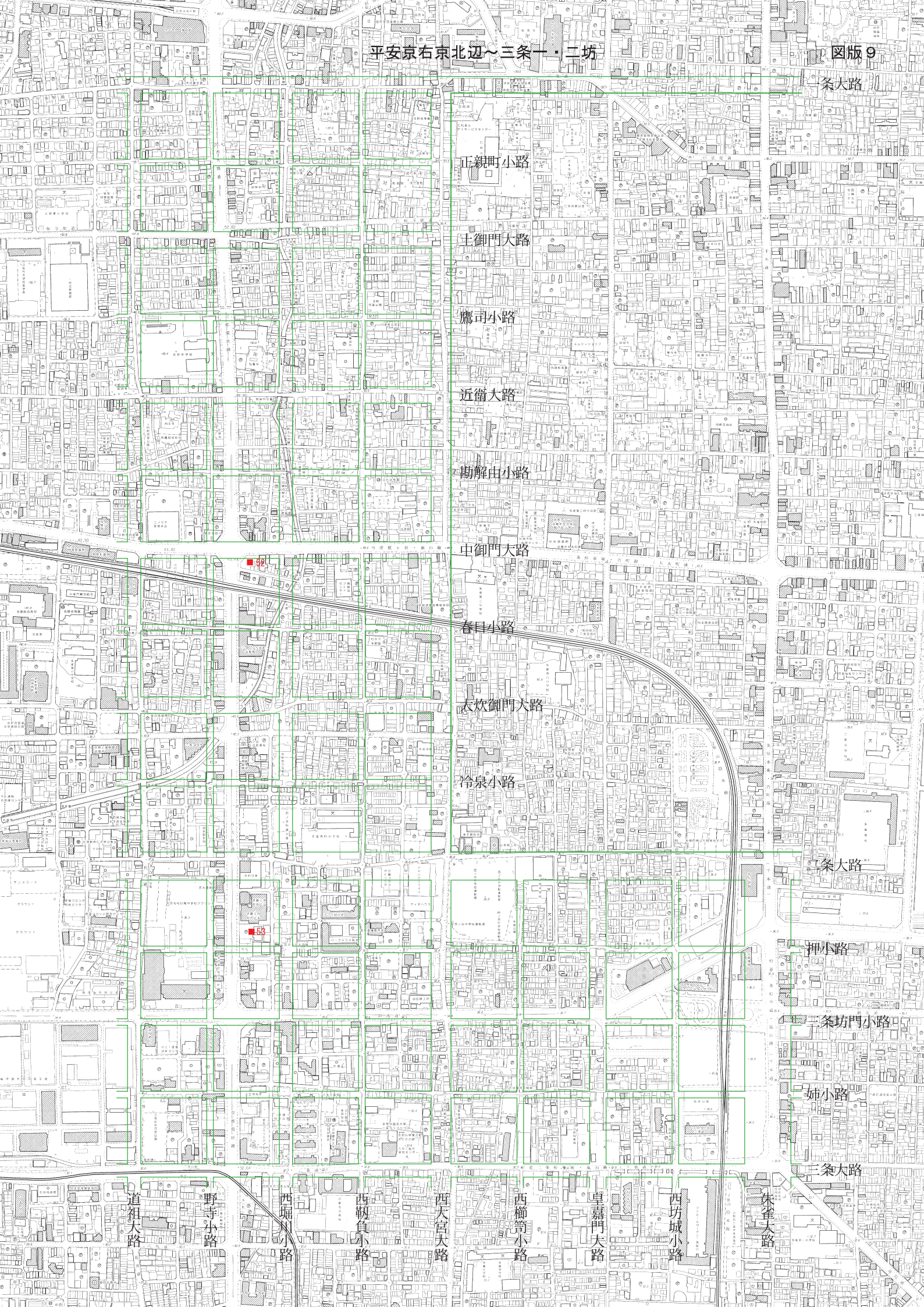
西大宮大路

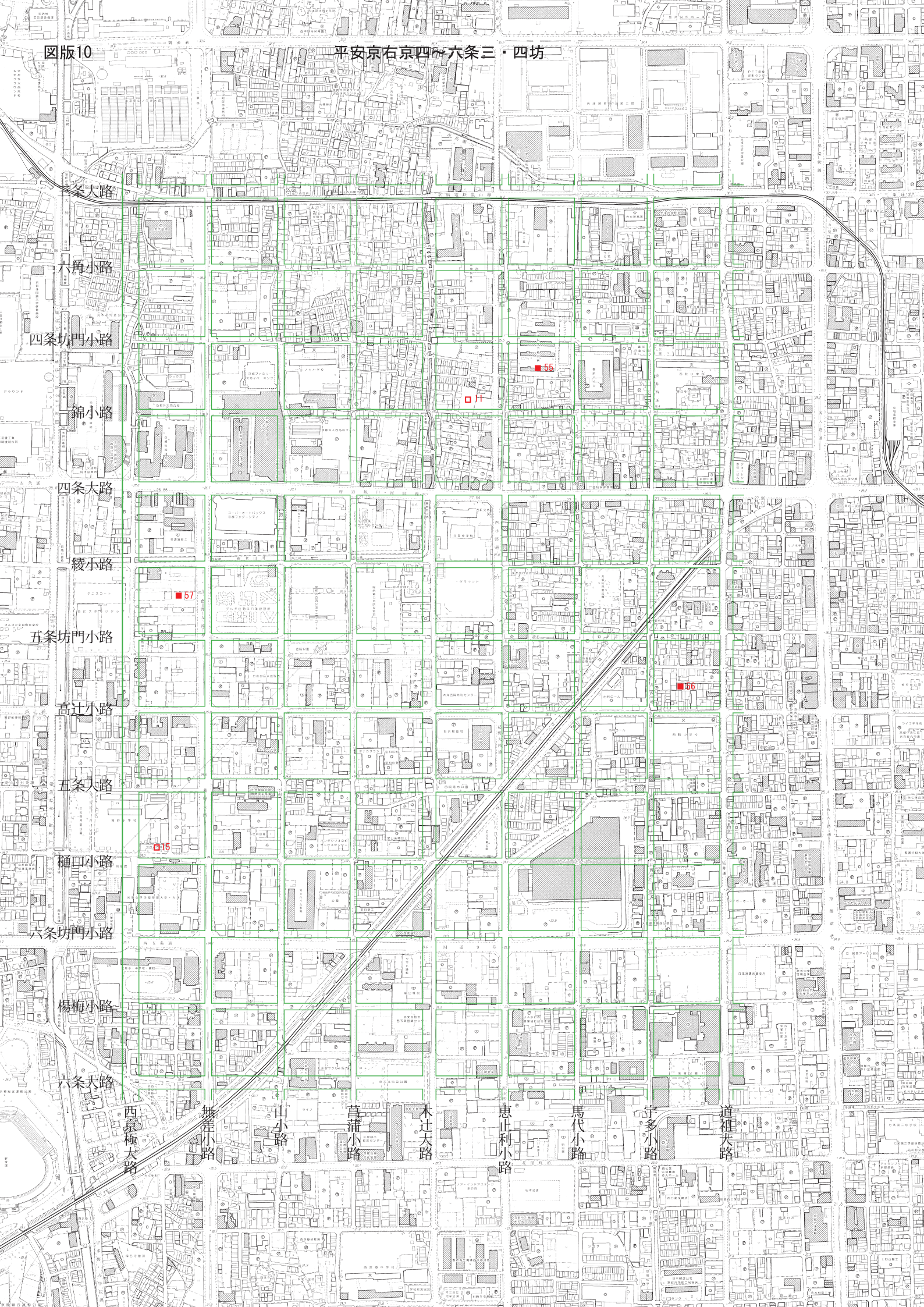
西櫛宮小路

皇嘉門大路

西坊城小路

朱雀大路





六条大路

六角小路

四坊門小路

錦小路

四坊大路

綾小路

五坊門小路

高辻小路

五坊大路

樋田小路

六坊門小路

楊梅小路

六坊大路

西京極大路

無差小路

山小路

葛浦小路

木辻大路

惠止利小路

馬代小路

守多小路

道祖大路

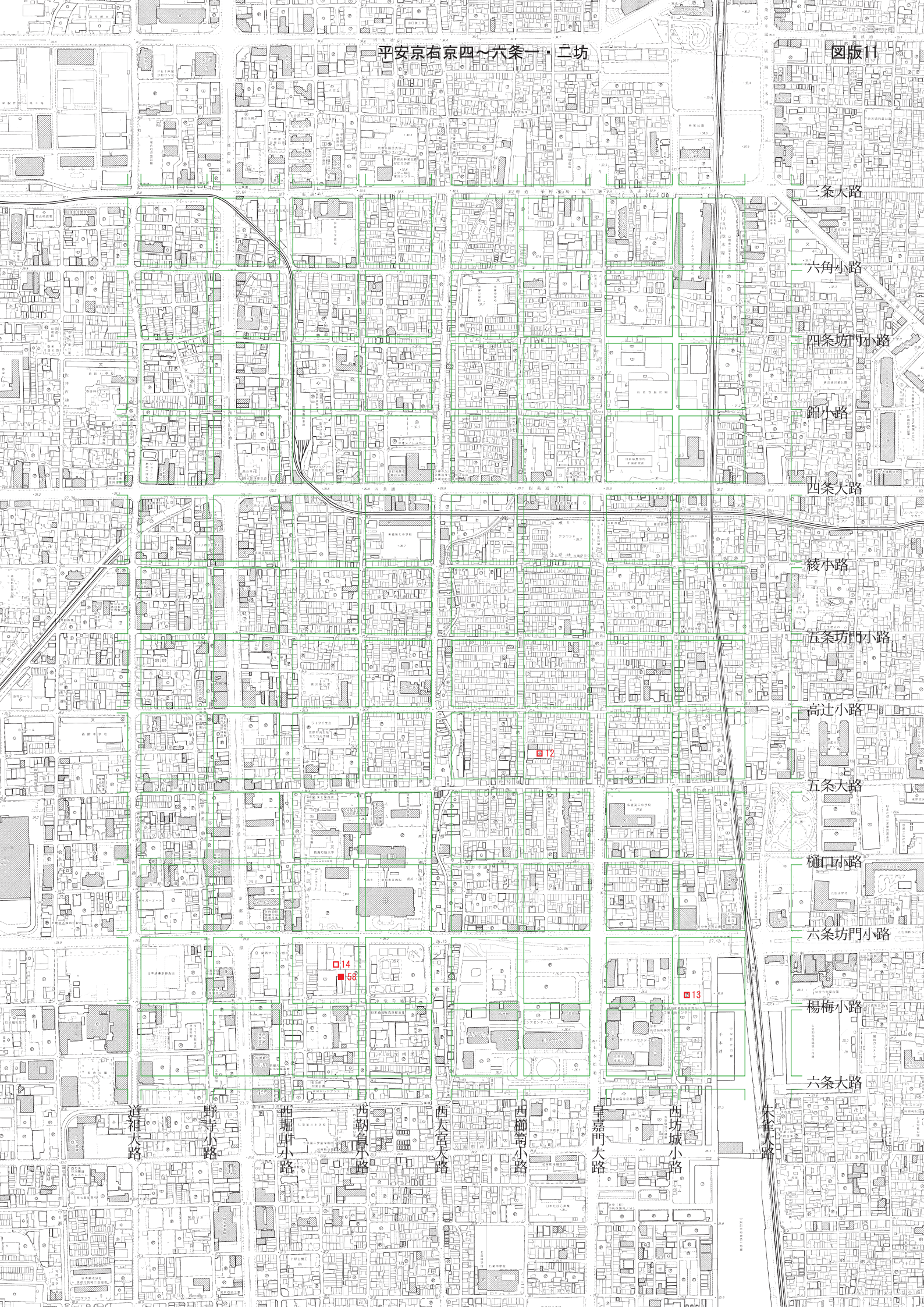
55

58

57

56

59



三条大路

六角小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

樋口小路

六条坊門小路

楊梅小路

六条大路

朱雀大路

西坊城小路

皇嘉門大路

西櫛箭小路

西大宮大路

西朝負小路

西堀射小路

野寺小路

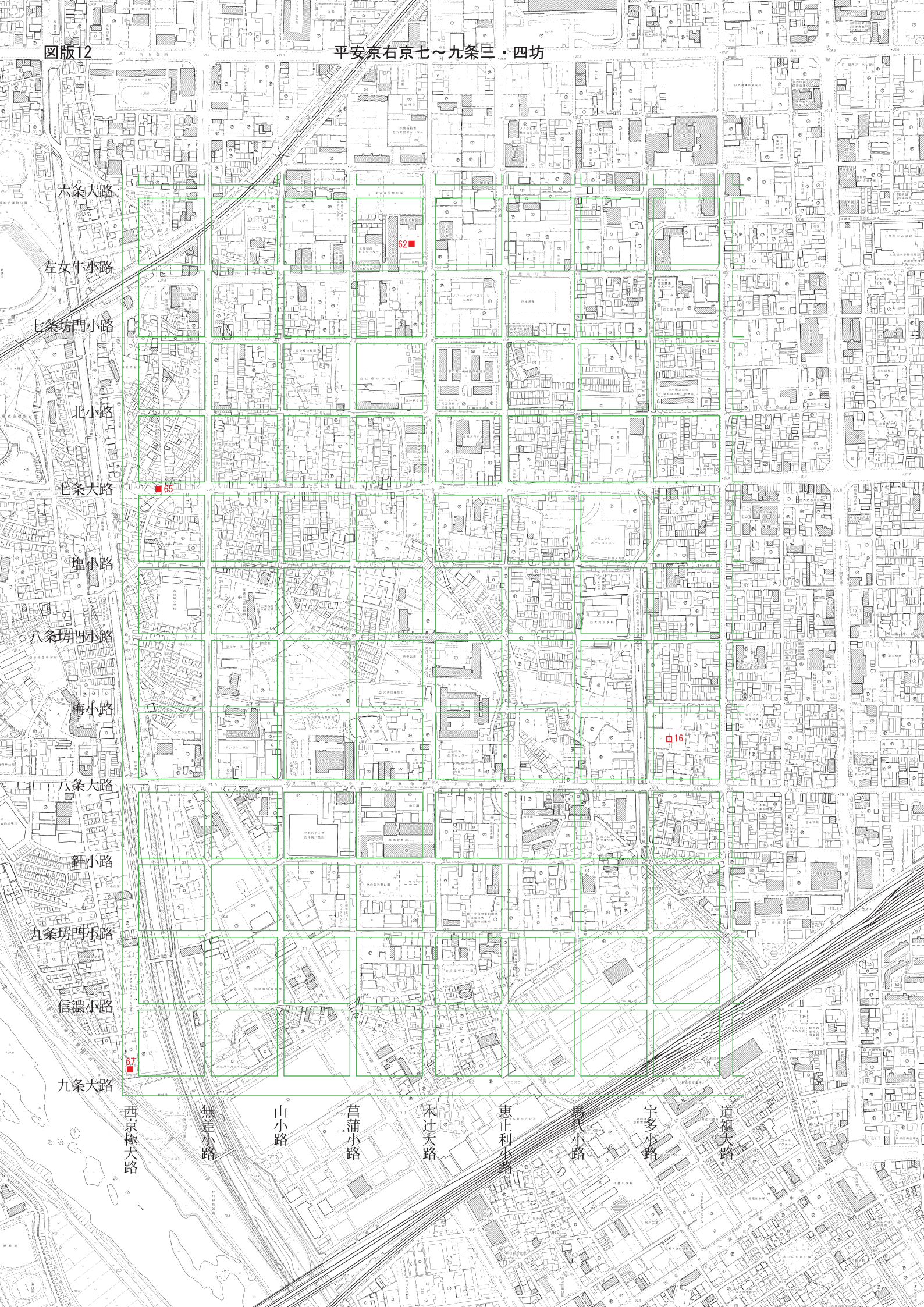
道祖大路

12

14

58

13



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西京極大路

無差小路

山小路

菖浦小路

木辻大路

恵止利小路

馬代小路

宇多小路

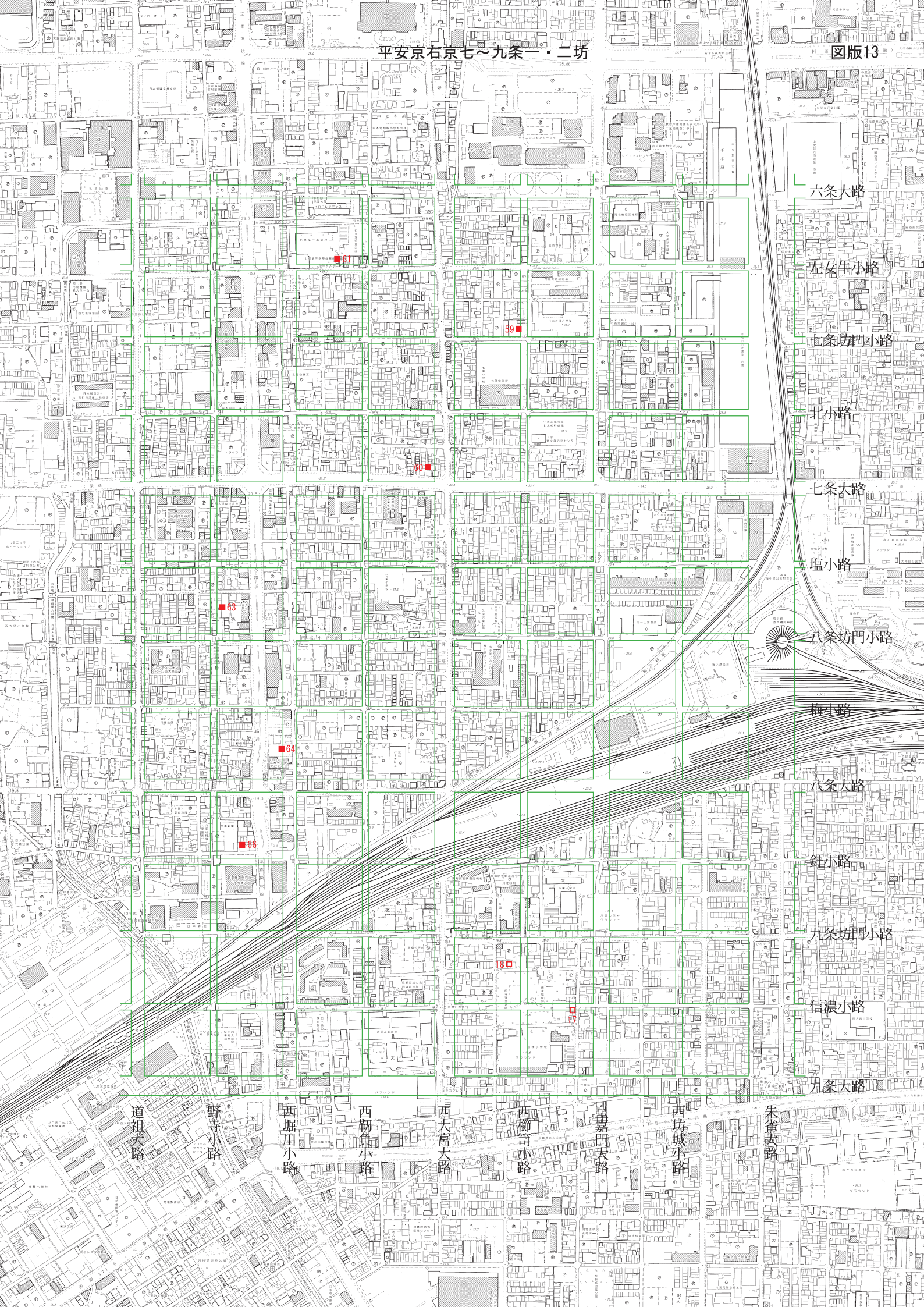
道祖大路

62

65

16

67



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

鉦小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

道祖大路

野寺小路

西堀川小路

西鞠負小路

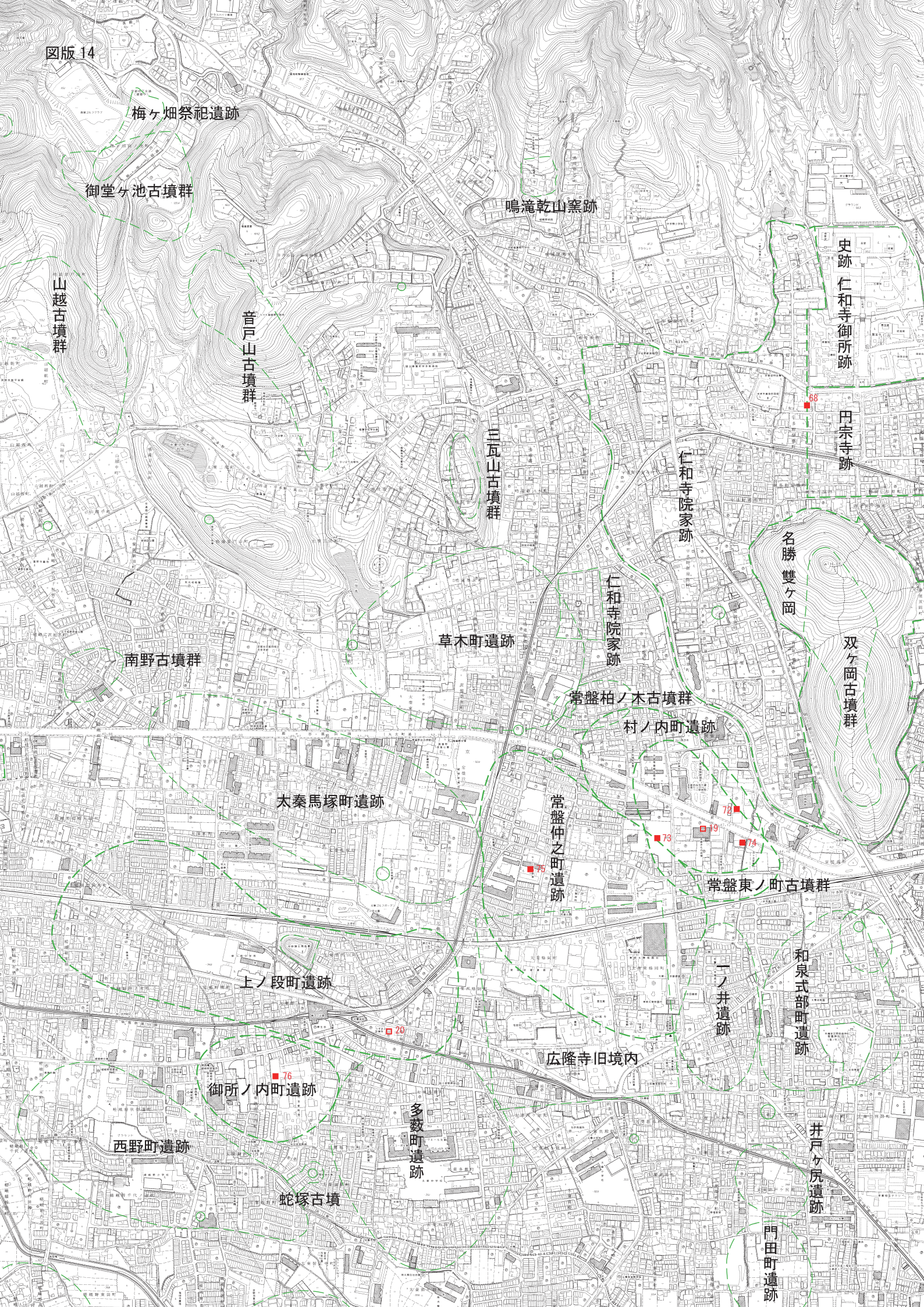
西大宮大路

西櫛笥小路

白鳥嘉門大路

西坊城小路

朱雀大路



梅ヶ畑祭祀遺跡

御堂ヶ池古墳群

山越古墳群

音戸山古墳群

鳴滝乾山窯跡

史跡 仁和寺御所跡

仁宗寺跡

三瓦山古墳群

仁和寺院家跡

南野古墳群

草木町遺跡

仁和寺院家跡

名勝 雙ヶ岡

双ヶ岡古墳群

常盤柏ノ木古墳群

村ノ内町遺跡

太秦馬塚町遺跡

常盤仲ノ町遺跡

常盤東ノ町古墳群

上ノ段町遺跡

一ノ井遺跡

和泉式部町遺跡

御所ノ内町遺跡

廣隆寺旧境内

多藪町遺跡

西野町遺跡

蛇塚古墳

井戸ヶ尻遺跡

門田町遺跡

70

71

72

73

74

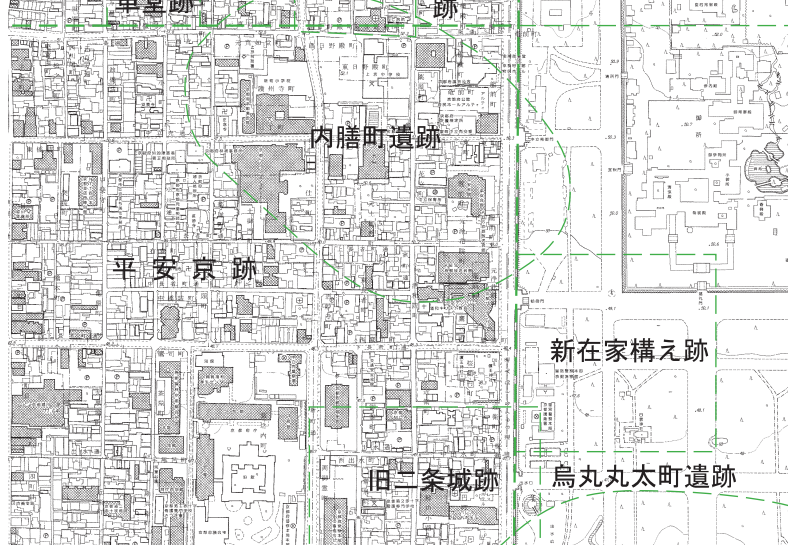
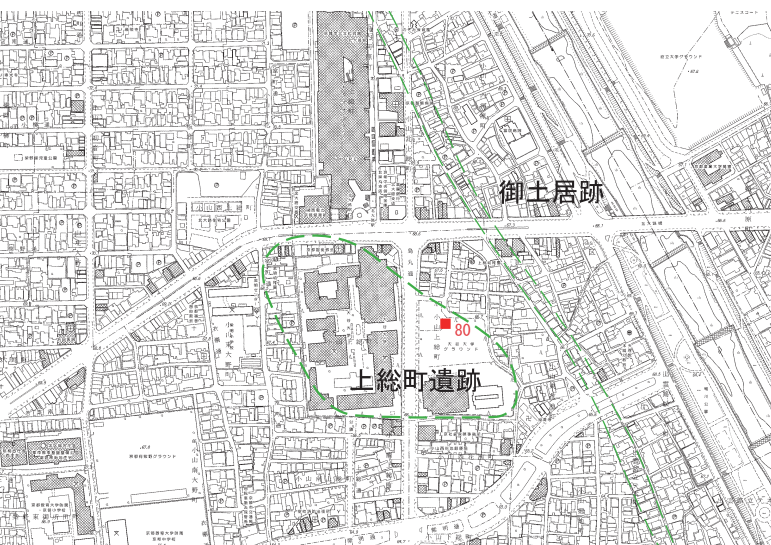
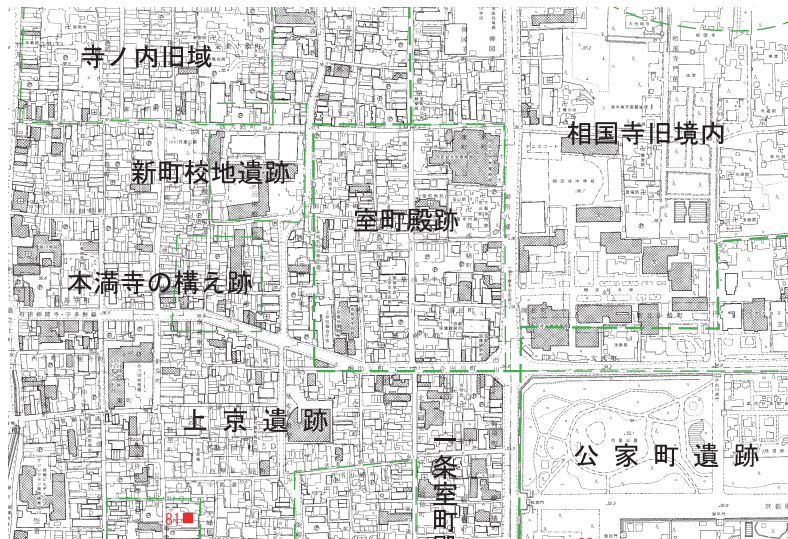
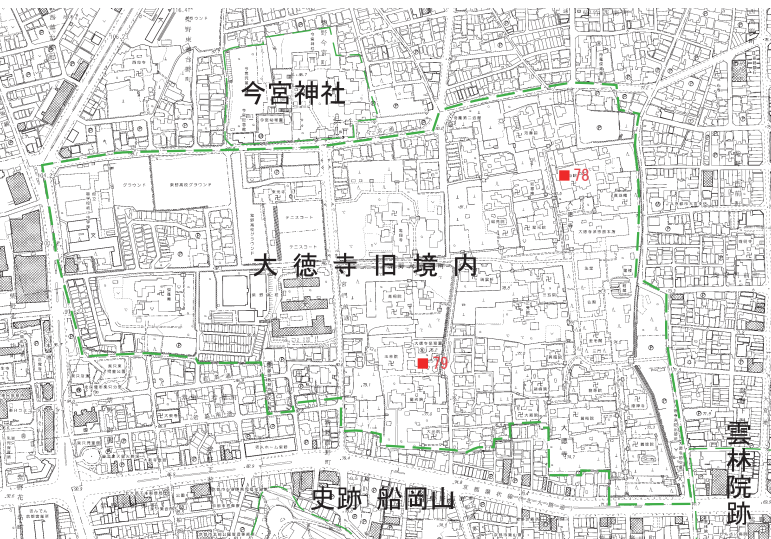
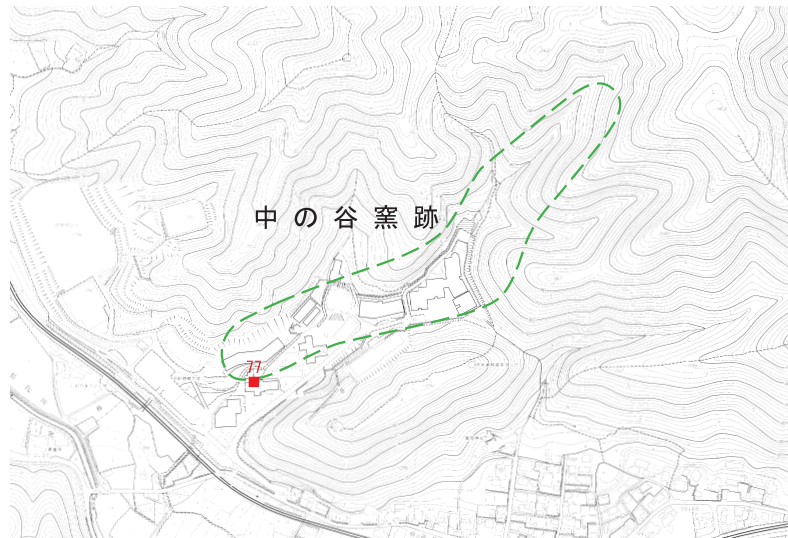
76

77

78

79

80



相国寺旧境内

上京遺跡

常盤井殿町遺跡

寺町旧域

御土居跡

下鴨城跡

公家町遺跡

平安京跡

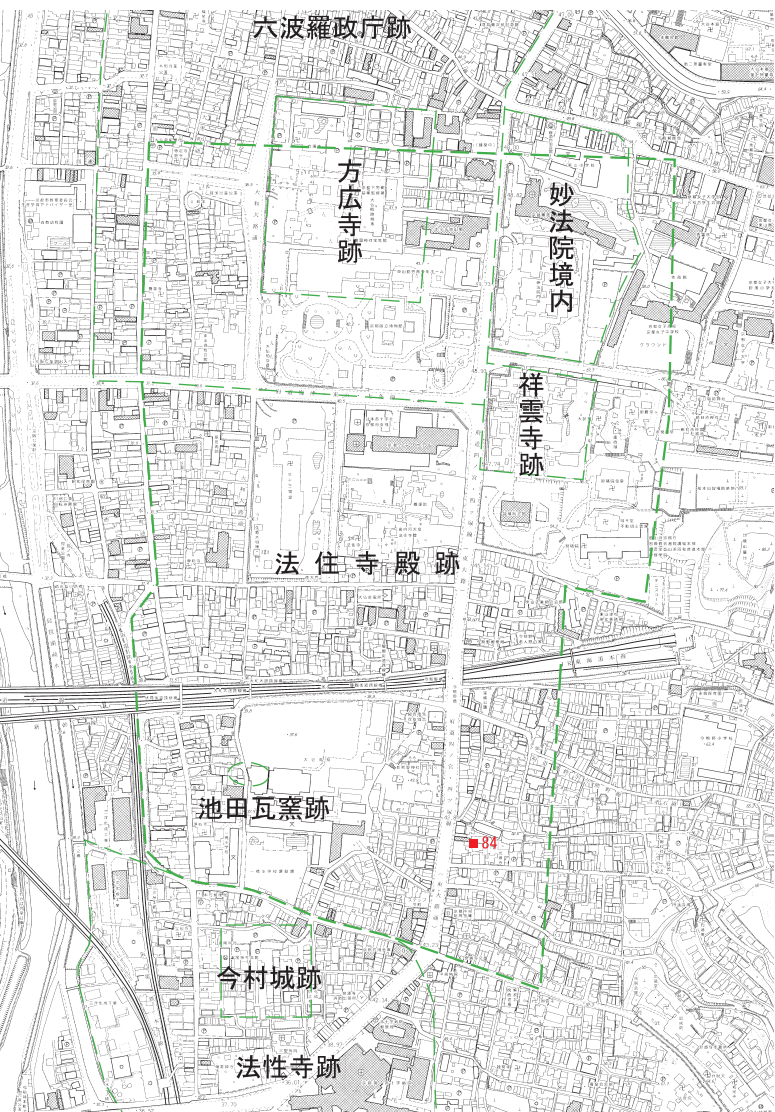
法成寺跡



修学院遺跡



山科本願寺南殿跡



六波羅政庁跡

方広寺跡

妙法院境内

祥雲寺跡

法住寺殿跡

池田瓦窯跡

今村城跡

法性寺跡

84

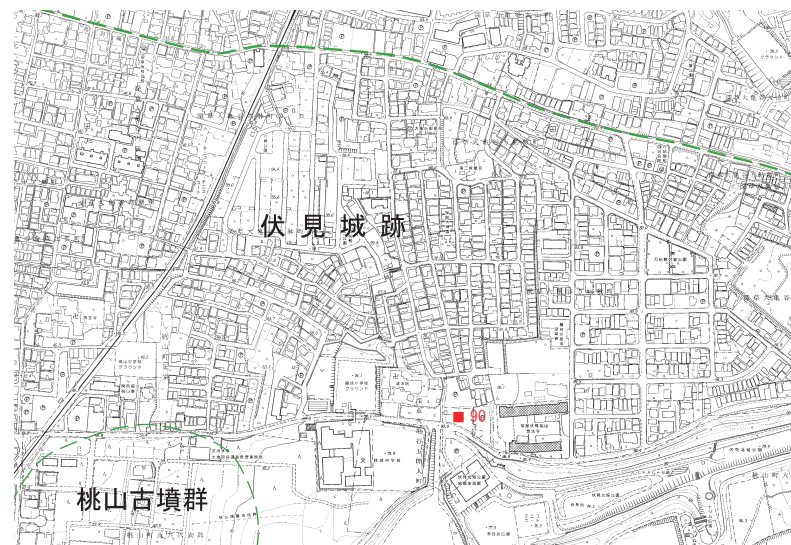
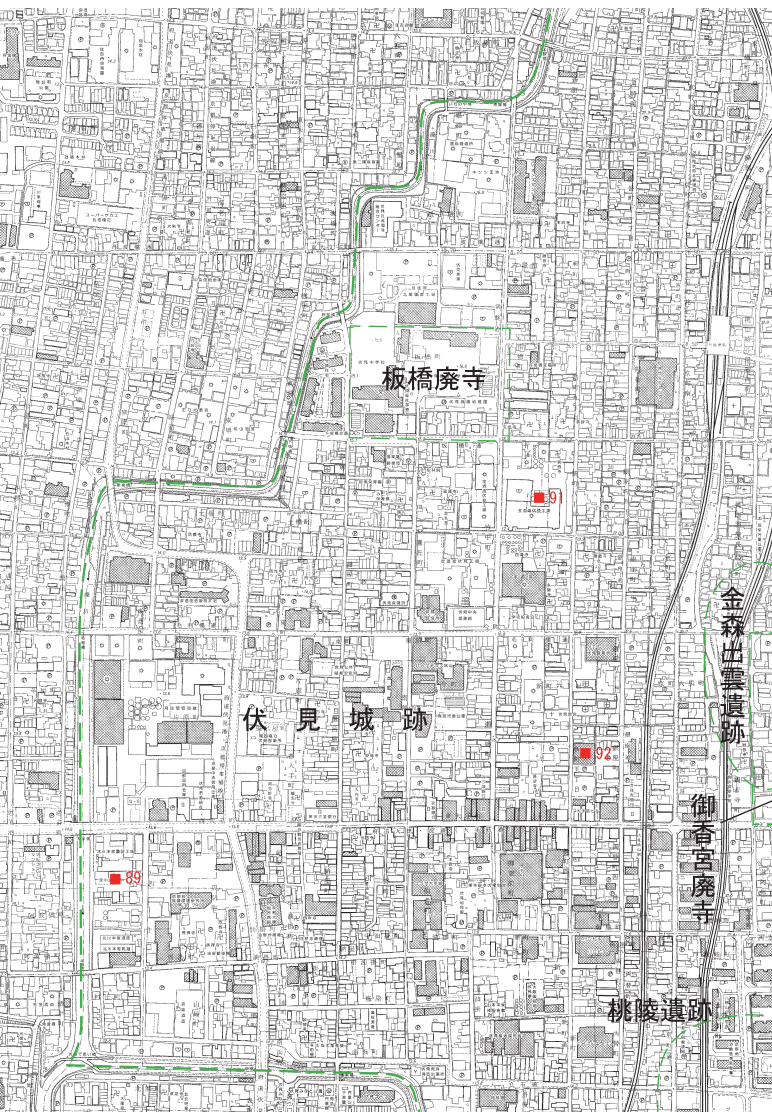
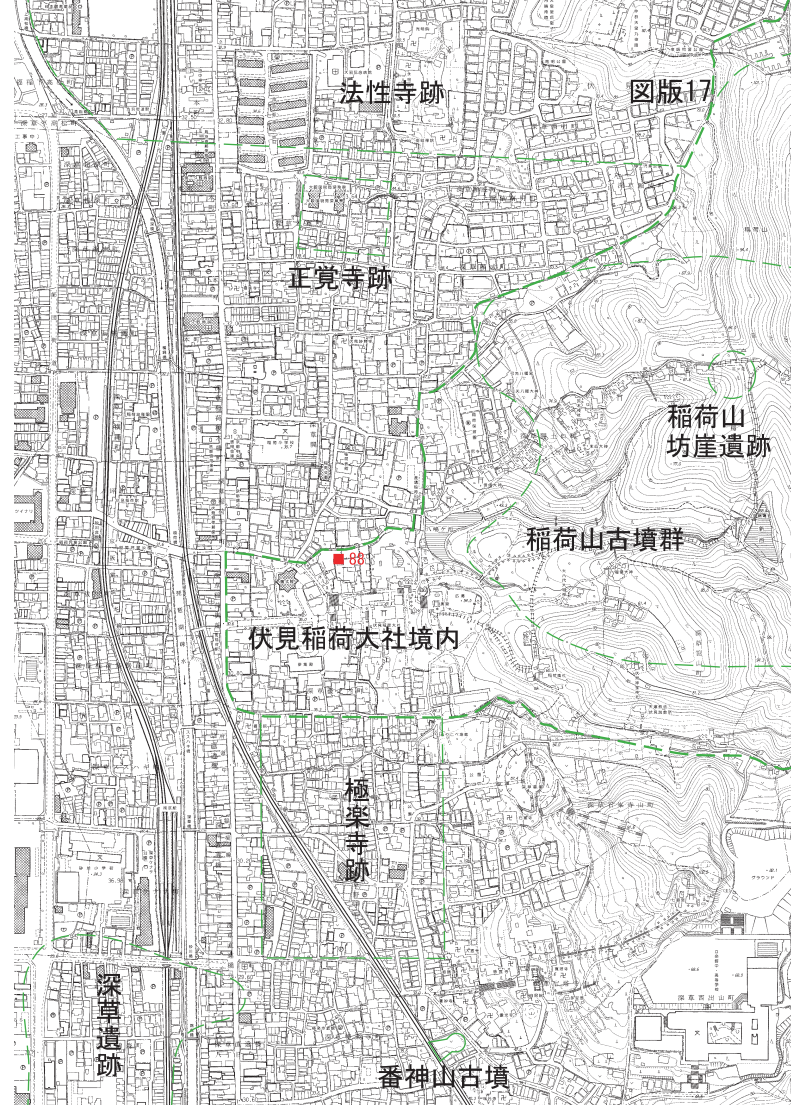
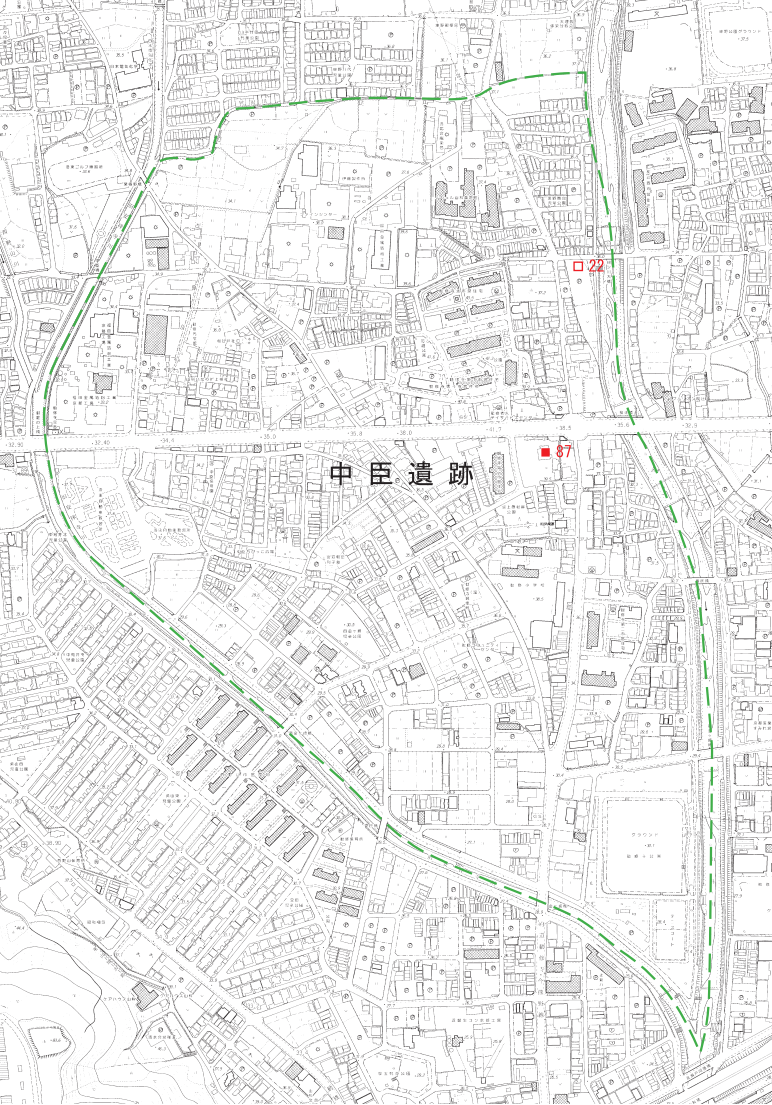


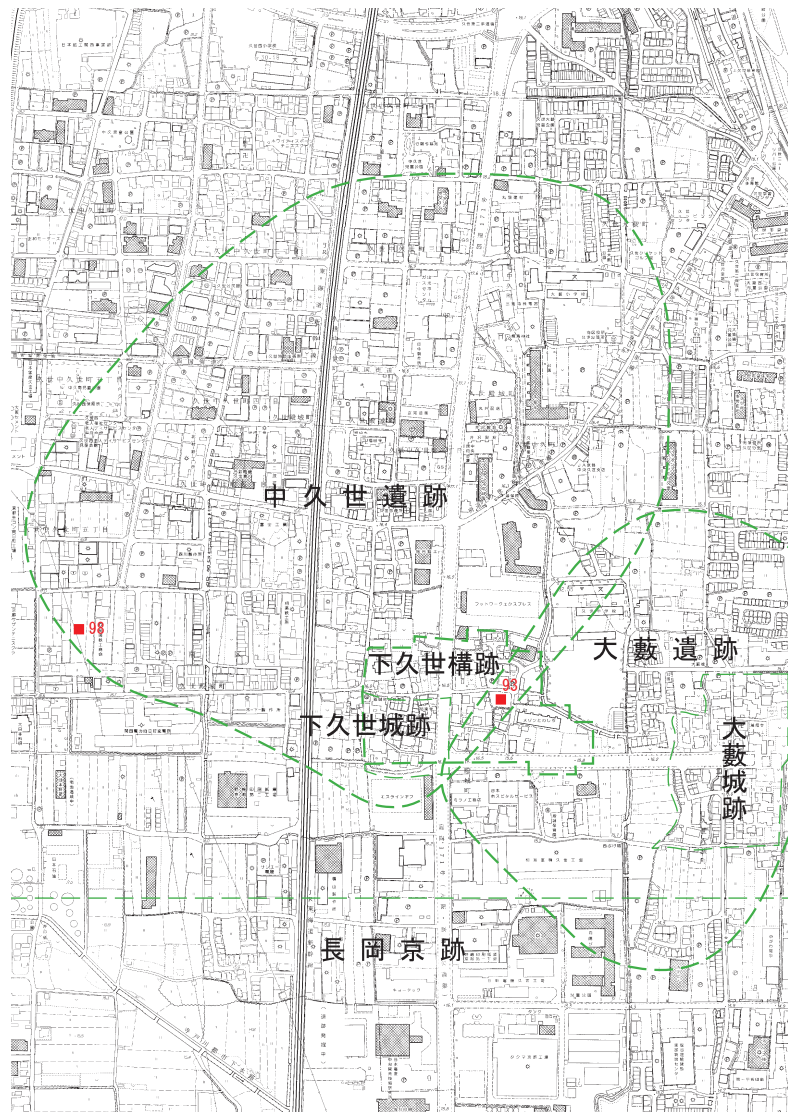
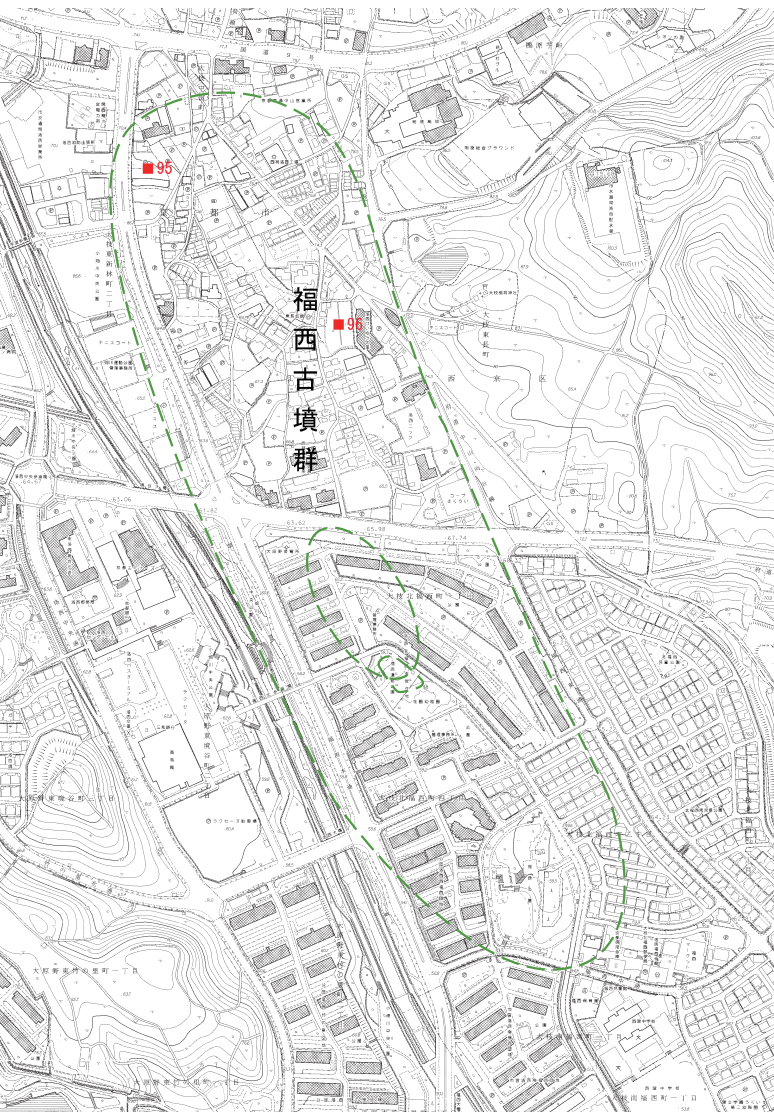
山科本願寺跡

85



左義長町遺跡







上鳥羽遺跡

上鳥羽城跡

上鳥羽岩ノ本城跡

竹田城跡

鳥羽遺跡

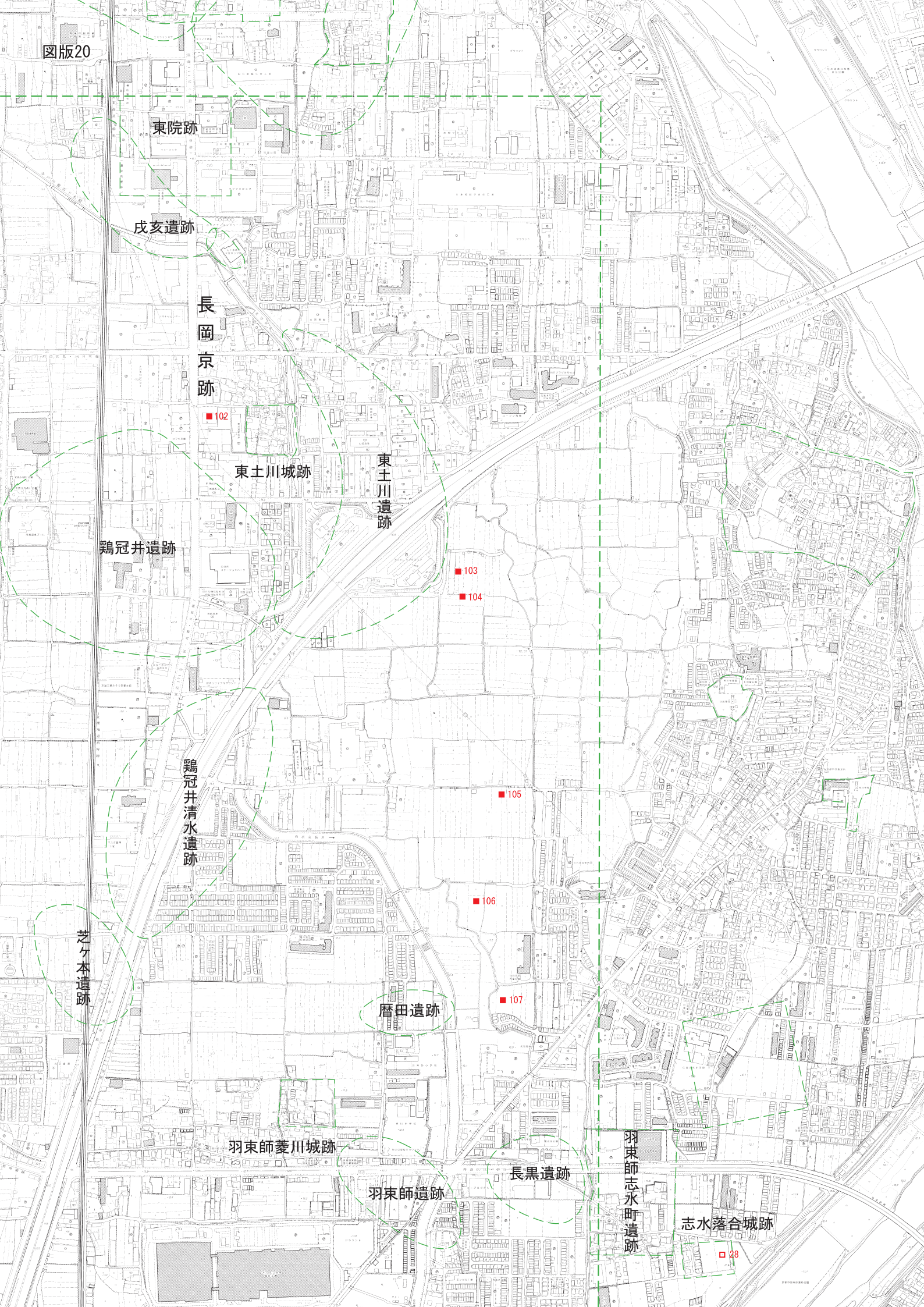
史跡 安樂壽院境内

鳥羽離宮跡

史跡
鳥羽殿跡

鳥羽遺跡

下鳥羽遺跡



東院跡

戌亥遺跡

長岡京跡

■ 102

東土川城跡

東土川遺跡

鷄冠井遺跡

■ 103

■ 104

鷄冠井清水遺跡

■ 105

芝々本遺跡

■ 106

■ 107

曆田遺跡

羽東師菱川城跡

羽東師遺跡

長黒遺跡

羽東師志水町遺跡

志水落合城跡

■ 28

■ 29

京都市内遺跡試掘調査報告

平成20年度

発行日 2009年3月31日
京都市印刷物 第203134号
発行 京都市文化市民局
編集 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13
TEL.(075)761-7799
印刷 ワールドプリント TEL.(075)741-1931



